

---

# 絶海のレムリア

気のせい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶海のレムリア

### 【Zコード】

N1263W

### 【作者名】

氣のせい

### 【あらすじ】

不自然な社会になるよう意図的に造られた国、絶海のレムリア。現実的に絶対成り立ちはしない要素、ありえない要素を詰め込んだ、コートピアのようでディストピアのよつな社会。その国の中で、國の外を純粹に見てみたいと願う者、正直そうでもない者達が、外へ探索に出る資格を得るための最初の試験を受ける。

設定のベースはほぼ同じで新しく書き直した物を投稿しました。原版のものはArcadia様にも投稿させて頂きました。

## 絶海のレムリア 原版・現在編（前書き）

あらすじの物は第三話目に投稿しました「探索士課程試験」を御覧ください。

こちらは上記のものを書きなおす前の原版です。

絶海のレムリア。

その大陸を俯瞰すれば、中心点の古風な建物を基点に縁豊かな田畠の風景と人々の住む街々が交互に繰り返される。

その間には川や湖や林や森や山があり、大陸の末端に至ればとうとう青い青い海に出る。

大陸の上空、大気の性質の変わる域内には一つの浮遊島が悠然と存在し、その大陸周囲の空には空を飛ぶ船が鳴き声を上げて飛ぶ鳥達と共に絶え間なく飛び交う。

人々は完全に平等では決してないが、生活に不自由する者は一人たりとして存在せず、街々からは常に人々の笑顔と明るい声が響く。しかし極端なまでにある者のエゴが貫き通された国。

それが絶海のレムリア。

コートピアでありディストピア、ディストピアでありコートピア。

家は図書館のようで、正しく本屋だ。更に言えば、隣の施設とも繋がっている。

本屋というからには、店内には棚が幾つも並び、どこに田をやつても大抵本が目に入る。

きちんと並べられているその様は、僕が言うのも何だが壯觀だと思つ。

店内は、天の光を窓からたっぷり取つていて、淡い橙色の光を放つ照明もあり素直に居心地は良い。

大事な客入りはと言えば、閉店時以外で客がいない時がまず無く、耳を少し傾けてみれば誰かしら話しているのが聞こえてくるぐらいだ。

それというのも、隣の施設と繋がっているから。

お隣さんは正式名称「探索士協会真都第一支部」と書か。

探索士とは、基本的に空を飛ぶ船、飛空艇に乗って遠くに冒険といつ名の探索に出かけるのを正式な職業とする人の事だ。

彼らが探索士協会に用があつてやつてくる時は、大体家の店にも用があり、またその逆も言える。

もちろん図書館のような本屋だから普通の客も多く賑わっている方だ。

そんな中、僕はいつも通り。

修学館で今日も授業を終えてこの自宅兼店に帰宅してから、一階に比べると静かな二階のカウンターでひたすら色々読み漁っている。カウンターには濃緑色のエプロンを着た少年の他もう一人同じエプロンをした従業員がいて、丁度客の対応をしている所へ、更に別の男が近づいてきた。

「よ、坊。読んだるとこ悪いが、エステス湿原へのルートにその生態と地形情報が欲しくてな」

「お構いなく。エステス湿原なら……」

顔を上げて言いながらメモに素早く幾つか走り書きをして、それをふわりと浮かせる。

「この辺りをどうだ

「助かるよ。じゃ」

男は浮遊するメモを受け取り、空いたる片手を軽く上げて手帳での本棚へと去つていった。

それを見送ると、また途中の本に手を落とす。

少年は再び軽快にページをめぐり始めると、客の応対を終えた従業員が声をかける。

「ユイス君ほんとに良く覚えてるね」

「慣れてるので」

「それでもその記憶力は凄いよ。将来はぜひするの? やっぱり?」

「で?」

従業員は左手をカウンターの棚に翳し、身長の一倍ぐらである高さから一つ用子を抜き出しながら感心して言った。

「うーん……好きで本読んで手伝いもしてるけど、将来って言わると何だかぼんやりして。修学館に通ってる時点で余り考えてないようなものですけど」

「そつかあ。でも、ま、なるようになるよ。私もその修学館上がりだし」

ははー、と苦笑して従業員は手元に届いた用子をぱらぱらとめぐる。

「そう、ですかね」

果たして、僕はこのままなるようになるのだろうか。

レムリア真国では国民は一律に八年間の基礎教育を初学館で学び、それを修了した後は主に収穫館、技工館、専士館などなど……に進むが、僕が選んだのはそんな幾つもあるうちの修学館。

修学館とは、何となく勉強を続ける人が行くような、正直言つて目立つた専門性の無い所と言われている。

基本的に最も高収入で安定している収穫士ハーヴェストになる収穫館が一番人が多く、それ以外が似たり寄つたり。

僕が修学館に進んだのは様々な分野の情報を得られるのが家に似ていたから。

なるようになると、修学館を修了したらそのまま家で働くのが一番ありそうだ。

「よつす、コイス！」

元気な呼び声が響いた。

一階から階段を無視し勢い良く空を飛んでコイスのいるカウンタ一目掛けて全身を革製の服で包み、額の辺りにゴーグルをずらした少年が現れた。

「一昨日出たつていうカイル・メル・テルの探索記取つてくれてるか？」

カウンターの前でぴったり床に着地した少年は活きの良さそうな

パツチリとした目を輝かせる。

「ハーツ、その前に店内でそんな速く飛ばない」

ユイスは反対にげんなりした目でたしなめた。

「すまんすまん。……で？」

「……あるよ。ほら」

ユイスは諦めて椅子に座つたまま右手をサッと動かし、後ろの棚から一冊を抜き出して目の前へと寄せる。

「おおー！ 来たあ！ ケセンデム浮遊島探索記！ 内容言つなよ、ユイス、絶対だかんな」

人差し指を突きつけて言った。

「はいはい」

「よつし。失礼！」

人の返事をまるで聞いていなさそうなハーツはワクワクを全身で表し、カウンターにひょいと飛んで乗り込みユイスの隣にあつた丸椅子に座り、探索記を開いた途端完全に黙つた。

その様子を横目に見ていた従業員はくすりと笑い、ユイスは無言で仕方ないなあとハーツを一瞥して自分の本の続きを読み始めた。

ハーツが目を皿のようにして探索記一冊をじっくり読み終える間、ユイスはやつてくる客に尋ねられればそれに答えるながら数冊の本を読み終えた。

ハーツがパタリと本を閉じ、息を吐く。

「はあー、俺も行つてみたいなー」

「そう言つてる割にハーツは飛空艇の技工士、と」

「だつて俺手先は器用だし、どうせ探索士になるんだつたら先に飛空艇熟知した技工士になつとけば単独探索もし易いって言つしさ」

「カイルと同じようにつて？」

ハーツは丸椅子に両手を合わせてつき前かがみになる。

「まあーなー。ユイスこそ下手しなくても並の探索士よりも探索記読みまくつてるだらうけど、読んでるつて事は探索士に興味少しあるだろー？」

「ユイスは天井を見る。

「無い訳ではないけど、なりたいかつていつとやつぱり違つ氣がする。人生130年、探索士はなあ……」

探索士はレムリア真国で最も危険な職業だ。

「ま、それは俺も同じで先に技工士を選んだ。職人技つてのも燃えるぞ」

「ハーツはそういう所良いよね。……同じ年でどうしていつ、やる気が違うんだろ?」

「いや、ユイスはやる氣はあるだろ」

ハーツがゴーグルに触れながらはあ？ といつ顔をすると、ユイスもはあ？ といつ顔をする。

「ど？」「が？」

「どいつていうか、本を読むやる氣。普通無理だろ。何その本の山。しかも全部覚えてるだろ？」

ハーツはユイスの近くにある本の山を指さした。

「本を読むのは癖みたいなものだからやる氣とか、何も出してるつもりは無い。覚えてるのは、おまけ、かな。多分覚えてなくとも僕は文字を読み続ける気がする。『お前から記憶力取つたら何も残らないよな』なんて言われた事あるけど、実際その通りだと思うし」

「それ、言つた奴が僻んでるだけだろ」

顔を覗めたのを見て、ユイスは爆笑する。

「それ、言つた奴はハーツだから」

素つ頓狂な声が上がる。

「うえ？ 僕かよ！ いつよ？」

「五年前」

くつくつと笑いながら答えた。

「んなの覚えてねえよ！」

「ハーツは仕方ないなあ」

ハーツがため息を吐く。

「そりゃ仕方ねえよ。僻んですいません。……はあ……ま、確かに

ユイスと本を離すとか無いなあ。でも敢えて言つが、あれは違うこれは違う気がするだとかやつてもいないので言つのはどうじよ？ そんなどつたらハーヴェストか……でなきや真逆で国嘗士にでもなれとレムリア様は言いそうだぜ」「ハーヴェストはまだしも、国嘗士はそもそも自発性が無いようじやね……」

国嘗士はレムリア真国において国家権力を持ち、最も安定した低収入が得られ、出世すれば出世する程収入が減るといつ……そんな国嘗に携わる職業だ。

収入について文句を言つぐら「ならハーヴェストになれというのがこの国の暗黙の了解。

自分が国を支えているという強い自負を持ち、社会に貢献していふ事に対しても対価を求める清い心を持つてないと、まずやつてられない。

それでも毎年一定の人が国嘗士となるからこそ、この国は成り立つていてる。

色々な人がいるんだなあと思つ。

「そうだけど。その割には、ユイスは今も図書館の国嘗士みたいな事やつてると思つぜ」

「どうだろ。本を報酬とすれば受けして、返してるような気がする」

「何でまたそこで屁理屈みたいな事言つし。まーいいけど」

こんな風に修学三年目、十五歳の僕は日々このまま後三年間過ごすのかとこの時心のどこかで思つていた。

次の瞬間、一階からどこからどう見ても最高に最低限文化的な制服を完璧に着こなす国嘗士が現れるまでは。

それは僕の曾祖父だった。

白一色の髪をしたユイスの曾祖父のその嚴のよくな表情は一切揺らがない。

「久しいな、ユイス。お前に文だ」

どん、と響く重い声だった。

思わず慌てて立ち上がり、差し出されたその封筒を両手で受け取る。

「は……はい。久しぶり……です、大爺ちゃん」

その空氣にハーツは声が出ず、隣の従業員も驚いていた。

「コイス、『後で』まず一人で良く読み……充分考え返事をするようにな。ではな」

言つて、コイスの曾祖父は見送る暇も無くあつといつ間に去つていつた。

取り残されたようにぼうつとするコイスにハーツが声を絞り出す。

「なあ、その手紙……つまり、国からお前に……？」

「ん。ああ」

我に返つて封筒をよく見ると差出人は確かにレムリア真国だった。

「……国だよ」

レムリア真国は周囲を海に囲まれる單一大陸に、その上空の浮遊島「空の丘」を國土に加え、ただ唯一存在する絶海の国だ。

真国はその中枢であるレムリア真殿を中心としてそこから同心円状に、農地、生活区、農地、生活区、農地……と繰り返して広がつていいくよう基本的に造られ、それに従い標高も徐々に下がつて海へと近づいていく。

もちろん真殿から離れれば離れるほど山林、河川や湖などがある為に例外的なパターンも増えていくが、一つの生活区毎に街を形成していると言え、真都自体は真殿から第三生活区までを指す。

真殿の建つすぐ裏側には扇状約六十度にレムール山脈と呼ばれる広大な岩山が存在し、真殿はこの山脈を利用して麓に造られているという。

そして、レムール山脈の真上、地上の引力の正常に働く常気圏の

更に上、外気圏という無重力域に、微重力を発する「空の丘」が浮かぶ。

「空の丘」には正規の生活区は存在しないが、そこは主に探索士達の駆る飛空艇の外気圏用発着場であり、彼らの空の拠点だ。

そんな頭に入っているだけの事をふと確認しながら、国嘗士を曰指してもいなかつた、修学館に通い記憶力が取り柄の言わば本の虫の僕に、この国の中核は何の用があるのだろうと不思議でならない。曾祖父から封筒を受け取つたあの日から六日後の今日、届けられた最高に最低限文化的な、質素を極め尽くした制服を着て、指定された時刻に間にあうよう僕は真殿の通用門に到着した。

別に緊張した足取りで歩いてきた訳ではなく、第一生活区に住む僕は地上から膝丈程度の高さで低空飛行する真殿行きの輸送艇に乗つて、でもやつぱりずっと緊張したまま座つてやつてきた。

というのも、僕以外にも同乗者は当然いて、その殆どが国嘗士の服装をしていたからだ。

見かけない怪しい奴だ、と誰かに話しかけられるのではないかと思つていたが、結局その心配も無意味で、僕を一度見た後はそれきり国嘗士の人達は僕を気にも止めていない様子で、その目にも何か含むような物も感じられなかつた。

第一生活区を抜け、緑豊かな農地に入るといよいよ莊厳な真殿の外觀が視界に近づき、国は色々最低限文化的と言つていても以前見た事もあつた通り、国の中核の建物は流石にとても文化的だった。輸送艇から降りると、同乗者はさつと通用門で身分証明して次々中へと入つていつてしまつた。

一人残される形になつた僕は手紙に同封されていた通用証を恐る恐る取り出し、衛士にそれを見せた。

「通りなさい」

そう、衛士はその一言だけを簡潔に言つた。

まだ子供にしか見えない、事実子供の僕を大して気に止める様子も無しに。

言われるままに通用門を通りとすぐ右手に真殿の入り口が見えた。一見何の装飾も施されていないすらりとした石造りの柱は近づいて見れば異様に精密な幾何学紋様が彫つてあり、地味に凝った意匠が施されている。

初めて門より先の中に入つた僕は、ついつい目移りする割に同時に緊張し続けたまま、とうとう建物の中へと足を踏み入れた。

中は天井高く広々とした空間が広がり、思わず見上げてしまった。はた、と我に返り、落ち着いて息を吐きながら改めて見渡すと、中央通路の脇に酷く質素な机が整然と並び、それぞれの机の立て札の中に「総合案内」と書かれたものが目に入る。

ユイスはいつもとは逆の立場ながら、當士に無難に尋ねると通用証の提示を求められた。

それに従つて通用証を提示すると、受付の女性當士が立ち上がり、「案内します。」と手で示した。

「分かりました」

ユイスは案内に従い、大広間の中央通路の先へと進み、少しして途中脇通路を曲がる、階段はあっても無視して飛び上がる、そしてまた再び通路を歩くなどして……ややあって一つの扉の前に到着した。

「扉は叩かずそのまま中へ」

そう言われ、ユイスは當士の案内はここまでで、中に入りはしないのだと察した。

「案内頂きありがとうございました」

礼を述べて、ユイスは扉をゆっくりと開き、中へと入る。

「失礼します」

言つて、頭を下げた。

「よく来たな」

聞き覚えのある重い声を聞き、頭を上げるとそこにはユイスの曾祖父だった。

「大爺ちゃん」

呼んだ瞬間、咳払いを返される。

「……ここでは今からナリサ士官と呼ぶよつこ」

「は、はい。ナリサ士官」

ちょっと戸惑いユイスは呼び直した。

「それで良い。少し待て」

ナリサは部屋の奥の幕へ向かい、顔を覗かせて何か小声で呼ぶと、すぐに元の位置に戻る。

部屋はそれなりの広さがあり、幕の前には背もたれのある質素な椅子が三つだけ用意されていた。

幕がめぐられ現れたのは、すらりと背の高い厳かな存在感を放つ壯絶な美人だつた。

柔らかな余裕を持つた袖と裾のある白一色で統一された、それでも簡素な服に、煌めく長い白銀の髪と透き通るような青い目が映える。

「れ……レムリア……様……？」

ユイスは信じられないものを見たように呟いた。

「その通りだ、ナリサの曾孫よ」

心底不敵な笑みだつた。

「レムリア様に名を」

「は、はい。……ユイス・リンクドルースと申します」

ナリサに促され、若干混乱しながら頭を思い切り下げて名を名乗つた。

「頭を上げよ。良くぞ来た、ユイス・リンクドルース。二人共座れ」言つて、レムリアが席に着くと、それからナリサもレムリアの左手側の席に座り、

「御意」

「失礼……致します」

最後にユイスはレムリアの向かいの席に座つた。

「お主を呼んだのは私だが、……まず幾つか質問をする。それに答え

てみせよ

「……はい」

緊張して答えると、レムリアが頷く。

「では始めよつ」

本当にいきなりだつた。

曾祖父から良く読むように言われて受け取つた手紙には「できる限り、真殿に来られたし」と良く読めという割に大体そのような感じにしか書かれていなかつたが、滅多に無い事に少し興味が沸いて「行く」と返事を出して……来てみたらこんな事になるとは思いもしなかつた。

「真歴739年、主な出来事は」

「現在に至る基礎教育の制定です」

「真歴910年、メルキアス島で発見、調味料に使われている植物の花弁の数は」

「六枚です」

「真殿の入り口から」の部屋までに通つた階段の数は

「……三十八段です」

次々記憶力を試すような質問をされ、僕は覚えている事を答えて行つた。

「……話通りか。お主、何故修学館に進んだ」

「家に、本屋の家に一番似ていて……一番本が読めるから……です」  
結局は何となく消去法で選んだような理由を、よりにこもつてレムリア様に言つのは、酷く気が引けた。

「読書は好きか」

「はい」

「仮に、延々と一人読書し続ける職業があつたとして、やりたいか」「それは……本当に、ただ読書するだけの職業ですか？」

「そう考えて良い」

聞いて、直感的にそれは違う気がした。

「それは……やりたくありません」

「……お主の本を読む行為の心の根底には、何がある」

「」の問いに、本を読むのは癖だ、などと答えてはいけないのだと  
思った。

自分の心に問い合わせると、レムリア様はそう言つてゐるのだと…。

「すぐには答えられぬか」

「申し訳ありません」

「良い。ならば私が一つ当てて見よう」

手で制し、不敵に笑つた。

「え？」

「お主は、」の国が、この世界が、何故『」に在るのか』……それを知りたいのではないか？」

心の奥まで見透かされるような透き通る青いその目は、どこか妖しげで、それでいてどうしようもなく魅力的だった。

「さて……お主を呼んだ理由を話すとしよう」

「あの、答えなくとも良いのですか？」

「ん。答えたければ答えて良いが？」

「あ、えっと」

コイスが慌てると、レムリアは軽く笑い声を上げて言つ。

「その様子を見るに全てとは言わないが、あながち外れてもいい……という所であろう？」

「……は、はい」

レムリアはいきなり立ち上がり、ずい、とコイスに近づき、頭に手を置いて口を開く。

「コイス・リングルース、ナリサの後を継ぐ気は無いか

「大、ナリサ士官の後を……？」

思わずコイスは上体を後ろに倒そうとするが、頭を掴まれそれは叶わず、更にレムリアは顔を近づける。

「本人の意志を可能な限り尊重するのがこの国の理念、私の思想。無理は言わない。だが、これは私からの頼みでもある」

答えを、と促すよつてじつと見るレムリアに、コイスは口をぱくぱくさせるばかり。

ナリサがやや諫めるよつて声を上げる。

「レムリア様」

それでレムリアはコイスからすつと離れ、席に戻った。

「……本を読み続けるのもそれはそれで構わぬ。いずれ修学館を終了すればどこかしら、例えば家でお主は正式に働き、人の為になる事をするだらう。しかし、私はお主を必要としている」

レムリアは含みを持たせて言い直す。

「いや、私達はお主を必要としていると言つた方が良いか。のう、推薦人」

「はい」

ナリサが首肯した。

しばしの沈黙。

「……あの、具体的にナリサ士官の後を継ぐところのは」

レムリアが手で制止する。

「私とて説明したいのは山々だが、残念ながらいねばかりは『受ける』とお主が答えない限り何も答えられぬ。このよつな事前説明の無い話など碌でもないのは承知の上。危険そつだ、怪しい、怖い、そもそも受けたくない……そう思つなら素直に『受けない』と答えてしまいたい」

そう、レムリア様は言つたが、正直、この時もう僕の心のどこかで答えは出していたのだと思う。

例え、日常を失う予感がしたとしても。

「受けさせて、頂きます」

レムリア様。

このレムリア真国がレムリア真国と呼ばれるその最大の所以にし

て、起源にして、頂点にして、不变にして、絶対の存在。

レムリア様が持つ名は、その唯一レムリアという字だけだ。

国民には必ず字と氏が存在し、子供が満19歳で成人する年に「間」と呼ばれる名を本人が自分で付け、字・間・氏の三つを以後正式名として名乗る。

レムリア様が字だけを持つのは、レムリアという名を持つのがレムリア様ただ唯一であり、それこそがレムリア様がレムリア様たる事を絶対的に示しているからだ。

僕がレムリア様を初めてかなり近くで直接見たのは、5歳になつて入学したばかりの初学館に新入生への言葉を下さりにレムリア様が現れた時の事だつた。

僕にとって、いや、殆どの子供にとってだろうか、圧倒的存在感と壮絶な美しさというものをあの時初めて感じたと思つ。

五歳にして一目惚れしたと言つても良い。

それ以来、一年に一度催される大地の恵みに感謝する為の真国祭で遠日に、歴史書の絵や近年の歴史書では写真で見たりしたものだ。本当は本ばかり読んでいないで外に出ていれば、仮にも真都第二生活区、レムリア様が飛んでいる姿、運が良ければ近くで、もっと見る事もできたかもしれないが。

そして、記憶では今年で136歳になる僕の曾祖父ナリサ・エリア・エサリア。

人生130年のレムリア真国において、曾祖父母、場合によつては高祖父母までいる事は十分普通にある。

単純に曾祖父母というと8人、高祖父母となると16人いる事になり、当然親類縁者だらけという事を意味するが、僕の曾祖父の一人であるナリサについて言えば、本当にたまにしか会わない。

それを言つてしまふと曾祖父ナリサの妻、つまり僕の曾祖母は「空の丘」で今も飛空艇の技工士として働いているとは聞いているが、曾祖父よりも更に会つた事は少なく、寧ろ技術書の著者として名が載つているのを見る方が多いぐらいで、ついでに言えば「空の丘」

には僕は行つた事もない。

殆どの子供は行つたことがないのが普通だが。

ともあれ、曾祖父ナリサが真殿に勤める国嘗士という事は知つてはいたが、流石にレムリア様の側で働くような、それこそ極めて安定した最低辺の収入で働いていそうだと容易に想像できるような奇特な人だとは思いもよらなかつた。

「その言葉に一言は無いか。引き返すならば、ここが最初で最後だ」怜俐な表情だつた。

それでも、僕の心は決まつていた。

「ありません」

しばしの静寂が訪れる。

怜俐な表情でユイスを見ていたレムリアがその沈黙を破り、口を開く。

「……良く言つてくれた、ユイス・リンドルース。ナリサよ、お主の見積もりは当たりだつたな」

「はい」

「いや、百余年の昔のお主に似てゐると言つた方が良いか」レムリアが顎に手を当て微笑を浮かべ、ナリサが眉をひそめる。

「故に、同席をと」

「昔の自分を見たような感想はどうづか」

「懐かしいと一言」

どつしりとナリサが言い、ユイスは突然場の空気が何だか和らいだ事に違和感を覚えるが、レムリアは顎に手を当てたままユイスを見て苦笑する。

「そうか。しかし、最初の死んだ魚のように生氣の無い目以外容姿は余り似ていらないな。それも当然だが實に可愛らしい。おや、何を間の抜けた顔をしておる。私は感情が素直に伝わるよつ話す事を出来る限り常に努めている」

けなしているのか、誉めているのか分かりにくい言葉にユイスは凹もうか嬉しがらうか微妙だつた。

「は、はあ……」

レムリアは苦笑から一転、含むような笑みを浮かべ、立ち上がる。「いざれにせよ、言ったからにはお主はもう後戻りできぬぞ。では移動だ。我らに付いてこい」

突然かなり軽くついて来いと言われてからの移動は何だか忙しかった。

レムリア様が現れた幕の奥の部屋にある扉から出て、早足に廊下を歩いては何度か曲がり、階段を無視して飛んでは、奥へ奥へと進んでいるのは分かったが、どういう訳か部屋から出て少しの間は他の貴士の姿もあつたが、ある程度進んだ辺りからめっきりその姿を見かけなくなつた。

「さて、この辺りで駆け足で行くぞ」  
極めつけに駆け足になつた。

既にかなりの早足だったので寧ろ駆け足に切り替わつて楽になつたが、まさか国の中核である真殿内を駆け足で移動するのがさも当然というレムリア様と曾祖父を見る事になるとは予想できる筈も無い。

奥に進み続け、左右に長く伸びる通路に着いた。

大分高い所に来ている感があり、それを証拠付けるように、天井からは外の光が差し込んでくる。

その明るい通路の大分中途半端な位置で、レムリア様が壁に手を翳すと壁面が音もなく動き、更に奥へと進めるようになつていた。と思えば、中に入ると更に三度壁面を動かして奥へと進み、その次は階段も何も存在しない綺麗にくり抜かれたかのような岩の空洞を真上へ飛び上がって進んだ。

上がり切つた所は大きく球体状にくり抜かれ、そこが再び地面と並行に進める通路との合流地点の為、激突を防ぐようそくなつているのだと分かつた。

今度の突き当たりはすぐ訪れ、レムリア様はそこで僕に振り返り、

手を翳して壁を動かしながら言った。

「レムリア真殿九院室へ、よつこ」そ

その中は、普段見る事のある機械類より、確実に更に高度な技術が使用されていると思われるものが大量にあった。

目を奪われている間もなく、レムリア様は僕をその場にいる人達に紹介した。

「皆、新入りのナリサの曾孫だ」

「ユイス・リンクドルースと申します」

ひとまず簡潔に九院室の面々がユイスに自己紹介した後。ユイスはレムリアに連れられ、九院室の一室に移動した。木造、石造りや金属とも異なる、穏やかな光沢を放つ素材で一面統一された室内。

レムリアが徐に机に置かれた機械装置を操作すると、巨大な画像が室内空間に投影される。

「そこへ」

「はい」

既に移動する前にユイスはそれと同じものを見ていたので、無為に声を上げる事も無く言われた通り椅子に座った。

レムリアはふわりと浮いて、ユイスと画像の両方が見える位置でゆっくりと口を開く。

「……ここがレムリア真殿九院室、見ての通りこのような技術が存在する」

ユイスは黙つて頷き、レムリアは淡々と説明を続ける。

「国民一人一人が必ず異なるクアン反応を持つ事を利用した全国民の情報統括システム。これ無くして今のこの国は成り立ち得ない。詳しい仕組みは知らなくともこのシステムの存在は皆把握し日常的にも利用し恩恵を受けている故、それ程驚くことでもあるまい」

「……はい、それは。家の本屋でクアンを使った売買取引が無い事は逆に想像しにくいです。わざわざ紙幣を持ち歩くより自身一つク

アンで済ませるのが常識ですから」

クアンとは人が普通に空中を飛んだり、遠くの物を同様に浮かして動かす時に使うレムリア真国の国民全てが持つ力の事を言つ。

レムリアが頷き、ユイスを見る。

「その通り。さて、ナリサの後を継げという具体的な説明をしよう。まず、この九院室の存在は真殿の嘗士は皆知識として把握している。この九院室は入り口での様だが、更にまだ奥にお主は見たことのない物がある。そして、九院室で必要とする人員は文字通り9人で充分、他にも似たような別働隊が存在するが……そういう事だ。仕事は腐るほどあるが設備がある限り問題ない。ここで重要なのは外部への無為な情報漏洩の防止。知つての通り、ナリサは今年で136を数え、引退が近い。その交代として適切な人員を探さねばと思つていた所、ナリサがお主を推薦したのが今回の真相という訳だ」

その流暢な説明にユイスは大きく頷く。

「良く、分かりました」

満足そうにレムリアは微笑む。

「よろしい。何か気になる事、質問はあるか？」

ユイスは少し目を泳がせて尋ねる。

「えつと、では……。ナリサ士官が推薦したから、というのは分かりましたが、成人してもいいのは良いのですか？」

「ふむ、はつきり言って、仕事ができ、人格的に問題無いならければ若い方が良い。そもそも、この九院室は既に今の9人体制になるまでに数百年脈々と続いてきておるが、その交代は基本的にそれこそ百年単位で行つていい」

ぱかっと口を開き平然と隠された歴史を暴露され、ユイスは違和感を覚えた表情をする。

「……なるほど。できるだけ交代の回数は減らしたい、という事ですか」

「それもあるが……実の所、ナリサは本当に引退するまでこれからお主に仕事を直接教えられるというのが大きい」

「ああ」

「ナリサ以外の他の8人も大体親類で継いでいる。ナリサもお主と似たようなものでナリサの高祖母が推薦してここに入った」

それを聞いてユイスは遠い目をする。

「大爺、ナリサの高祖母……七代前……」

「そういうこと故、ナリサからしつかり学ぶように」

「はい。……あの、九院室ができる前は一体どうされて……そもそもここにはどのように……？」

謎だらけの事を続けて尋ねると、レムリアが楽しそうに笑い声を上げて言う。

「お主、やはり知りたい事だらけじゃなあ。……何を隠そう、私が全部造った」

不敵に微笑みながら言つるレムリア様は、正しく起源にして、頂点にして、不变にして、絶対の存在だった。

こんな機会が訪れるなんて夢にも思つていなかつたが、僕はレムリア様に聞きたいことが山程あつたのだ。

歴史書を紐解けば、レムリア様は真国起源以来、民草に数多くのものを授けて下さつたとされている。

その中でも今を生きる真国民が特に恩恵を受けているのは、レムリア様の名の下に、成人し働く全国民は職業により差が設けられているが「絶対給」と呼ばれる労働の対価としての報酬を授けられる事だろう。

この報酬は具体的な物、形として受け取るものではない。

国民一人一人のその身体に、具体的に感じ取る事はできないが、必ず授けられているものだ。

それを確かめるには「クアンリーダー」と呼ばれる個人のクアンを感知して反応する、一般に広く普及しているものが用いられる。

人がそれに軽く手を触れると現在の保有資産額の数字が浮かび上がり、確認ができるのだ。

それが一般的に商取引の決済手段に応用されていて、それを裏から可能としているのは、人によって必ず異なるクアン反応には名前、年齢、住所、所属、職業などの様々な情報も記録されているからだとされている。

クアンリーダー自体は物理的にいじっても情報がどう記録されているのか、その詳しい仕組みは国民には分からぬ。

それでも利用方法は至って簡単であり、レムリア様が造り授けて下さったこの英知は全国民が享受していると言つて良い。

そして、それら全てを統括する場所である九院室をレムリア様は「私が全部造つた」と言つたのだ。

それを聞いて、ああ、やつぱり当然そのだと納得した。

けれど、新たに沸き上がつた興味を抑えられず、どうやって造つたのですか、と期待を込めて更に聞いた。

レムリア様は苦笑いをして、少し困ったように答えた。

「……お主の質問に答えるのもやぶさかではないが、かなり時間が掛かりそうな故、今一番聞きたい事を一つ申してみよ」

ハツとした。

レムリア様にしてみれば僕の質問がいつ終わるのか分からぬのだ。

そして、僕も聞けば聞くほど新たに疑問が増えて、恐らく終わりが見えないだろう。

小さい時、何を見ても、あれは何、どうなつてゐるの、どうして、と家族に聞き続け「なら本を読みなさい。丁度家は本屋だから」と言つてそこから僕の今までの日々が始まったのをよもや忘れる訳がない。

「申し訳ありません。では、お言葉に甘えて一つ。……『真暦起源年、レムリア様は空の丘と共に始まりの民を導きこの地に降り立つた』と歴史書には書かれていますが、一体どこから……来られたの

ですか」

問いかけをした、その瞬間のレムリア様の表情は本当に本当に遠くを見るようだった。

「遙か、遙か遠くの空から。……」のよつた答えで、満足できるか

「……はい……」

それを目にした僕は頷くしかなかつた。

「そうか。他の事は、また、追々時間のある時に少しづつ、な

その後、レムリア様は真殿正規の執務室へと戻られ、僕は言われた通り九院室の入り口、情報統括室と呼ばれるその場所で改めて挨拶をしてから、曾祖父の横で九院室について、ここでの仕事と生活について、初めて触れる機器の使用法について、説明を受けた。

九院室はレムール山脈内部に構築されており、ここでの仕事は九人で十分とされているものの、この施設の全貌は非常に巨大かつ複雑、更に連れられてやつてきた道順が唯一の物という訳ではなく、他の場所にも出入口が存在する。

それを全部造つたとレムリア様は簡単に言つたが、今に大きく伝えられている数々の伝説のような過去の厳然たる事実を思えば、疑いの余地は無い。

九院室の仕事は大きく代表的に三つ。

一つ目が全国民の個人情報の統括。

全国民のあらゆる情報の統括、新生児の出生や死亡した国民の情報処理など。

二つ目が全国民及び国に申請を受理されている農商工店の保有資産及び収支の管理。

レムリア国民の経済面での生活支援の根幹を為している。

三つ目はクアンとは直接関係無く、レムリア真国の様々な情報を収集し、国の状況をレムリア真殿の正規情報部とは別口で九院室の設備を利用して把握できるようにする事。

とりわけ九院室ではレムリア様の要望もあつて探索士の動向や飛

空艇到達地域の正確な情報を収集する事が求められている。

生活において、九院室の構成員には真殿付属の士官宿舎、末端の方の部屋が割り当てられているものの、九院室の生活環境は整っている為に無理に移動する必要は無い。

欠点があるとすれば、外の自然光を採光できない閉ざされた空間である事ぐらいで、それゆえ定期的に外に出た方が良い。

機器の扱いは見ればその分全て覚えられるので特に問題なく、今 の所九院室でしか役に立ちそうにない専門用語も覚えた。

この日初めての説明を受け終えた後、曾祖父と共に本屋の家へと帰路についた。

両親と二つ年上の姉は僕を見て何か驚き揃つて、「田の色が生きて いる」と言った。

レムリア様にまで「死んだ魚のように生氣の無い田」と形容されてしまい、確かに日頃から似たようなことを色々な人から良く言わ れてはいたが、多分明らかにやる気が出たのが変化の原因だろう。

それもあってか、僕が曾祖父の元で準国賞士としてレムリア真殿 に生活の基盤を移す事について、詳細は賞士の秘匿義務で話せない とそればかりの、要するに何も家族には分からぬ曾祖父の説明で も、そもそも今更選択肢はないのだが特段反対される事も無く、僕 の九院室入りは確定した。

ただ、母は僕が力ウンターで手伝いをしながら本を読むいつもの 光景が無くなるのをうとうと寂しいと言つて、それが僕には 何だか嬉しくて、輸送艇に乗れば家とレムリア真殿は遠いとも言え ない距離だからちゃんと定期的に家に帰ろうと、そう思つた。

僕の正式な九院室生活は準備を考え四日後からとされ「何か真殿 に持つていきたいものがあれば、制限はあるが持ち込む事もできる」と曾祖父に言われたが、僕の場合「なら毎日新刊されるもの含めて 家のまだ読んでない本全部」となつてしまいそんな事口が裂けても 言えないので、結果的に生活に最低限必要な僕の衣類を携えるだけ に留まつた。

それからの三日を、四日後にレムリア真殿九院室に移動するまで大して準備する事も無いユイスは「できるだけ目立たないよう生活する事。修学館の方は手配しておく」と曾祖父に言われた通り修学館には普通に三日通い、授業が終われば本屋である家の読んでいい本で優先的に読みたいものを読んで過ごす事に決め、結局ギリギリまで生活は変わらずじまい。

その三日目。

修学館での授業を終えて帰宅してから本屋で普通に本を読んでいたユイスは、はとこであるハーツが探索記を読みに現れた所で、自分の部屋に移動することを提案した。

元々家の殆どを本が占めているが、ユイスの部屋も同じように殆どが本で占められていた。

慣れていたハーツはそれには何も言わず、一人は丸いテーブルを間に挟み床に座った。

ハーツは頭につけていたゴーグルを磨きながら尋ねる。

「で、ユイスから部屋行こうってのは珍しいけど何？」

「明日から僕この家出て大爺ちゃんのところで生活することになったから。一応ハーツには丁度来たし言つといつと思つて」

ハーツが手を止める。

「あ？」  
「あ？」

ハーツの声にユイスはわざと返した。

「……あー、あれか？ この前の国からの手紙？」

「そうそう。国の秘匿義務のあれで、正直言えるのはいなくなるからって事ぐらいだけど」

「へー。つて明日かよ！ いつ決まつたし」

「三日前」

「えー……」

「ええ」

微妙な目をしてハーツが呟つ。

「……唐突だな。しかも、今日俺来なかつたらそのまま会わずにば  
いばいだつた？」

「それは素直に危なかつたと思つ」

ハーツはユイスが抱えてる本を指さす。

「つか引っ越すのに、お前何普通に本読んでんの？ 近所とかに言  
つた？ それより俺のとこに言つてこいよー」

「そこは、國のアレだから目立つと駄目、つて大爺ちゃんに言わ  
てるから」

「あー、そういう事。じゃあ詮索しても」

「ならお帰り下さいつて感じ」

「やつぱ？」

「うん」

即座に頷いた。

「……ホントお前あつさりしてゐるよなー」

ハーツは両手を床につけて上体を後ろに倒す。

「見た目程あつさりしてはいないつもりだけど」

「あれ、今気づいたけど、目が生きてる？」

突然ハーツは話題を変えた。

「その反応飽きたよ」

「皆に言われ済みつてか。……にしても、冗談で言つたつもりが本  
当に国嘗士になるのか」

「僕も驚いた」

「ま、全然良く分かんねえけど、頑張れ」

「どうも」

「けどちょい困るなあー、新刊の探索記とか  
ハーツは腕を組みうーんと唸つた。

「買え」

「お前もな」

「あれ、返す言葉が無いや」

「ぞまー」

そこへ、部屋の扉がノックされる。

「はい、どうぞ」

コイスが聞こえるように返事をすると、扉が開き、「しつれーい。お姉様でーす」

右手を挙げて全身を革製の服で包み、首にゴーグルをぶら下げたハーツと似たような格好をしたコイスの姉、ネネコが軽快に入ってきた。

「お姉様ちいーっす」

「ハーツちいーっす」

仲良いなあ、と思いながらコイスが普通に言つ。

「どうしたの姉ちゃん」

ネネコがコイスの隣に座りながら言つ。

「えー？ 入つて来ちゃ駄目ー？」

「いいえ？」

バシ、バシ、とコイスの頭を本人は可愛がるつもりで平然と叩きながら言つ。

「まーまー、動く図書館みたいな弟でも明日からこの家からいなくなるとなると、あたしもお母さんと同じで寂しーなつて」

「それは、何だか、嬉しいなつて？」

叩かれながらオウム返しのように言つた。

そこでネネコは叩くのを止める。

「よろしー。ま、何でも良いから話しそうよ。あ、ハーツ、実習で携帯針羅盤作つたんだけど見るー？」

「もちー！」

「じゃーん」

上着に幾つもある内の大きめのポケットから細かく線や数字の書かれた盤に複数の針がついた円形の物体を取り出し、テーブルに載せた。

「おおー、かつけえ！」

ハーツは田を輝かせ、素早く「ゴーグルをつけて携帯針羅盤を見始める。

「ほり、コイスは讃めて！」

「はい。……姉ちゃん、スゲー！」

「もっこい。もっと心込めて」

コイスは肩を落とし、息を吐いて少し真剣に口を開く。

「……分かりました。じゃあ、僕らしく。……五回生の技工士課程の携帯針羅盤作成は主針と副針の一つで良い筈だけど、針二つ増やして時計にもなつてるのは凄い……といふか勝手につけるの駄目な気がするけど、それだけじゃなくて、外装にも意匠を凝らしてるのはハーツも言つた通り格好良い。それに光沢も均一で磨き方も上手いと来て、流石ネネコ姉ちゃん」

それを聞いてネネコはニコニコと満足そうに笑う。

「はつはつはー、そうだろーそうだろー。お姉様今良い気分。でもコイス、技工士の課程の詳細まで把握してるのは何つて感じ」

「俺課程の詳細なんて知らねー。でも、ホント勝手に時計つけて良かったんすか？」

ネネコは頬を膨らませる。

「それがさー、怒られたー。ちょー頑張ったのに」

「あー……」

「やつぱり……」

指定外の機能を付けて実習において高評価を得ようとするような行為は基本的に無しとされている。

「まー、教官は『実習としての評価を度外視した場合は、その努力は学年一位だらう』って言つてくれた」

「姉ちゃん普段怒られるようなことしないのビビつして?」

コイスが怪訝な表情で尋ねると、ネネコは「それだから、とため息を吐く。

「はあー。本ばかり読んでるから鈍いんだよー。三日あつて、このあたしが怒られるような事して、コイスの部屋を訪ねた事を考えて

ねー。さー答えはー？」

「ああ……姉ちゃん僕に、くれる為に……」

気がついたように言った。

「大正解ー。ほら、ユイス、明日出発の割に持つてくの服ばっかりでしょ？だからこれはお姉様からの饗別なのです。……はいユイス、これあげるから一緒に持つてってね」

ネネコは携帯針羅盤を左手に取り、ユイスの左手を右手で掴んで手のひらを向けさせ、そこに握らせた。

それに、ユイスは大きくうなづく。

「ありがとう、ネネコ姉ちゃん。大切にする」

「どういたしましてー」

言いながらネネコはユイスの頭をまた叩き始める。それを見てハーツはポケットを探り始める。

「あー、そういう事なら俺も何かって……ピンセツトとか替刃とか……ゴーグルはやれないけど、何か欲しいのあるか？」

叩かれながらユイスが苦笑する。

「無理に良いよ。ちゃんと、定期的に、戻ってくるし」

こうして僕は翌日、きちんとネネコ姉ちゃん手製の針羅盤兼時計を携えてレムリア真殿は九院室へと向かうのだった。

レムリア様が真歴起源以来说き続けこの真国に漫透した有名な教えは幾つもある。

曰く、「大地の恵み無しには人は生きていけない。故に、常に我々は大地の恵みに感謝し、日々生きている事を忘れる事無く己の胸に手を当て心より想うべし」と。

これこそがレムリア真国に広大な縁が存在し、縁豊かな地と地の間に人々が住んでいる所以だ。

今日、レムリア真国には収穫業に人手を掛けずに済むようになる

耕作機械を造り出すことは大いに可能だが、実際には運用される程度は酷く抑えられている。

「人の意志を可能な限り尊重する」というレムリア様の思想は、逆に言えばどうしても尊重できない事があるという意味で、収穫業がまさにその最たるものだと言わかれている。

技工士が便利な耕作機械を開発しても、レムリア様は例外を除き絶対にその普及を認めようとしない。  
曰く、「それを使えば人はどうしても大地の恵みへの感謝を軽んじるようになつてしまつ。もしこの国の民がそうなつてしまつたら、私はとても悲しい」と。

その昔、レムリア様に耕作機械の発明をした事を奏上し、その有用性を説いたある技工士に対し、レムリア様が言葉の通り酷く悲しい表情で言われたと、歴史書にはそう綴られている。

その話の続きを、その技工士がそれでも退くのを諦めようとせず何とか説得を試みようとすると、黙つて聞いていたレムリア様は静かに涙を流し始め、それを見た技工士は己の心の中に功績認めて欲しさに意見を通したいという欲求が少なからずあつた事に気づき、恥じ、胸に手を当ててレムリア様の想いを察したという。

そしてレムリア様は「全てを理解して欲しいとは言わないが、お主が人の為になる発明をしたのは紛れも無い事実。それは私も分かっているつもりだが、お主もその努力を己自身で認め、納得し、また新たな発明をして欲しい」と言葉を掛け、後にその技工士は歴史に名を残す発明をし、現に今に伝わる技術書に名前が載つている。  
必ずこの話は初学館の歴史の授業で学ぶものであり、僕でなくとも真国民は忘れていい限りは全員知つていてる。

確かに、種植、耕作や収穫を機械で済ませたとしたら労力は掛からないだろうが、毎年真国祭の前にレムリア真国の全収穫士ハーヴェスト総出で一斉に黄金色の稻麦の穂を刈るあの見事な光景が無くなると思うと、それだけで何だか寂しくなる気がする。

そのような歴史的出来事があり、技工士達は以来、耕作機械の發

明に手を出すのを憚り、一部を除き研究は積極的に行われていない。

そうしたレムリア様の教えに加え、収穫士の絶対給が全職業で最も高いという経済面からの一助と相まって、真国は収穫士の人口が最も多いのだ。

そして、最も高い絶対給を得る選択肢を取らず収穫士以外の職業を選ぶ人もやはり厳然として存在するのもまた現実。

家のように街で様々な商売を営む者、技工士、探索士やその他の職業は基本的にやりたい事があり、それが努力に比例して収入も増やす事ができるからこそ人々は往々にしてそれらを選択する。

しかし、国嘗士はそうではない。

国嘗士は収穫士とは収入において対極に位置し、努力に比例して収入が増える事も無く、逆に努力して出世すればする程絶対給が減少する職業。

国嘗士にあるのは、誠実さ、國家権力、質素さ、レムリア真国にとって収穫士にも勝るとも劣らない必要不可欠の存在である仕事を行っているというその通り甲斐、そしてレムリア様の心よりの国嘗士個人個人に対する感謝だろうか。

そんな国嘗士達が必要とされる数を何とか満たす分に存在しているのは一重に真国唯一の頂点であるレムリア様の存在に依る。

真国起源年以來、レムリア様の我々真国民の庇護に対し、仮にそれに見合う対価を考える場合「何を以てしてもレムリア様の御業に足りることはできない」と言われている。

例えば、長期間雨が降らず水不足に陥った状態を「干ばつ」と呼ぶそうだが、生憎僕はそれを見たことがないし、両親も、祖父母も、曾祖父母、高祖父母と幾ら遡つても見たことがないという。なぜならレムリア様が空をひと度舞えば海より雨雲を連れて現れるのだ。

圧倒的、絶大な、絶対的な、その力を使いし、レムリア様は雨雲をこの国の大空へ連れて来る。

そして、その後には地に雨が降る。

逆に真国に巨大な嵐が迫れば、レムリア様はまた空を舞い、完全に、完璧に、吹き飛ばす。

自然の力すらその力で捩じ伏せるレムリア様は紛れもなく絶対の存在だ。

レムリア様に感謝の意味を込めて品を献上しようとする人は歴史に記録されている限りでは、その昔は幾度もあったという。

しかしレムリア様はそれを全て断つた。

曰く、「私にはこの国がある。この国の民がいる。それで充分。私に欲しいものがあるとすれば、それは真国の民全てが笑顔でいてくれるその姿。だから、笑顔でいて欲しい。もし、私がその品を欲しいと思ったその時は、私は私から自分でお主の元へ『その品が欲しい故、譲つてはくれぬか』と言い貰い受けに行こう」と。

その話の続きは、献上に上がった者は少し残念がりつつも品を持ったまま帰ると、丁度その時レムリア様が空から舞い降り、数ある品の一つを示して確かに「その品が欲しい故、譲つてはくれぬか」と本当に貰い受けに現れ、その者は笑顔でレムリア様に品を渡したという。

つまり、レムリア様は品そのもの欲しい訳ではなく、品を貰うことでその人の笑顔が見たかった、というのがこの話の要旨なのだろう。

現在では、品の献上は控えるべきものとした慣習が根付いている為、そのような事は少ない。

しかし、レムリア様自身はたまに、例えば、新鮮な生で食べられるような野菜を、飲食店屋台の商品を、海辺に行つては新鮮な海の幸を、個人的に買いに現れる事がある。

それ故、商売を営む人々は大抵皆レムリア様が自分の店にやつてきてくれるはしないか、と心のどこかで思い、良い物を売ろうと努めている人が多いと言われる。

様々な逸話に事欠かない絶対的な存在であるレムリア様だが、真国民全てがレムリア様をレムリア様とだけ呼び、その名を呼ぶこと

を憚る事はない。

一つ、歴史の授業で教えられる事のない、図書館に保存される最も古い歴史書の中の僅かな一節を個人的に紐解かなければ知る事のできない逸話がある。

その昔、真国の起源には「神」という人知を超えた絶対的存在を示す言葉、概念が存在したという。

その言葉を知っていたある始まりの民はレムリア様を「神」と呼んだ。

しかし、レムリア様は首を振った。

「私は絶対に、断じて、神と呼ばれる存在ではない。私はレムリアであり、レムリアという存在でしかない。私の事はレムリアという唯一私を表す名だけで呼んで欲しい」

以来、「神」と言う概念を以てしてレムリア様を「神」と呼ぶ事だけは絶対に控えなければならないと記されている。

そして、レムリア真国の「真」というのは「神」という読みが転じて「『レムリア』」という名こそがレムリア様を示すただ唯一の『真』実である『国』という意味で、この国はレムリア真国と呼ばれ、真歴や真都などのような言葉が時代と共に出来上がつたと言う。

「神」という概念でレムリア様を呼ばないようについて記述はそもそも、であれば伝えずに歴史の裏に消してしまえば良いのに、と当時その歴史書を読んだ僕は思つたが、今思えば「神」という言葉かどうかはともかく、そういうた概念を自然に考えつく人が現れる場合を考えたの事なのだろうと思う。

そして今日、レムリア様は「レムリア」様としか呼ばれていないのだ。

……そんなレムリア様に憧れるからこそ、レムリア様のようにありたいと思うからこそ、国嘗士になる人々がいるのだと思う。

考えてみれば、僕もレムリア様に憧れ、必要としている今まで言われ、九院室の国嘗士となる事を決めたその一人と言えるかもしない。

早朝僕は家族にひつそり見送られた後、輸送艇に乗つて景色を目にこんな事を考えながら、刻々とレムリア真殿へと近づいて行つた。

レムリア真国民、人生130年。

個人的顔の違いから印象の違いはあれど、大人の年齢を外見で正確に判断するのは困難を極める。

19で成人してから70代前半辺りまでは目立つた外見の変化は無く、安成期と呼ばれる段階が維持される。

そして70代後半辺りに入ると中狭期と呼ばれる段階への老化現象が始まり、個人差はあるが一定の所でその進行はピタリと止まり、110代後半までその状態が続く。

最後に120に入ると老化が再び進行し、白衰期と呼ばれるいよい人生の終わりが近づいたという段階に至る。

白衰期においては、曾祖父ナリサのように髪が白一色に綺麗に脱色するという特徴的な変化が起こる。

そして、総じて女性の方が男性よりも安成期への突入が早い。

その為、家で言えば既に姉は、僕は姉だという事を当然知つてゐるからこそ区別はついているが、後一年したら今よりも更に両親と年齢差が殆ど分からぬ状態になるだろうし、僕も後四年すればいづれはそうなるのだろう。

人生の伴侶を選ぼうとする場合、これはしばしば恥ずかしい思いをする状況を引き起こす事があるという。

子供の時に初学館で共に学んだ者、そのままそれぞれの選択した専門教育に進み子供だと見た目に分かる者は、覚えていさえすればその人達が自身と年の近しい同年代だというのは分かるが、もうそれ以外となると本当に分からぬ。

できるなら若く思われたいと思うのは人の常であり、自身の年齢を積極的に話すという習慣は無く、初対面の場合少し人の動きを観

察したり、少し話をしてみるなどして、相手と自分の間に知識や経験の差を感じた場合、ああ、この人は年上なのだろう、と皆そうして推測し、上手く対応を合わせて行くのだ。

僕が入室した九院室の構成員も漏れなく初見では年齢の判断は殆どつかなかつた。

ただ、はつきり分かつたのは安成期の大人が五人、中狭期の大人が三人、僕に仕事を教えてくれている曾祖父一人が白衰期、僕が自他共に認める子供、そして敢えて加えるならばレムリア様が言うまでもなく最高齢だという事だろう。

更に、安成期の五人中一人が男性、中狭期の三人中一人が男性で、男女比は今僕がいる事を除けばきつちり一対二だ。

自己紹介はしたが、九院室の構成員はやはり世間での慣習通り年齢を述べはしなかつた。

とはいゝ、全国民の全情報を統括する場なので調べればすぐに分かるのだろうが、曾祖父に言われて今はメンバーの情報は調べないようにしている。

九院室情報統括室には、曾祖父曰く主に超硬度炭素材というもので作られているというかなり大きなH字型を描くデスクがあり、そこに九人が等間隔に、今は僕もいるので十人だが、基本的に席に着いて仕事をする。

その周囲には高度な精密機器が幾つも並び、デスクの前にはそのH字型に沿つて設置された半透明の壁のようなメインモニターが天井高く存在している。

今日で僕が九院室に入室してから五日目。

情報統括室入つてすぐに見て、逆H字、つまり 字に設置されているデスクの一番右端の席で曾祖父から僕は仕事を教わつてている。教わる以上会話するしかなく、それが他の人の迷惑にならないかと思ったが、その心配はすぐに杞憂に終わつた。

口から声に出して操作する普通に機器があり、更に、かなり間を取つて各席は等間隔に離れているので、メンバー同士で会話する場

合、相手のウインドウをメインモニターに開き、同じ室内にいながら他の人と画面を通じて会話がしばしば行われている。

僕にしてみれば何だか不思議な状況だが、話し声は特に問題にならないのだ。

またメンバーはずっとテスクに向かっている訳ではなく、不意に立ち上がりどこか別の場所へと消えていったと思えば、気がつくと戻ってくる。

人は必ず空腹になるもので、その時は必ず全員で食事をとる事になつていて、食事は当番制でメンバーが作る。

僕も曾祖父に連れられ調理場で十人分の食事を作る事があった。

しかし、何しろ本の虫の僕が料理などレシピはそれこそ知識で知つてはいたが、まともにやつた事は無かつたので少し戸惑つた。

それでも、曾祖父の指示に従い、何の料理なのか分かれば手順だけは知つてるので僕も手元はおぼつかないながら料理した。

曾祖父の手際の良さには驚いたが、皆それで普通らしい、つまり僕もそうなる必要があるという事が分かり、そして、その料理の味も申し分無く家庭的だった。

極めて家庭的な味で、食べている時は何だか普通に家の母の料理を食べているようなどこか安心するような気分がした。

今のこと九院室で食べたのは全て家庭的だ。

仕事時は殆ど曾祖父と会話してばかりだが、食事を共に取り、それも五日目に入ると大体メンバーがどのような人なのか掘めて来た気がする。

「ユイス君、大分慣れてきましたか？」

丁度昼食時、長机の一番端にユイス、その隣にナリサが座り、ユイスの対面の女性、アメリカ・エリス・テルが声を掛けた。

「あ、はい、それなりに」

答えると、ナリサがどっしりと言つ。

「記憶力はあるから問題はない」

「そういえばナリサさんと同じでしたね。覚えることはまだまだあ

るから頑張つて

肩口までよりも少し長い髪に、右の目元に泣きぼくろのある優しげな目をしたアメリカは、柔らかく微笑んだ。

「はい。あの……アメリカ士官は探索士カイル・メル・テルとは親戚関係がありますか？」

「あら。本当に調べていなんですね。カイル・メル・テルは、私の夫です」

一瞬意外そうな顔をしてアメリカは面白そうに答えた。

「…………え？…………あ、すいません。ちょっと驚きました。でも探索士カイルと結婚されていて、その……情報とか大丈夫なんですか？」

「ええ大丈夫ですよ」

「カイルは表向きは普通の探索士だが、裏ではレムリア様私設のことは別動隊、両隠宮に所属している。メルテもそうだ」

淡々と低い声でナリサが説明を加えた。

「えつ、カイルに大婆ちゃんまで……大、ナリサ士官、それって、なら空の丘には」

「まあ、そういう事だ。まだ教えていないがそれも今後追々な「は、はい」

驚きが収まらない様子でユイスは頷いた。

そこへアメリカの横の短く髪を刈り込んだ男性、セイル・アルク・ルルーグがキリッとした顔で言う。

「ユー、因みに俺とリアは夫婦！」

「あー、それは流石に知っています。しかも昨日も一昨日も、その前も聞きました。というか最初の自己紹介で聞きました」

「いいね！ その突っ込みを待つていた！」

ええー、と思わずユイスが微妙な顔をすると、きつちり肩までの髪にややつり目女性、シーリア・ユリア・ルルーグが右隣のセイルを一発叩いて言つ。

「悪いね、ユー君。うちのこんなんで」

「いえ」

聞いて驚いたが、この国には本当に表には知られていない存在があるのだと、良く分かつた気がする。

アメリカ士官、セイル士官、シーリア士官の三人は、仮にカイル・メル・テルとほぼ同年代だと仮定すれば多分50代ぐらいに当たると思う。

曾祖父の右横一席には順に男性のオーマ・エルマ・テルマ士官、女性のマリナ・ナナ・ラポーラ士官と来て、シーリア士官の左横一席に座る女性のライラ・プライ・ドミニス士官の三人は中狭期の人達。

大体80代……祖父母ぐらいの年なのではないだろうか。

セイル士官がユー、と僕を呼び始めてからこの三人はユーちゃんと何だか孫に対するように話しかけてくるので、そんな気が、する。この人達は名前からしてセイル士官とシーリア士官のように九院室内で結婚しているような人達ではないのだろう。

両隠宮という所の人達と、そういう関係にある可能性は否定できないが。

九院室残る二人が僕とは正反対の端の席に向かい合つて座るミィコ・レミル・レストール士官とナーコ・トエル・レストール士官。

双子の女性で容姿が酷似している。

成人の名前なので最低でも19歳以上、136とかなり高齢である曾祖父の交代に僕が入る事を考えれば、19歳以上30歳以下といつた所だろう。

この二人がどういう人なのかは、まだまるで話をしていないというか、口数が異様に少なく、食事の時でも今のように席の距離が離れていて、多分凄く大人しい人達なのだと思う。

しかし、その二人を他のメンバーは時々何だか、仕方ないなあ、という顔をして見ている割には特に話しかけもせず、微妙な違和感がある。

しかも髪型が毎日違う、ミイコ士官とナーコ士官は日替わりで交換したりしていて……他の人からすると判別しにくいだろう。

双子と言えど顎の骨格にはどうしても微細な違いがあるので、それを覚えていいる僕にはどちらがどちらのかは見ればすぐ分かるが。そんな事を考えながらアメリカ士官にカイルの探索記を読んでいる事などについて話をしつつ、食事を終えて再び九院室のメンバーは仕事に戻った。

「覚えてはいても……」

椅子に座りコイスがコンソールをおぼつかない手で操作しながら呟いた。

「時期に慣れる。実践あるのみ」

「……はい」

「ふむ……」一度商家だ。試しに実家を基点に商決済の確認をしてみるか

「やります」

頷くと、ナリサが促す。

「ではやってみる」

「はい」

「コンソールを操作し、目の前のメインモニターにリント書房の総合データを出す。

総資産、全従業員名や関連商人などの情報が次々とウインドウに出てくる。

「まずは探索士協会との決済から」

「はい」

家が探索士協会真都第一支部と密接な関係があるのは両親のアイデアと交渉によって成った事だ。

探索士にとつて飛空艇を駆り海を越えて各地の探索を行つたまには未開の所以外に行く場合はルートや生物の生態系などの情報は予め調べるのが常識だが、最低限の事は知ることはできても、探索士協会自体は何でも調べられるような情報屋ではない。

探索士協会は探索士として登録されている者の管理、外部者からの依頼の仲介、探索士が出発する場合に予め必要な食料や道具など

の申請をすることによって探索士本人が行わざともそれらの手配をしてくれる支援所もあり、正式に探索士に登録されたばかりの新米などが適切な経験を積めるよう合同研修や師弟制度の実施、飛空艇の建造やメンテナンスの為の技工士の仲介なども行っている。

そして現在、探索士には協会への探索記の提出義務がある。

しかし、探索士にとつて探索記を書くのには時間が掛かり積極的に詳細に書く動機を得にくいもので、個人によつてその内容の質には差があり、その一方で探索士が探索に出た回数だけ探索記の数が増え情報管理が煩雑になつたといつ。

探索記には、虚偽の情報を書くと後に確認し直された場合本人が信用を失うだけであり、基本的に事実と不明確な場合は推測や考察などが書かれ、きちんと利用すれば有用な情報源と成りうる。

当時の両親が探索士協会に提案したのは、探索士が皆質の高い探索記を、読んで楽しい探索記を書くように意識改革を促しうるものだつた。

曰く、「例えば、探索記をただ事実だけを記載したものではなく、探索士本人がその場所に至るまで、至つて、見て、感じて、発見した事やその感想を小説風にして、写真や場合によつては精密に写実した絵何かも入れて本にして売るんです。そうすれば、ただの事実よりもきつと分かりやすい筈で、読んでる方もそれが実体験を元にしてるのは明らかなんですから面白いと思う筈です、いや、僕が読みたいです。それに売れれば、その分を探索記を書いた探索士本人にも還元すれば新たな収入源にもなつて、皆さん頑張つて探索記を書くようになると思うんですが、どうでしょつか」と。

その後「なら、まず一度やってみましょう」という事で話がとんとん拍子で進み、協会員が数人の探索士に探索記を小説風にする事を頼み、探索に出て帰つてきてできあがつたものを、多少の推敲は加えて実際に本にして売り出した。

結果、宣伝の甲斐もあつて探索記は飛ぶようにすぐ売り切れ、書いた探索士は名前が有名になり、収入も得られと良いこと尽くし。

以来、探索記の情報資料兼小説化は熱を帯び、探索士達はこそつて面白くなるように、しかし、虚偽は入れないように、探索記を一生懸命往々にして長くなりがちな飛空艇での移動時間などを利用して書くようになった。

それは瞬く間に国中に広まり、僕が生まれた頃には既に当然のものになつて今に至り、レムリア真国から危険を犯して海の外に出ない真国民馴染みの読み物、探索士にとつては探索を追体験できる重要な資料となつていて。

実際僕は探索記をそれこそ今まで大量に読んでいるし、ハーツも、例えば探索士力カイルの書く觀察眼と洞察に富み、写真ではなく極めて精密な写実絵をふんだんに入れ、独特な文体も読む気を起こさせてくれる、特に人気のある探索記を読んでいるのだ。

「うん……」

探索記一冊が売れるという一見簡単な取引の裏には色々ある。

探索記を書いた探索士、探索士協会、それを本として刷り納入する出版社、そしてそれを実際に売る、ここでは僕の家……それに関わる労働者個々人の人件費や、本を刷るのに掛かる原価、各契約料など。

次々と関連のある情報ウインドウを開いていくと資金の流れが複雑に絡み合つていると分かる。

「システムが自動処理をしている以上、必要な所だけ手を出せば良いが、理解はしておくように」「……分かりました」

曾祖父の言う通り、システムが自動で現地で行われている情報を収集し処理し続けているので、経済システム自体には余り手を出す事は無く、九院室で行うべきは、例えば、実体の無い取引や架空の取引が商人同士の間で行われてはいいか、国の各所で働く国営士が地力で以て収集した情報と併せて、確認、監視し、問題があればその処理を行う事だ。

「次はこの実家のように契約関係が多い場合起こる、過去の事例と

対処の確認をする。一度で覚えられるな

「はい」

それには、自信がある。

「ではC-674にアクセス」

こうして僕は、レムリア様に後を継げと言われた通り、徹底的に曾祖父の経験を受け継いでいく。

九院室に入室して十日目の夜、ユイスは自身に与えられた部屋でやすやすと眠りについていた。

その部屋の廊下の前に、小声でこそこそと話す同じ顔をした二つの人影があった。

「ねえ、なこ……ここで話す意味ないよね？」

ミイコがナーコの袖を引っ張つて言った。

「えつ、来たいって言ったのみーーでしょ」

「そんな事言つてないよつ……！」

ナーコが忍び笑いをする。

「正解つ。……でも内心ちょっと來たかったんじゃない？」

「ん」

問われてミイコは口ごもった。

ナーコがにやにや笑う。

「えー？ 私は結構來たかったよ？」

「つ。わ、わたしもそれなりに來たかった……です」

尻すぼみに言つと、ナーコが聞き返す。

「それなりに？」

「わ、割と？」

ナーコが両手を適当に広げる。

「これくらい？」

「い、これくらいかな？」

首を傾げてナーノの広げたソレより控えめに両手を広げてミイコが言つ。

「え、そんなに? 私これくらいだから?」

驚いた顔をしてパツと手を縮める。

「それするい!」

ミイコが不満の不を声に出すと、じとじとした皿でナーノが一方的に黙つた。

はあとため息をついてミイコが観念する。

「……わかりましたわたしもけついつきたかったです」

「素直が一番。今のセリフみーにコイ類に言つたら喜んだんじゃない?」

「言わないよ! 言うかよ! 言えないよ!」

豹変したよじて呟んだ。

若干引き気味にナーノが言つ。

「……また一瞬口悪くなつたね。まあた、それで……ビツビツよつか?

「ビツビツかつて? どれの事?」

「いつ芝居やめるか

「いつつて……」

要領を得ない返事に、ナーノが更に言つ。

「早くしないと、かまう前にコイ類どんどん可愛くなくなつちゃうかもしれないと?」

パツと顔を見上げる。

「でもブサイクにはならなこと思つよ?」

「そういう意味じゃないつて。あのままナリサ教官みたいになるかもしれないじやん

ナーノが呆れて手を振るとミイコが首を振る。

「それはかわいくない……」

「でしょ?」

「うん……。でも別に、普通にやめればいいだけだよね。明日にでも

も

突然冷静になつて言つた。

「……いきなりぶつちやけたね。じゃあそれすら？」

「そうしようか？」

「はい、そうしようけてーい！」

「けてーい！」

二人はハイタッチをした。

ナードが議題を提案する。

「次。休日の明日コイ君が実家に戻る件について」

「件についてーーー」

ナードが指を立て、

「堂々尾行しちゃう？」

「堂々尾行するのーーー？」

ミイコは驚きの声を上げた。

「情報によるとコイ君のお姉さん私達と同じ年」

「ナード関係ある？」

ミイコが首を傾げるとナードが顔を近づける。

「お友達になれるかも」

「……うん。それはそれで良いかも」

頷くと、ナードが再び離れて言つた。

「堂々無言でずーっとコイ君の背後を尾行して、丁度良いくじらで

私達がわあー、つてやつておどかす」

両手で虚空に向かつて驚かせて見せた。

「それで？」

「成り行きでコイ君の部屋に押し入つて私達のとんでも正体をバラ

した後にコイ君のお姉さんとお友達にもなる」

「とんでも正体じゃなくてとんでも本性じゃない？」

「そうとも言つかも」

「そうだと言つ」

仕切り直すようにナードが口を開く。

「……ともかく、教官から教えてもらつた話によるとコイ君がまともに持つてきた私物お姉さんが作つた時計だけだつて。きっと姉属性あるよ。あの子私達が教官に頼んで伝えて貰つたこときちんと守るよ」、「で？」

「わたし達の情報も調べて無い」

二人は同時に頷く。

「だから、私達が間名をレムリア様から貰つてゐせいでかなり年上だと勘違いしてゐる等。お姉さんと同い年だと知つたら？」

「お姉さんのように思つてくれるかも」

更に同時に頷く。

「思つてくれるといい。私達はようやく前からねんがんの弟分を手に入れられる。なんて甘美な響き……」

ナーノが顔を上げて一瞬恍惚とした表情をすると、マイコが顔をしかめる。

「手に入れるつて何か言い方悪いよ」

「じゃあ、ねんがんの弟分を可愛がれる？」

「かわいがれるね。えへ……でも、何か気持ち悪いとか思われないかな？」

「いやあ、と一瞬笑つたのを見て、ナーノがどん引きする。

「今の笑い方は絶対気持ち悪いな」

「ええー！……今そんなに気持ち悪かつた……？」

慌ててマイコは自分の頬を両手で触れた。

「いや、コイ君がどう思つか分からぬけど。私的には私もそんな風に笑うつと思つたら何かさ……」

「気をつけないと……」

思ひ詰めたように言つと、ナーノがけりりとして言へ。

「まあ最悪、気持ち悪がらないで！　つて直接言えれば良いよー。」

「おもいつきり歪んだ想いが伝わりそうだよ？」

「そのうち正常な想いになるかもつて付け加えたら？」

マイコが一步下がる。

「え、それは……ほ、本氣で？」

「今は嘘でもそのうち……？」

ナーノも一步下がった。

「ど、どうがな……」

「私もそこはどうだる……」

二人はほぼ同時に首を傾げた。

ミイコが恐る恐る声を上げる。

「実際ユイ君の方は……どうなのがな……？」

「異性への興味、15歳なのに見た感じ無さそうだよね……」

ミイコが口元を右手で覆う。

「む……ムツツツ……かも？」

せわしなくナーノは両手をとつかえひつかえ顎に当てる。

「え、でも……いや、やっぱ男の子ってそうだつて言つよね。んでも、レムリア様曰く寝食を忘れて本を死んだ魚のよつな田で読み続けてたよつな子だよ……？」

「何かそう聞くと嫌々本読んでるみたいだけど……でも堅しい本とかも……実は読んでるかも？」

一人の顔が一緒に僅かに赤くなる。

「そこは……もしそうだったとしたらどうなの？　本屋の家族の監督ザルすぎるって」

「その監視の田をかい潜つて普通は部屋に隠すんでしょ？」

「普通はつて……いや、元々そんな事ユイ君する必要無いよね。教官と同じ絶対完全記憶できる子なんだから」

はつとして気がついたよつた言つて、ミイコも田を丸くする。

「そうだった。でもそういう方向に使つてるとしたら……だ、大変態さんだよ……。何か不潔……」

「え、と両手を見るよつてして、ナーノは思い詰めるよつて念る。

「もし思つ出されるとしたら……さすがに血が繋がつてゐる訳でもないし……想像したくない、なあ……」

「下手なスキンシップも危険かも……」「でもみーこ」

「うん、なこ」「

一人は声を掛け合つと、

「こんな事考てる」「わたし達が一番」

「不潔だね……」「不潔だよね……」

同時に呟いた。

何ともいえない間の後。

「……それはそれとして。結局明日どいつよつか? バラすのはバラすので、楽しい方が良いよね」

「そうだね。うん」

そこへ第三者の声がする。

「何をバラすとな?」

「何つてわたしたちの本性を……つて」

二人は同時に気がついた。

「レムリア様!」「レムリア様!」「

わたわた、ヒミコが手を動かし、

「あ、あ、あの、もしかして……」

ギギギ、ヒミコが頭を動かして尋ねる。

「聞かれて……ました?」

「実は全部最初から聞いておつた」

レムリアが平然と言つた。

二人は同時に両手を上げる。

「ええー!?」「うえあー!?」「

「とうのは本当じや」

更に一人は両手を高く上げる。

「うえあー!?」「ええー!?」「

驚いてるのを無視してレムリアは注意を促す。

「お主達、忘れていいようだが、ユイスと外で目立つ関係性を疑わ  
れるような堂々尾行は控えろ? まあそもそもそれは尾行とは言わ

ぬが

「あー……」

「はー……」

「一人は少ししょんぼりし、正しく尾行し、実家で上手く接觸するなら可とするが、ピッと元氣よく返事をする。

「了解です!」「了解しました!」

レムリアはふわりと廊下で浮かび上がりながら言つ。「で、どうじや、ナリサの引継ぎの話を大分前にした時『是非可愛い男の子が良いです!』と一人揃つて言つておつたが」「見た目はバツチリです」

「わ……わたしも、アリです」

ナーノとミイコがそれぞれ答えると、レムリアは微妙な顔をする。「見た目は……の。性格は……観察するからと言つて碌に話しておらなんだか」

「はー」「はー……」

「最初から分かっておつたが、實に努力の方向音痴に思える。私はそんなお主らが面白いから構わぬが」

レムリアが苦笑して言つと、一人は手を頭の後ろに回す。

「あはは……」「それはそれは……」

レムリアは不意に顎に手を当て深刻そうに言つ。

「ふむ……しかしアレは完全に私に惚れておるから、もし本気ならば骨が折れるやもしれぬなあ」

ミイコが心底残念そうな声を上げる。

「ええー」

「うーん……。あ、やつぱりみーー、素で狙つてるでしょ?」

気がついて突つ込みを入れると、慌ててミイコが手を振り否定する。

「んな、そんなこと無いよ!」

眉をひそめてレムリアが追い打ちをかける。

「どう見ても露骨に残念そうに見えたぞ？」

ミイコは今度は両手と一緒に左右に大きく振り始め、

「いえいえいえ、今のは会話の流れから言って定番の反応をしただけであつてからして別にそう言つ……」  
「じゅうう……」

床に両手をついて倒れた。

残念な物を見る目でナーコが言つ。

「己の見苦しさに心が痛んだか……素直になーれ」

「ナーコの言う通り。では、明日、本性を存分にバラすと良い」「はいっ！」

そして、レムリアは去つていった。

レムリアに対し返事もせずに倒れたままのソレを見てナーコが声を掛ける。

「ほら、みーー、もう寝よ。……あ、もし動けないなら、このままユイ君の部屋で寝る？」

「しないよ！ するかよ！ できねーよ！」

バン、バン、バンと床を叩いた。

「これはヒドい」

何故こうなつたのだろう。

九院室での連日続く曾祖父からの指導が十日経つて丁度今日が休日という事で、実家にただ戻つて来ただけだったのに。

今僕の部屋にはテーブルを挟んで、同じ顔をした二人の人がいる。

左からミイコ土官とナーコ土官だ。

早朝に実家に帰り家族に挨拶をして朝食を一緒に取つた後、どうして過ごそうかと思つた所、目立つと駄目かと考え、僕は家の中で過ごす事にした。

僕から何をしているのか話すことはできないので、姉が話題を出しては会話をして過ごしたり、何だかんだ家族に本を持ってきても

らつて適当に過ごすこと半日。

家の店側ではない勝手口に一人が訪ねて来た所、応対に出た姉が連れてきた。

姉は今確實に僕の部屋の扉の前でビックタリ張り付いているのが容易に想像できるが、それはそれとして、二人は相変わらずの堅い表情で全く口を開かず沈黙を保つたままだつた。

気まずい沈黙に、下手に九院室の事も話せない僕はそろそろどうにかしないと、どうせなら姉が入つてきてくれた方が何とかなりそううだと思っていると、不意にナード士官がメモを取り出し、テープルに乗せて見せた。

「えつと……」

読んでもみると綺麗な字で「私達の正体を当てて見て下さい」、そ  
う書いてあつた。

良く意味も脈絡も分からぬが、何とか答える事にした。

「僕の仕事上の上司……です？」

二人は顔を同時に見合わせ、僕から見えない手元で「こそ」と何  
かまたメモに書き込み始めた。

それを見て、ああ、九院室の人は外では筆談で会話するのかと思  
い、僕もすぐ手近な紙とペンを取つて待機した。

けれど、二人は僕の動きを見て一瞬停止し、僅かに間を置いて完  
成したメモを見せた。

（私達の本性を当てて見て下さい）

本性つて何。

文面は正体が本性に変わつただけだが、突然怪しくなつた気がす  
る。

とりあえず、同じく書いて返答する。

（本性という事なので。普段物静かで大人しい人達と見せかけて、  
本気だすと実は気分が高揚しすぎる、本性）  
見せると、うーんと無言で頷いて、また書き始め、僕らは作業に  
入り始めた。

(私達は具体的に何歳だと思いますか)

(25歳ぐらい……だと思います)

(不正解です。曖昧表現は無しで何度もお願ひします)

(19歳)

(不正解)

(……30歳)

(ちげーよー)

ええー……。

表情を伺うと何か「本当にそつ見えるの? 本気で? しまっては怒るか泣くよ?」とこひ顔をしていたように見えた。

ナード士官とミハイド士官は交互に書いてるので「ちげーよー」とこう荒い言葉はミハイド士官が……多分文章だからちょっとしたおふざけ……いや本気……?

(すいません。失礼な事を書きました。……20歳で)

(不正解です)

(21歳)

(不正解です)

(22歳)

(出題しているのはこちらですが、できればもつと良く考えて下さい。一番近いのは一番田の答えでした)

何なんだ……この人達。

一番田といふと19歳だが……20歳が違うとなると、必然的に成人していないと、いう事になるが……それは変だ。

(間名があるのに、成人していないのですか?)

(驚いた?)

どやああ、といふ顔で一人は見てきた。

正直文面で伝えられると驚くも何もあつたものじゃないが。

(はい)

(では、続きを)

(まさかの15歳に一票)

少し投げやりに書いた。

（その発想は無かった）

（え、その方が良かつたですか？）

ナード士官、ミード士官の順だがミード士官の微妙に嬉しそうに踊つて見える文字は何だろう。

（間を取つて17歳で）

（キター！）（キター！）

書いたすぐ後一人はハイタッチした。

（姉と同い年だつたんですね。間名はどういう事なんですか？）

内心僕も驚きつつ疑問を書いた。

（レムリア様が付けて下さつたものです）

本当に驚いてユイスが声を上げる。

「そうなんですか！？」

思わずミードとナードもびくつとして、それからナードが頷いて見せ、ミードは勢い良く返事を書き始める。

（ユイ君もレムリア様から間名付けて貰えるよ！ 良かつたね！）

（データン、と突きつけるように見せられ、ユイスは戸惑いながら頷く。）

「は……はい……」

いまいち、会話と筆記での口調が一致しているのかしていないのか分からぬのが何とも言えない……。

ユイスが頷くとミードは書いたばかりの紙を小さく折りたたんで懐にしまった。

逆にナードが小さ目の便箋を一人の間に置いてある鞄から取り出して、テーブルの上に差し出した。

促されて、ユイスはそれを開けて中から手紙を取り出し、読み始めた。

ユイスは凄い速さで読んで行き、読み終わった頃に、少し難しげな表情に変わった。

ナリサがユイスに九院室のメンバーの情報を調べなにように言った。

たのは、ミイロとナーロがそう頼んでおいたから。

ただ、もしユイスが勝手に調べてしまつた場合は仕方なかつたと  
いう事。

ミイロとナーロが初めての自己紹介の時含め、この十日大人しく  
静かに過ごしていたのは予めそつすることをメンバーに伝えていた  
から。

とにかく、全てはこうして驚かしたから、決して無視して  
た訳ではないという内容が書いてあつた。

「あの、ちゃんと驚いてはいるんですが、やっぱり手紙だとどうも  
反応が薄くなつてしまつて、すいません」

そうユイスが言つと、一人は首を軽く振り、またしても筆談へと  
突入する。

（今の手紙とこの状況を踏まえて、私達の本性を当てて見て下さる）  
またが、と思いユイスはゆっくりペンを取つて返事を始める。

（いたずら好き）

（それも一理あるかもしません）

（他に思いつくことは？ 質問が本性だけで埒がなければ私達に対  
して想像できそうな事でも良いです）

ミイロ、ナーロと見てユイスは頷く。

（……はい。では、こういう質問をしている事からレストール士官  
は僕と少なからず感情や意思のやりとりをしたいのではないかと思  
います）

そこまでで見せると、一人は頷いて続きを促した。

（それで、17歳というのを当てた時に喜んでいたようなので『年  
が近いので仲良くしたいですね』と言つた感じでしょうか）  
ナーロがそれを見て書く。

（その先は……？）

まだ何かを求めるのか、と思いながらユイスがトントン、とペン  
を立ててから書き始める。

（えーと……では、ミイロ士官がユイ君と僕の名前を書いたのがど

うこう意図からは正確には判断しかねますが、それを加味すると仲良くとはいっても弟的な何かとして接するつもり、……というのがありますかなど)

書き終えたソレを、一人がじーっと見ると、顔を見合わせ、互いに両手をがっちり握手してみせた。

ふうー、と息を吐くと、二人はユイスに向き直ってナーノがようやく口を開く。

「それは私達を姉的な何かとしてユイ君は見てくれてるって事で……良いのかな？」

首を傾げながら普通に尋ねられ、今までの筆談は何だったのかと思ひながらユイスは何とか答える。

「あ、え？ えっと、今推測したことなので……」

「そ、そうだよねー……」

はは……とミイコは乾いた笑いをした。

それから急にナーノが改まって口を開くと、

「まあ、何を隠そう私達は」

「弟という存在に」

「憧れのようなものを……」

「抱いていまして……」

二人は交互に暴露した。

「な、なるほど……」

「そ、そうだつたんですねか……とユイスは返した。

ミイコが恐る恐る尋ねる。

「勝手にこんな事言つて、やつぱり……気持ち悪いかな？」

「いえ、そんな気持ち悪いという事は無いです。レストール士官は『え、君何本気にしちゃつてんの？ きもーい！ ゲラゲラゲラ！』

と、言つたように後で相手の反応を見て楽しまれたりするような方ではなさうなので……」

その一人芝居に一人は驚き、ミイコが慌てて言つ。

「そんなの絶対無いから！ それより大丈夫？ もしかしてそんな

酷い事誰かに言われた事あるの?」

その慌てぶりにユイスは大きく首を振りて否定する。

「い、いえ……無いです。そういう展開の話を読んだことがあるだけです」

「しょ、小説かあ」

「ちょっと驚いた……」

一人はほつとしたよつに息を吐き、ユイスはうーん……と考えてから口を開く。

「……ところで、レストラン士官がどう思われているのかは何んとなく分かりましたが、それって所謂『いない姉弟の存在に幻想を抱いたまま後でその現実に幻滅する』ありがちな事になりかね無いと思うんですけど……あ、いえ、何でもないです『ごめんなさい今は忘れて下さい……』」

話しているうちに一人がみるみる内にしょんぼりして行くのを見て、ユイスは言葉を濁した。

しまったあ……とユイスが場の空氣の悪さを感じていると、そこへ扉が開けられ、

「しつれいしまーす。お姉様達はどなたですかー?」

ネネコがトレイに飲み物を乗せて入ってきて言った。

「ミイコ・レストランですユイ君のお姉さん!」

「ナーロ・レストランです、ユイ君のお姉さん!」

途端に一人は今日の目的のもう一人を見てキリッと挨拶をした。

「これはどうもー、あたしは弟の姉のネネコです」

やあやあ、とネネコは自己紹介しながらトレイを床に置き、ユイスの隣に座った。

「あのわ……姉ちゃんずつと聞いてたよね?」

尋ねると、その一方でミイコとナーロはテーブルの上の紙類をいそいそと片付け、ネネコが返事をする。

「んーそんなことあるねー。で、ユイ君なんて言つて可愛がつてもらつてゐるの?」

「今日初めてそう呼ばれたから。ところがまともに会話するのもこれが初めてだから」

「そつかそつかー」

「うんうん、と頷いてると、ナーノが身を乗り出し、

「あの、コイ君のお姉さん」

「ミイコも身を乗り出し、

「私達コイ君のお姉さんと同じ年なんですけど」

「お友達になつて下さーー！」「お友達になつて下さーー！」

同時に言つた。

パツと氣づいてネネコは快諾する。

「ん。もちろんいいよー」

「ネネコちゃんありがとーー！」「ネネコちゃんありがとーー！」

パアアアと二人は顔を輝かせ、これはこれは、とネネコが挨拶をする。

「ひひひひひー。一人は弟のお仕事仲間をいらっしゃいけど、弟をようしくお願ひします

「はー！ もちろんですーー！」「はー！ それはもちろん」

同時に言つと、ネネコは床のトレイを空いたテーブルの上に置き、飲み物を勧める。

「では、ひとまず飲み物どうぞーー」

そこで一度四人は一息ついた。

コップから口を離して、徐にネネコが聞く。

「それで、なーことみーー」はコイスを弟扱いしたいの？

「えつと、まあ、うん」

「そ、そうだね」

曖昧な返事を一人がすると、ネネコが困った表情をして、

「うーん、コイスの姉はこのおねーさまだけだからなあ……みーことなーこ、喧嘩する？」

シャツとファイティングポーズを取つた。

「え」「え」

「弟は……渡さない！」

驚いている二人を置いて、ネネコは立ち上がり間延びした声で両手を広げ宣言した。

「そこを何とか、コイ君を下さい！」

「ミイコもノリで立ち上がり、その暴挙にナーノが声を上げる。

「ちよ

「ええ……」

何だこれ……というコイスの呴きが漏れた。

「まーまー。やはりここは穩便にだね。あたしの部屋で作戦会議をしよう！」

言つて、ネネコは招くようにしてミイコとナーノを流れでそのまま部屋から連れ去った。

「何だかなあ……」

まあいいか、と思い、コイスは筆談に使つたペンと紙を片付け、トレイと飲み終わったコップを片付けに部屋を後にした。

コイスの本だらけの部屋とは対照的に、技工士の使う工具、測量機などの精密機器や技術書が幾つも置かれているネネコの部屋。

「散らかつてごめんねー」

ネネコはそう言つて適当に床にスペースを作り、三人で座つた。

「二人はさー、コイスにお姉ちゃんとかお姉様とか呼ばれたい系？頭撫でたりしたい系？ それとも食べたい系？」

ぶつちやけた発言をしながらネネコはゴーグルを磨き始めた。

「ま、前二つを……」

「同じく……」

「まー、それなら別に良いんだ」

ポソリと呟くと、二人はホッとしたような表情をする。

「家の弟は歩く図書館と呼ばれるぐらいで、本当に図書館にあるような本しか読んでなくて、アレな本も家では取り扱っていない。で、レムリア様一筋の子でもあって、その教えは人よりも多く知つてゐるしきちんと従つてゐる。この前まで死んだ目してた子で一見何か世間の

裏まで知つてそうに見えるけど、実は綺麗さっぱり真っ白な子です。大爺ちゃんと同じ絶対完全記憶なのが分かつた時は大爺ちゃんがアレな物は絶対に大人になるまでは見せるなって言って、まあ結局そんな心配しなくても弟は見なくて、極めつけに男の子の初めてのアレも15歳になつてもまだ来て無い。要するにアレ系に対しても医学的な事は知識では馬鹿みたいに知つても所詮は初心そのもの。だから、大人になるまではできるだけ変な事は教えないでねつて事を言つておきたかったんだ」

ネネコの思い出すような説明を、二人は真剣に聞いて最後に頷いた。

「分かりました」「はい」

それを聞いてネネコは笑つて言う。

「うん。まー、弟は人の温もりを感じると普通に嬉しがるから、手とか頭とかさりげなく触るといいと思うよ」

「おー……」「へえ……」

良い事を聞いた、という表情をすると、ネネコが付け加える。「あ、でも他人にやられると恥ずかしがるかも。耐性無いから。という訳で作戦会議しゅーりょー」

「ありがとー」「ありがとー」

一人がパチパチパチと手を叩いた。

「どういたしましてー」

手を叩き終えると、ナーコが、あ、と気がついたように一つだけ尋ねる。

「あの、初めてのアレが来てないのって……？」

「あー、大爺ちゃん曰く大人になつたら自然と来るからって聞いた」「そなんだ……」「そなんだ……」

一人は教官からそんな事聞いてない、と思いながら同時に呴いた。

「そうだー、アルバムとか見る？」

「見ます！」「見せてください！」

ネネコの発案から、その後しばらく三人はリンクドルース家のアル

バムを見て過ごした。

そして、改めて三人はユイスの部屋に突入した。

「ただいまー」

「ん。おかえりー？」

何かを読んでいたユイスが気がついて言ひ、「いそいそと一人はテーブルの傍に向かい、鞄を手にとった。

「あれ、ユイ君、それ何？」

「えっと、家の過去の帳簿……取引記録です。下から借りてきました」

パツと浮かせてユイスは見えるようにした。

「まあ……」「えらい……」

二人は同時に口元を手で覆つて言つた。

「あ、そろそろ私達帰るね」

「突然来てごめんね」

「あ、いえ」

そしてナードミイコの二人は勝手口から見送られ、去つていつた。

「で、ネネコ姉ちゃんレストール士官と何話したの？」

玄関口で尋ねると、ネネコが呟く。

「んー。アルバム見てた」

「え？」

「ユイスもお姉様と見る？」

「覚えてるけど？」

肩をすくめてネネコが残念そうに言つ。

「つれないなあー」

「いや……見るなら見る？」

「お、ホントー？」

「うん」

「じゃ、いこいこー」

ネネコはユイスの肩を押して、二人は上の階へと戻つて行つた。

何だかレストール士官のお陰様で無駄に疲れた気がしないでもない僕は、姉とアルバムを見始めると結局、姉が何の写真か分からないものを全部いつのどの時のものか説明させられ余計に疲れたが、それはそれで何だか良かつたような気もしたのだった。

### レムリア真殿九院室。

レムール山脈内部を掘り、密かに構築されているここは決して表に明らかにされる事はない国の裏側そのものだ。

曾祖父から付きつきりで仕事を教えて貰い、片つ端からそれら全てを覚えていく事十数日。

昼食後、唐突に曾祖父が僕がまだ見ていない九院室の奥を案内すると言った。

その際、この前家に突然やつてきて弟という存在に憧れていたという本性を持つていたレストール士官は一人して「ナリサ教官、私達がユイ君を案内しましょうか?」と僕と曾祖父の対面の席で同時に言ったが、軽く曾祖父は「それには及ばん」と一蹴した。

レストール士官は「お姉ちゃんって呼んでくれないかなー?」オーラを常に発しているが、僕はやっぱり普通に恥ずかしいので呼んでいない。

ともあれ、僕は曾祖父の後について、情報統括室の最も付近に繋がるメンバーの部屋や調理場兼食堂よりも更に奥に行く事になった。ただ、かなりの急ぎ足になつたが。

九院室は基本的に暖かな橙色の照明を用いているので、密閉されたこの空間であつても気持ちは滅入りにくい。

それでも通路は全て超硬度炭素材の壁材が使用されていて、それが延々と敷き詰められた単調で無機質な感じがする。

定期的に出くわす隔壁を幾つも通り抜け、飛ぶ必要のある上下に伸びる通路を移動し、再び何度も分かれ道になつて通路を定期

的に曲がりながらついた先に出たのは、ここがレムール山脈の内部だというのを忘れてしまいそうになる程に情報統括室よりも更に巨大な、巨大な、ぱっかりと開けた、そしてとてもなく明るい空間だった。

「ミーティアクリスタル……じゃ、ない？」

「そうだ。ただのミーティアクリスタルではない。クアントプリズムと直結している。これが情報統括室の全システムの中核だ」

そう、曾祖父が言つてこの空間の眼下に見えたのは、ただでさえ巨大な空間の大部分を占め、複雑なコード類の繋がる台座に浮かぶ、大きなクアントプリズムを内包する更に巨大な虹色に輝くミーティアクリスタルの塊だった。

「これでシステムの処理を……」

「そうだ」

「でも、山脈内なのにこの光量は、あれは一体」

「見て分かる通り、数ヶ所の孔を通して地上に降り注ぐ天の光を収束採光し照射している」

「どうや……いえ、何でもないです」

「どうやつてと聞いた所でここはレムリア様が造つたのだ。

「当然夜になれば、光は集められないが……。最悪ここにだけは部外者を通してはならない」

ナリサは重々しく言つた。

「え？ 部外者なんて……」

「例え万一千も有り得ないとしても、部外者が絶対に入つてこない保証は無い。今お前には仕事しか教えていないが、極秘の国嘗士たるからには今後戦闘訓練も積んでもらつ」

「そうなの！？」

聞いてないよとユイスは心底驚いて声を上げた。

「何を驚いている。当然だろ？ 国嘗士の課程には何がある  
当然知ってるけど……とユイスは嫌そうに言つ。

「戦闘訓練……です……」

「そうだ」

「えー……」

ナリサは厳しく言ひ。

「えーでもあーでも無い。基本的にここは何でもできなければならん」

「は、はい……。では、レストール士官も戦闘訓練を当然……？」

「当然だ。あの双子は強いぞ」

「そ、そななんだ、ですか」

「それだけ九院室は重要な所だという事を覚えておけ」

「……はい」

コイスは間を置いて、その言葉を心に刻みつけるように頷いた。  
「では次に行くぞ。ついて来い」

言つて、ナリサは元来た道を戻り始めた。

ある程度戻り、そこからまた別の道を進み始めてからしばらく。  
幾度も隔壁を通過した後に、九院室の終りを告げる扉があった。  
「ここから先が両隠宮との共同区画に入る。行くぞ」

「はい」

入つたその先で曾祖父が言ひ両隠宮との共同区画で見たものは、  
簡単に言つてしまつと工場のよつなものだつた。

見たこともない機械が大量に並ぶその工場はこの時動いてはいなかつたが、散々見てきた超硬度炭素材などから始まつて色々造られるのだという。

両隠室のメンバーとはいづれまた別の機会に会うことになると言われ、共同区画入つてすぐの所で話を聞かされてまた戻つた。  
通路を引き返す途中、曾祖父から両隠宮についての説明を聞かされた。

両隠宮とは空と地上の両方において九院室と同じく表では明らかにならない事を秘密裏に行つているレムリア様私設の特殊部隊で、九院室と同じく極秘の国嘗士に、技工士と探索士を加えたメンバーで主に構成されていいるという。

どおりで、技工士の曾祖母に探索士カイルが所属している訳だ。

「空の丘」にいる両院室のメンバーは定期的にレムール山脈の地表に偽装されて作られている出入口を通り飛空艇で空と地上とを行き来するらしい。

そんな出入口がレムール山脈に存在するという話にまず驚いたが。この二ヶ所を案内された後、息抜きは終わりだと言われ僕と曾祖父は再び情報統括室は作業に戻り、いつも通り夜までそれは続いた。レムリア真国の現在一般に知られている技術水準を遥かに超えるものがここにある。

そして、それらを作ったのはレムリア様だ。

ここに来てから、レムリア様が持ち得る高度な技術を国の中核で何故秘匿しているのか、その理由を考えていたが、真国の歴史とレムリア様の教えを考えると少し分かつて来た気がする。

歴史を振り返ればレムリア様が民草に授けて下さったものは数多いが、レムリア様は基本的に技術は発展しなくても良いと考えている方だ。

それでも真国民が自然に技術を発展させて来た分には、収穫業における機械の普及禁止などの例外はあるが、その成果は現在に至るまでに基本的に反映されている。

レムリア様から技術を授けて下さるその内容は、往々にしてその真国民の技術発展の段階に応じている気がする。

多分それはレムリア様は何よりも真国民の心を大事にしているからなのだろう。

例え高度な技術が無くても人は大地の恵みに感謝し、互いに笑い会う事ができるのだから。

真暦起源年、レムリア様は一体どこからこの地に来たのかと尋ねた時に「遙か、遙か遠くの空から」というその答えを思い出すと疑問は止まらない。

遥か遠くの空とは、一体どれ程遠くなのか、真暦起源前には一体何があつたのか、そもそも一体どうして遙か遠くからレムリア様は

来たのか、どうしてレムリア様は絶対的な力を持ちながら常に真国を優しく見守るかのように居続けて下さるのか。

真国民が笑顔でいる事がレムリア様の欲しいものだから、と言つても余りにもレムリア様はレムリア様でありすぎる。

そして僕は、レムリア様を思い出すと、その度に質問に答えて下さった時に一瞬見せたあの表情が脳裏に浮かび上がって仕方がないのだ。

丁度そんな事を考えながら部屋のベッドで寝ながら眠りに入ろうとしていた時、部屋の扉が開き、レムリア様が顔を出して言つた。

「ユイスよ、上で少し、話をせぬか」

円形を描くその間には夜空の淡い光が注ぎ込んでいた。

ユイスはレムリアに小脇に抱えられ、九院室上層部にある下から続く空洞を通りそこへ上がつて来た。

「さ、到着だ

「は……はい……」

少しばかりとのぼせたかのよつにふらふらと床に足をつけた。

きょとんとしてふわふわと浮いたままのレムリアが尋ねる。

「随分顔が赤いが、そんなに恥ずかしいか？」

「はい、それはもう……」

下を見ながら言つと、にこりとレムリアが微笑む。

「そうかそうか、そんなに嬉しいか」

「え、いや、あの……。はい」

慌てて手を動かしたが、最後に小さく頷いた。

「つむ。して、ここはどうじや？」

「えつと、綺麗……だと思います」

空を見回すよつとして答えると、レムリアが首を傾げる。

「私がか？」

「あ、それはもちろんレムリア様は綺麗どころか、

口早に言い始めたのを見て、苦笑して手で制止する。

「いや、良い、冗談じゃ。ユイスよ、追々と言つていたその約束通り話をしようところ事なのだが、何か聞きたい事はあるか?」

控えめに口を開く。

「では……この前の続きをには……」

「言つておいて何だが、その話を語ると私の心が救われてしまうのでな」

レムリアは困った様子で言つた。

「……え?」

「自分語りとは概して他人に自分の内や過去を知つて貰い、理解されたことに自身が安堵してしまつものだといつ事じや」

その説明を、ユイスは黙つて聞いた。

続けてレムリアが口を開く。

「尋ねられたからといって、私が過去をまだ15歳のお主に何でも話すのは余りにも卑怯に思つ」

未だユイスは沈黙したまま聞き、レムリアが指を立てて問つ。

「そこでだが、少し遊びを交えよ。ユイスよ、私は一体何者だと思つか

ん、と一瞬考えて口を開く。

「れ、レムリア様はレムリア様で……」

「はは、何と可愛らしい答えじや。撫でてやろひ」

にこり、と笑つて言つと、ユイスが素つ頓狂な声を出す。

「へ」

「遠慮せずとも良い、減るものでもなし。立つたまといつのも何

じやう。それ」

はいはい、とレムリアがユイスに力を掛けると、ユイスを浮かび上がらせ、

「あ、わ」

レムリアにまた小脇に抱えられる形で頭を撫でられる。

「正直、私はそう言わるのが一番嬉しい。私の心の寂しさはこのようにしか埋められないだろ。」幾ら物があつても何の意味も無い」重力を全く感じず浮いたままレムリアに小脇に抱えられ、身体も密着した状態に、ユイスは恥ずかしさで目を白黒させた。

少しの間ゆつくり頭を撫で続け、ユイスも少しは慣れて来た所で徐にレムリアが口を開く。

「お主なら読んでいるだろ。が、ある概念の事は知っているか」

ユイスはレムリアの顔を下から見上げる形で言う。

「……は……はい……知っています。その概念で決してレムリア様を呼んではいけないという事も」

「あの概念で呼ばれるとな、心が裂けそうになる程に痛む」

ユイスの無言の返事に一つ間を置いて言う。

「私はな、この世界で特に傲慢で罪深い存在の一人だろ。」

その独白にユイスは信じられない言葉を聞いたと言つ風で尋ねる。

「レムリア様が……傲慢で、つ、罪深い存在の一人……ですか？」

そんな事は

「お主は真国をどう思つ」

言おうとした所をレムリアがユイスの顔をしつかりと見て遮つた。ユイスがゆつくり頷く。

「……僕は好きです。皆生活にもお金にも困らないし、レムリア様が仰るように笑顔で、幸せです」

「だが……本当の意味で人々は自由に、自然に生きていると思つか」

ユイスは反論気味に言つ。

「……レムリア様の教えの中で、皆やりたい事はやろ。と思えば何でも自由にできます」

「その私の教えの中で、と言つのが既に自由でも自然でも無い」

レムリアが首を振ると、ユイスが声を上げる。

「それはレムリア様が絶対で」

「そうだ。そうなるよに私が真国をそうした。私の傲慢とエゴでな

ピシヤリとレムリアが言った。

「……でも、傲慢というにはレムリア様は真国民に余りにも見返りを求めるさすぎます」

「言つたまう。私は物は要らぬと。國の頂点の地位も權力も本当は要らぬ。全ではただ心が欲しいからだ」

目を閉じて小さく首を振ると、再び目を開きユイスを見て笑つて言つ。

「……安心せよ。私は全て自覚し、意図してやつてゐる故、後悔は微塵もしていない。お主のような子供を見ると確信できる」

ユイスがその言葉に少しホッとした表情になると、レムリアは空を見上げて言つ。

「私が一体何者なのか、今の話から想像を巡らせてみて思いついたら、それが大体私の正体……そういう事だ」

「は……はい」

二人はそのまま空を見上げて静かにしていると、再びレムリアがぽつりと口を開く。

「時にユイスよ、もうじきこの國は別の國と、人と出会つ事になるかもしけぬ」

「え？ 別の國……ですか？」

ユイスは考へても見なかつたような顔で、レムリアは、おや、と首を傾げる。

「そんなものは存在しない、とでも思つていたか？ 私は遙か遠くから來た。当然そこに、人は住んでいたのだ」

「そうか……とユイスが目を揺らして気がつくと、レムリアは遠い目をして言つ。

「千年を優に越すにはやつてこれたが、そろそろ時代の変わり目をしれぬ。……済まぬな」

「何故……レムリア様が謝られるのですか？」

悲しげにレムリアは呟く。

「異なるものとの接觸は、人を変える。お主が好きだと言つてくれ

たこの国もな

「それは……」

レムリアはユイスから表情が見えないよう空高く見上げ、少し語調を強める。

「だがな。私は守つてみせる。ひたすらに私の傲慢とエゴを貫き通し、この国と民と私の心の居場所を。……例えまた再び罪深き行いをすることになろうとも……な」

レムリアは小脇に抱える力を少しだけ強める。

「レムリア様……」

「そのために、九院室と両隠宮を作ったのだから」

その瞬間、どんな表情をしているか見えないレムリア様から、頬を伝つて流れた涙が僕の頬に落ちてきた。

ただ、とても悲しい表情をしているのだという事だけははつきりと分かった。

レムリア真国が成立する以前の遙か遙か遠い昔。

そして遙か遙か遠い人類発祥の地にて、まるで終わること無く文明は進歩し続けた。

人々は自由に機械を以て大空を飛び、上空に存在する数々の浮遊島へとその足跡を伸ばし他の生物と比較すればその繁栄は實に見事なものだった。

人は無から有を造り出す事ができない。

資源が枯渇すれば人は遠くへ、遠くへとまだ人の手のついていない遠くへとそれを取りに行き、自然にその遠くの地にもいつの日いか街ができ国ができた。

高度な技術力を誇る資源の枯渇した国々と、高度な技術力を誇つた者達が移り住んだ資源の豊かな新興の国々。

無限に海と大地と大空の広がるこの世界においてすら彼らはいつの日いか争いを始めるようになった。

高度な文明を持った彼らの争いは壮絶だった。

感覚の麻痺した者が一度外気圏に浮く浮遊島を他国の地上の大地に落とし、その国に甚大な被害を及ぼすという超えてはならない一線を超えてしまって以後、その戦争は止まらない拡大を遂げた。禁止されていた筈の大量破壊兵器による報復、そのまた報復、戦火の勢いは止まる事無く瞬く間に広がつていった。

文明の始まりの国々から最も遠い辺境の国々で戦火に巻き込まれるのを恐れた人々の中にはより遠く、遠くへとまだ見ぬ新天地を目指し逃げ出して行く者もいた。

しかし、そうでない国は自国が生き残るには最早他国を全て滅ぼさねば終わらない終わりの見えない恐怖に陥った。

そんな中、以前より人そのものの強化の研究を、超能力を操る浮遊島に生息する生物などを元に行っていたある国が存在した。

その国の中核で行われていた計画の名を人類絶対進化計画と言つた。

その計画はいつからか、生物兵器としての転用にも熱を帯び始め、その国にも戦火が及ぼうとしていた時、まず一体の白銀の髪と青い目をした人造人間が生み出された。

自我を極限まで抑えられた一体の超能力を操る人造人間の生物兵器としての性能は確かに優秀だった。

人型の大量破壊兵器として、一体は攻めると命じられた国を跡形もなく破壊した。

しかし、その一体は致命的な欠陥があつた。

自我を極限まで抑えられた結果、命令が正常に働かなくなり暴走を引き起こした。

一体の人造人間は猛威を振るい、次々に国を滅ぼしていく。最早コントロールの効かなくなつたその一体に対し、その国は保険として用意していた更に四体の人造人間を投入した。

その四体には人類が戦争によつて最後その文明と技術の殆どを失つてしまわないようありとあらゆる知識を注ぎ込まれ、最悪、人類を導く存在となるよう人間の個としての人格を与えられ生み出された。

四体は真つ先に暴走した一体の抹殺を行いに向かわされ、戦闘を行つた地域で壊滅的被害を出すことになつたが、激闘の末に倒すことに成功した。

だが、その後すぐにこの人造人間を生み出した国は他国に酷く恨まれる事になり、四体は結局暴走した一体と同じく他国を滅ぼすよう、そして自国を守るよう命を下された。

四体は下された命令を忠実に遂行して行つたが、人間としての人格を持たされたが故に自分達の存在意義に対して実際にしている行動に疑問を抱き始め、四体の内一体が自身の判断で自國に牙を向き、滅ぼしてしまつた。

最早その時、文明の始まりの地一帯の大陸は巨大なクレーターの

湖が幾つも残り、時には陸地ごと吹き飛びただただ海が広がり、僅かに陸地の一部分が残るに過ぎない有様だつた。

かくして、四体はその後最終的にそれぞれ東西南北の方角に別れ、遙か遙か遠くの空へと散つて行つた。

別れた四体は、自分達の存在意義を遂行する為、人類を導くべく、戦火を逃れた辺境の地に住む人々の元に降り立つた。

知識はあつても経験の無かつた彼らにとつては人類を導くというのは失敗の連續だつた。

最初は好意的に迎えられても、次第にその余りにも普通の人類と隔絶した力に恐怖され、迫害され、追い出された。

そして、その後も何度も何度も失敗した。

それから永い時を生き、白銀の髪に青い目を持つた四体の人造人間の内の一人が「レムリア」と呼ばれる存在だつた。

白銀の髪に青い目をした四人の者達が空に浮いていた。

「粗方の事は終えた。……我々はもう共にいるべきではない」

面立ちが秀麗な男性に見える一人が言つた。

その男性に全く劣らぬ美貌の女性が言つ。

「だが、私達はこの世に四人しかいない同胞だ。別れなければならぬ訳では」

その女性と全く同じ容姿をした女性が言つ。

「もう、自覺している筈だ。私達は既にこうして四人で居続けても、心の痛みが癒える事はない」

「別れても問題ない。我々は互いに離れたとしても、どこにいるか、分かるのだから」

目を閉じて四人目のもう一人の男性とやはり全く同じ容姿をした

男性が言つた。

「我々は未だ破壊しかしていない。故に再生させなければならない、我々の存在意義にかけて」

「だが、本当に再生させる必要があるのか？ また同じように「破壊しかしていない我々にそのような議論をする資格は無い」

「行動しなければ始まらない。ただ、やるだけだ」

その後、四人はそれぞれの分かれる方角を決める。

「さらば、同胞よ」 「さらば、同胞よ」

「さらば、同胞よ」 「さらば、同胞よ」

そして、四方向に散つていった内の一人が私だつた。

私達四人は、荒廃しすぎてしまった文明発祥の地で僅かに生き残つた人々に恐怖されながらも、彼らをより集め、せめてまともに生活できる状態まで戻す手伝いをした。

しかし、彼らは私達を見ては恐怖と憎しみの目を向け「世界に終末を齎した者」と呼び、私達は最早この地に留まり続けたとして文明再興などできないと判断した。

そして議論の末、四方向に分かれる事を決めた。

文明発祥の地から離れれば離れるほど戦争の傷跡は目に見えなくなつていつたが、戦火を逃れ目的地を定めず無計画に移動をした人々の技術力は余りにも移動を急ぎすぎた為に、移住の成功した例に比べ失敗した例は非常に多く、そのまま衰退してしまつていった。

未開の地には当然未知の生物が住まい、未知の病気が存在し、気候が違う事もそれを助長していた。

それでも生活をしていた人々の元へ私は降り立ち、失われた技術の復活を目指し協力しようとした。

だが、彼らはすぐに恐怖を目に浮かべ、私を拒絶した。

当然のように空を超高速で自力飛行し、どんな外敵であつても、それが生物で無く自然現象だとしても軽く薙ぎ払う事のできる力は、私達四人が「世界の終末を齎した者」と呼ばれる事を知らない彼らにとつても、単純に恐怖の対象でしかなかつたのだ。

良かれと思つてやつたが、当時の私は余りにも人間を知らなすぎ短慮で、その後も愚かな行いを繰り返し続けた。

一度学んだ反省から、為になるとしても安易に力行使しないようになると決め、また新たな地を探し求めた。

辿りついた先に見えたのは十数の飛空艇の姿だったが、惨状が広がっていた。

当時の飛空艇は高速で移動でき、水に関しては大気中の水分を抽出する技術があつたが、後続からの補給部隊がある訳ではない以上、食料は必須な存在であり、補給の為には海上で海洋生物を獲る、地上に着陸して現地植物の採集や動物の狩猟によつて賄うか、そうでなければ定住して作物を栽培する必要があつた。

その十数の飛空艇は、その地に定住して作物の栽培を行おうとしたが、気候条件や知識不足の問題で失敗していた。

高度な機械化のお陰で作物を容易に大量生産可能だつた当時の多くの人類の中で、早々に戦火を逃れるために逃げ出した富裕層は、農業に関する知識を持たなかつたのだ。

彼らは予定していた作物が取れなくなると採集や狩猟に力を入れたが、未知の生物との遭遇によつて人々の命に犠牲が発生する事もあり、戦争とはまた違う恐怖から、果ては地上に乗員を残したまま飛空艇を勝手に発進させて逃げ出した者も現れ、次第に集団としての統制を失つた。

私が見たのはそれでも懸命に食料を調達しようとする者達の姿だった。

安易に力を使わないと決めた筈の私はその状況にどうしても我慢ができず、その代わりに今度は彼らと直接の接触を控え遠くから見守ろうと決めた。

夜に現地生物及び植物で食用に耐えうる物を狩つて彼らの住まいから程遠くない彼らが普段狩りに出かけに通る所に置いておいた。翌朝、彼らは充分な量の食料を見つけ、氣味悪がつたが飢えを堪える事はできず、それらを食べて腹を満たした。

遠くから見えた彼らの表情が少し綻んだのを見て、私は嬉しくなつたが、それは間違いだった。

それからというもの、定期的に食料を届け続けると、ある時から彼らは自分達で採取と狩猟に出かけるのを止めてしまい、私が起こしている現象を待つようになってしまったのだ。

私は彼らが自分達で努力する気力を削いでしまったのだとその時になつてようやく気づいた。

これ以上続けるのは良くないと判断し、ある夜、彼らの住まいから程遠くない地域で広範に森を吹き飛ばし、大地を耕し、川の流れを整えて畑を作り、彼らの栽培していた穀物の適切な栽培方法を見つからないよう拝借した紙に畑の位置と合わせ書いて残した。

加えて、穀物の栽培が軌道に乗るまでは食料は届けるが、それ以後は自力で何とかして欲しいと書き添えた。

既にこの時私は無意識に入々に恐怖される事に怯えていたのだろう。

文明を元に戻す以前の問題だった。

彼らが穀物の栽培に成功するまで見届けた後、私は最早彼らに接触できずその地を後にした。

力を使ってただ一方的に助ければそれで全てが解決するものではないという事を、ようやく理解した。

その後私は、どうしたら人と上手く関わり文明再生ができるようになるか、その手がかりを求めてまずは人の心理を学ぶ事にした。その為、目立つすぎる髪を染め、小国規模で移住に成功した比較的人口の多い新たな地を見つけ、そこで入々に紛れ生活を始めた。

小国規模で移住に成功していた地は、実際既に国と言つて差し支えないぐらいに、その国は強力なリーダーシップを執る指導者の元で纏まり、機能していた。

そこにレムリアという名ではなくマーサという偽名で紛れ込んだ私は、その時私が手を出さなくとも自然と文明は復活していくよう

に思つたが、私が取り返しの付かない破壊の限りをしきくした事は紛れも無い事実で、せめても技術の早期復活に協力できるようになると研究者として働き始めた。

そして実際その国で技術は時を重ねるごとに目覚しい復興を遂げて行つた。

基幹産業が整えられ、食料の機械による大規模大量生産が当然のように行われるようになり、次々に物が作られ、売られるようになり豊かになつた。

復興中は国民が一丸となつて働いていたが、生活基盤が安定し、機械が普及し生活が楽になり、余裕が生まれていつた。

一方で私はひたすら研究者として働き続けた。

膨大な知識のあつた私には、失われた文明の機械の設計図、機械の部品を製造するための機械の設計図、必要な材料や加工法、原理、それら全てを文字としては当然の如くまるで映像で見てきたように知つていた。

次々に失われた技術を復元させ、全く疲れず睡眠も必要とせず飲食も必要とせず昼夜問わず働き続ける事のできる私は研究所で重宝されたが、共に働いていた研究者達は研究所を離れていつた。

本当に最初は、私は髪を染めてはいたものの、それ以外の容姿が人にどう思われるのか恐怖された経験しか無かつた為、男性から好意を向けられ、女性からは嫉妬を向けられ、その初めての経験には動搖したが、それより最も異端なのは私の能力が高すぎた事だつた。私を好きだと言った男達は、私が余りに優秀すぎた事で好意から一転劣等感を抱いて研究所を辞めて行き、女性も劣等感からやる気を失い研究所を辞めていつた。

放つておいても全く容姿の変わらない私は、年を重ねたように見えるように偽装して生活をし続けた。

度々国からは功労を表彰されたが、その周囲からの視線は異物を見るような目で、私は孤独になつていつた。

私が過去にした行為から考えれば、孤独である事など何の代償で

も無いとその時は思えたが。

知識通り資本主義経済は再興し、一応の私の存在意義は果たせているのだと……その時私は思い込んでいた。

だが、研究者の私は度々命を狙われた。

当然私を殺す事など不可能なので、全て未遂で終わつたが。

余りにも早すぎる技術の復活の原因となつた私は恨みを買ったのだ。

国からは感謝されたが人からは恨まれる。

目覚しい再生を遂げたその国において、確かに生活は豊かになつたが、私が急速に失われた技術を復元して機械化が進みすぎた結果、労働力として必要な人の数を超えた分の人が余つた。

余つた人々は生きる為に移住しようやく定住した筈のその国から、今度は金を稼ぐ為に仕事として国を出て他の地の開発に行くようになつていつたのだ。

国で誰かが不自由なく暮らす一方で、誰かが見知らぬ地に飛び出し苦労して暮らす。

人と人との間には厳然たる経済格差が開いていた。

不満が生まれるのは当然だつたのだろう。

国民一人一人にIDを付与し、国がその管理を機械で行い、社会秩序は保たれていた。

しかし、他人に危害を加える者、殺してしまう者、自殺する者がいなくなる事は無く、世間ではその情報が淡々と流された。

戦争から逃れ生き残る為に、移住してきた筈なのに。

最早国が一丸となつていた時の人々の活気はその国からは無くなつていた。

人の心理を学ぶというのも余り上手く行かなかつた。

結局技術の復元に集中したのも原因だつたが、時間が経てば経つほど私と人の直接の会話は減つていつた。

人と食事を取る度に感じた違和感はこの時から私の中にあつた。彼らは至極当然のように食事を取り、場合によつては残す。

大規模生産できるようになつた以上、残しても人が食べるのに必要な分には確かに問題なかつたが。

「食事ができるのは嬉しいと思ひますか？」

私が彼らにそう尋ねると、

「え？」

「ん……まあ、嬉しいには嬉しいと思つよ。美味しいって言つた方がいいかもしねいけど」

「はーい！ オレ、食事ができて、嬉しいですっ！」

一人がそう明るく言つた瞬間、彼らはくすくすと笑つた。彼らの様子は必死で生きる為に食料を集め、食べていた時の人々の表情、私が見て嬉しくなつた時の表情とは違つた。

「あの機械女でも、あんな事言つとはね」

「嬉しいですか？ つてアイツが一番嬉しくなさそうな顔してるよなー」

「そうそう、自分の顔見て見ろつての。にしても美人なのに勿体無い」

「逆に美人すぎて気味悪いと思わないか？」

「お前、初めて会つた時惚れてただろ」

「お前がな」

彼らは私に面と向かつては言わず、私のいない所でそういう事を話していた。

彼らは時と場合によつて言つことを変える習性があつたから、それが本当に本心なのかどうか私には判断がつかなかつたが。

本心を「言つてはいる」のか、「言つてはいない」のか、それとも「言えない」のか、それが私には分からず、彼らは複雑な生命体だつた。

私は研究者として働いた給料を、自分の為に何かを必要とした訳でもなかつた為、それらほぼ全てどこかしらに寄付してはいたが、招待されて寄付先の施設の子供に会いに行つた事があつた。

子供達の必要とするものを私が一人の子に手渡し、

「ありがとっ！」

そう笑顔で受け取った子供の顔は、私が見て嬉しかった表情と同じで、私は嬉しかった。

人は成長するにつれて本音を曖昧にする。本音を曖昧にする事が人として成長するという事なら、それはやむを得ないのだろうか。

また、失われた技術を復元した研究者として有名で、多額の寄付をしていた私は、ある報道番組にゲストとして呼ばれた。

「相当多額の寄付をされているという事ですが、どのような想いで寄付をされていますか？」

「寄付を必要としている所がある一方、私には特に使い道がないので、必要としている所で使用して貰つた方が効率的と考え寄付しています」

「そ、そうですか……」

その女性キャスターは驚いた。

「使い道が無いと言わされましたか、何か今欲しい物はありますか？」

「ありません」

「で、では、普段休みの日には何をされて気分をリフレッシュされますか？」

「いえ、復元していない技術が残っているので、その研究をしています」

「休日にも研究をされているのですか？」

「はい」

「ま、まだ技術の復元をされるのですか？」

「しない方が良いですか？」

彼女は困ったように言つ。

「い、いえ、そういう事では……。では、研究による技術の復元とは、マーサさんにとってズバリ何でしょうか？」

「私にとつては特に必要な無いものです」

「……は？」

「……私自身にとつて技術の復元は必要ないですが、この国にとつてはあつた方が良いですね？」

意味が伝わらなかつたと判断し、私は改めて説明をした。

「そう、ですねえ……。あの、マーサさん自身にとつて必要ないとは……どういう意味でしょうか？」

「技術が復元されなくとも私は生きていけるという意味です」「な……なるほど……」

その取材を終えた後、その場に居合わせた人達の私を見る表情は奇異な物を見るようだつた。

そして、それ以来私が命を狙われる回数が増え始めたのだつた。文明を再生させる事、それこそが私の存在意義なのだと思つてやつてきたが、私自身は特に感慨も無く空虚な気持ちで技術を資料に残し終えた後、私は研究室を去り、國を去り、また違う地へと向かい、同じように技術を復活させていつた。

そしていつの日か気がつくと、また戦争が始まつた。

人は年を重ね成長するとしても、過去の間違いを繰り返さない訳ではない。

戦争の発端は独立戦争だつた。

急速に技術が復活した国を出て、新たな地を開拓してそこに移り住んだ人々が本国から独立して新たな國を建国する為に始まつた。問題は兵器の性能が既に高すぎた事だつた。

未開の地の生物に対する高性能兵器や山林の開発や鉱物資源を採掘する為の高火力爆薬などを、脆い人間に対して使えば甚大な被害が出るのは明白だつた。

互いの国の大幹産業を潰し合い、軍事施設を破壊しあい、経済は破綻し、人が大量に死んだ。

人に原因があるのか、高度な技術に原因があるのか、私に原因が

あるのか。

その状況下で、私は力を使はなかつた。

経験から言つて、私が力を行使して一番早く戦争を止める方法としては一国を残し周囲の他国全てを消し飛ばす事しか考えられなかつたからだ。

結果として、自然に国は荒廃し、その形を失い、文明は再び衰退した。

戦争をして潰しあつた国で生き残つた人々は、戦争をしていなかつた国へと難民となつて流れ込み、また問題を起こした。

私があちこちで技術を復活させていた為に、どこの国も必要以上に労働力としての人を必要としていなかつたのだ。

「もうこれ以上人はいらない」

ある国の高官が思わずこう口走つた。

「要らない人間はいるのか？」

という問い合わせがある。

「要らない人間はいない」

しかし、大部分の人はこう言い、更に再びの問い合わせ返る。

「それでも本当に要らない人間はいないのか？」

「それでも要らない人間はいない」

そしてまたこう答えが返るのだといつ。

私には不思議だつた。

「要らない人間はいない」と大部分の人はそう言いながら、戦争では事実殺し合つてゐるのだ。

しかし、私にとつて「要らない人間はいない」という問題自体「いてもいなくても私は生き続ける」ので考える必要性が無いが、そうでありながらにして私は億単位で人間を殺し尽くしたどうしようもない存在の一人だつた。

少なくとも、難民が流れ込んだ国にとつては「人は要るのか、要らないのか」という問題ではなく、表現としては「受け入れられない難民は邪魔だから他所に行つて欲しい」と言う状態だつたのだが

う。

文明生活に再び慣れてしまった大分部の人々は元の生活を、近くに豊かな国があるにも関わらず、それを見ずに新しくやり直すという選択が取れなかつたのだ。

難民の受け入れに窮した国で、手早く対策を打つた国はまた新たな地の開発を自国の保有する技術で始め、彼らをそこに移住させる計画を実行した。

難民の受け入れが上手くできなかつた国は、治安が悪化し、暴動が起き、ついには難民の虐殺が起き、虐殺される難民がその国の国民を殺し、また争いの火種となつて国は衰退し、泥沼の様相を呈した。

流石にそういう事態を見て、人は自然に物理的ないしは経済的にでも、どうあつても争い合うのだろうと大体そう理解した。

ただ、技術を復元させ、文明を復元させればそれで良いというものではないとも理解した。

「痛いよお」「お腹すいた」「寒いよ……」

戦争で荒廃した国を訪れると、親を失つた子供、親に捨てられた子供が泣いていた。

それを見た私は、助けようかと思つたが、一時的に力を振るつて助けたとしても、彼らは、ましてや子供なら確実に私に依存してしまふだろうと想い、それはできなかつた。

だが、難民問題を抱えている国を放置しておけば、いずれまた、目の前の惨状が広がるのだろうと思つた時、私は再び力を使う事を決心した。

私は戦争が起こり荒廃した土地で、飛空艇を作る設備が残つていた場合は襲撃しては破壊し尽くし、荒廃した国を去つて豊かな国に移ろうとする飛空艇に襲いかかっては力を掛けて強制的に元の地に戻し、飛空艇を奪い取つて置き去りにした。

既に難民が溢れ返つていた国では、強制的に彼らに力をかけて、奪い取つた何隻もの飛空艇に押し込め、同じように戦争が起きた地

に戻し、徐々に飛空艇を増やしながら、その工事を繰り返し続けた。一通り終わつた時には、自力で空を飛ぶ何者がが無人の飛空艇団を引き連れ、難民を次々に連れ去つたという情報が彼らの国々では有名になつたが、確かに最悪な事態になるのは強制的に止められた。しかし、それで全てが解決した訳ではなく、荒廃した国で人攫いが横行したりと、新たな問題は起きたが。

その後、私は国々の動向を監視しもし再び戦争が起きた場合には介入して無用な争いを止めようと考え、外気圏のある浮遊島に集めた飛空艇団と共に降り立ち、私個人の研究所として使用する事を決めた。

浮遊島の地盤をくり抜き、巨大な地下空洞を作り上げ、そこに飛空艇をしまい込んで、それらを分解し研究所の為の資材とした。他に必要な機器は、最後に研究者として働いた国に一度戻つて調達し、各種資源は自力で空を飛び回り集め、研究を行つた。

国々の監視ネットワークを作るのは私が同じ技術を復元し続けただけに容易だつた。

浮遊島にいながらにして、各国のネットワーク情報収集が可能になつてから、特にやることは無かつた。

そこでふと、人類絶対進化計画の研究を、今の互いに争いを始めてしまう人類を私のような生物兵器としてではなく順当に進化させる事に応用したら、何がが変わるかもしれないと考え、以後かなりの期間その研究に没頭する事になつた。

監視生活を始めてから、致命的に文明が衰退するような大規模な戦争は起きなかつた。

流石の彼らも私達が猛威を奮つた終末戦争から逃がれ、技術復元後の独立戦争を経験し、強力すぎる兵器での相互攻撃をしたが最後そこに勝者など存在せず、国の致命的な衰退しか無いのを早々忘れ

はしなかつたのだ。

また、今度は終末戦争が行われた地の方角に戻るという方法も存在し、資源問題で争い合う事も早々無かつた。

私が難民をそれぞれの地に強制送還し置き去りにした国々も、それぞれの復興を時間と共に徐々に遂げて行つた。

それよりどうかしていたのは私の方だつた。

人類絶対進化計画それ自体が私達のような異端な存在を生み出した研究であるにも関わらず、私はその研究をずっとしていたのだ。何しろ、私自身という生きた資料が存在する為、体内の各種自己修復・自己増殖型ナノマシンや「クアントリア」という私の強大な力の源泉である変異性極小共生生物の抽出などは容易だつた。

研究の過程で小動物を捕まえては、老化抑制ができるか、「クアン」が使えるようになるのかどうか実験を繰り返した。

試行錯誤の中、既に人間用だつたものをデチューンする必要性があつたが、老化抑制は正常に働き、変異性を正常性のクアントリアに戻したモノを更に調整して拒否反応を無くして共生させると、飛ぶ事ができるようになり、確かに成功した。

その後も幾つかの生物で実験しデータを蓄積した後、生態系を乱す訳にはいかないのでそれらは処分した。

また、知識の中にクアントリアには自然界に存在する結晶クアントプリズムと反応性があるという情報があつた事からクアントプリズムの調達をして特性研究も行い続けた。

地上の急速な技術復元を遂げた国々は、戦争をしなかつた為に悲惨な事態にはならなかつたが、時と共に高齢化が進み、若い者達は将来を見据え自発的に新天地へと飛び出して労働人口が流出していき、更に高齢化が進行していった。

医療費の増大で財政が逼迫した国々の中には、私達を生み出した国のように、人間の老化抑制などの技術を研究するようになつたが、それが成功する前に彼らを新たな脅威が襲つた。

新型ウイルスの流行。

広範に人が広がり未開の地を巡り、潜伏期間が長くかつ致死率の高い未知のウイルスと遭遇した結果は悲惨だった。

高齢化社会かどうかに問わらず、次々に人が倒れ、急速に人口が減つていった。

人々は働いている場合ではなくなり経済は麻痺し、ワクチン製造が間に合いそうもない事態に人々は恐怖し、また飛空艇に乗つて遠くへと逃げ出して行つた。

彼らは逃げ場があるが故に本当に良く逃げ出す。

社会が成り立つのに元々必要分しか存在しなかつた人口の四割がウイルスで死に、飛空艇で逃げ出した人々がその分いなくなつては、残つた人々だけで社会を維持するのは明らかに不可能だつた。

クアントリアのお陰でウイルスなどに感染しない私がワクチンを開発した時には、時既に遅く、国には人ではなく使用されなくなつた建物と機械が残つたというような有様だつた。

私が復元させた技術の数々が取り残されているのを見て、それはまるで私が取り残されたように思えた。

文明が自然に衰退していく一方で、私は一体どうするのが正しいのか分からなかつた。

失われた技術の復元は確かに行つたが、結果は一時期戦争を引き起こし、ウイルスで人が大量に死んで無意味な物になつた。

人類を導くと言えども、人は余りにもあちこちに広がりすぎていた。

地上で戦争が起きないかどうかの監視は意味が無くなり、人類絶対進化計画の研究もある程度進んだ所で、私はこれからどうすべきなのか、何か手がかりを見つけられないか、と特に当てもなく、浮遊島ごと外気圏を移動しながら各地の地上を放浪し始めた。

人々が飛空艇で移住していつた新たな地においては、失敗した例の多さと成功の例の少なさがまた見られ、ただ過去を繰り返していようだつた。

行き先も決めず、ふと、偶然見つけたのは、ある大陸の小さな村

だつた。

高度な文明の姿はそこには無かつたが、確かに人は生き、その表情は明るく見えた。

私は上空から村の状況を見た上で、村の中心から明らかに離れて建つて有一件を、接触しても目立たないと思ひ訪れる事にした。家の外で畠仕事をし、健康に日焼けしている老人は私にすぐに気がついた。

「あ？ おめえ、どつから来た？」

「あの方角からです」

手で示した方角は確かに私が来た方向だつた。

「んー……あつちの方角なあ。荷物ももたねえでか？」

「私には必要ないので持つていません」

首を傾げて老人が言つ。

「ん？ なんだあ、変な別嬪さんだな。……んで俺に何か用か？」

「特段私はあなたに用はありません」

「……あ？ あー、そうかあ。特に用もねえのに来たのか？」

訝しげな目だつたが、この老人は今までに人々が私を奇異の目で見てきたような、そういう目とはどこか違つた。

もしそういう目で見られたらいつも通りすぐに立ち去れば良いと思つていた私は、彼と会話をし続ける気になつた。

「行き先も決めず旅をしているので偶然着きました」

腕を組んで唸る。

「はー、旅。旅……旅、なあ。俺もどつか行つてみてえと思つ時はあるがあ……おめえ旅はどんなもんだ？ 楽しいのか？」

「楽しい……？」

「何だつまんねえのか？」

私は手を振つて答える。

「楽しい楽しくないではなく、私はどつしたら良いのか、その答えを探しているだけで……」

「何言つてんだ？」

「え？」

「『どうしたら良いのか』って、そんなの『おめえが何したいか』……そんだけだろうに」

当然のように言われたその言葉は、とても新鮮だった。

「私が何をしたいか……？」

「そうだよ。おめえ何したいんだ？ 旅じゃねえなら何だ？」

「……私自身にはしたい事はありません」

彼は要領を得ない様子で聞く。

「はあー、つまり何かあ？ おめえは自分のしたい事を探してんのか？」

「そういう事ではなく私はどうしたら私の存在意義を正しく果たす事ができたと言えるのか、その答えを探していく」

上手く伝わっていないと思いながら私は普段言わない事まで言った。

「んなあー、複雑みてえだが……」そのまま立つたままで何だ、あっただ

言つて、老人は家を示した。

そのまま後をついていき、私達は家の庭先に座つた。

「私には失われた文明の技術を復元させ、人類を導くという存在意義があります」

「は、何だそりゃあ？ ジャ、おめえ試しに俺を導くとやらをするとしたら、どうすんだ？」

「技術を教えます」

私は極普通に答えた。

「俺が必要ねえって言つたらどうすんだよ」

「必要ないのですか？」

「現におめえがいなくても今まで俺は生きてるが？」

「はあ？ と彼は言つて、私はそれに肯定するしかなかつた。

「……そうですね。……そう言わると私は存在意義が無くなつてしまいますが」

「大体おめえその存在意義は、どうから来たんだ？」

「私が生まれたその時から、そう決められています」

「おめえの親がそう決めたのか？」

「そのようなものです」

「つかあー、随分調子こいた親だなあ。で、その存在意義を果たすつて？」

「はい」

「だが、現にどうしたら良いのかわかんねえんだろ？」

「……はい」

事実だった。

「まあ俺が思うに、今のおめえじゃ人類を導くなんて一生無理だ」

「彼は腕を組んでそう断言し、私には衝撃だった。

「何故……ですか？」

「そんな湿氣た面で『俺がてめえらを導く』なんて言つても誰もついていかねえよ。寧ろまだ俺の方がマシかもしだねえ」

「無性に悲しくなった。

「……では、どうしたら良いでしようか」「とりあえず笑つてみろ? いくら別嬪でも今のその表情じゃ駄目だ」

「……こうでしようか?」

私は笑顔という状況を再現するように表情筋を動かした。

だが、彼は本当に酷い物を見たように言つた。

「おめ、ひでえなあ。不自然すぎて氣味悪い。そもそも笑つたことあんのか?」

「……どうでしよう

「まあ無理に笑つても意味ねえ。だが、俺は笑えるぞ。……こうだあ！」

大声を上げて彼は心底嬉しそうな笑顔を作つて見せた。

それは私が昔見て嬉しかった表情と酷似していて、私は驚き、どうしてそんな風に笑えるのか尋ねた。

「何故、笑えるのですか？」

「俺はなあ、今この時を生きると心の底から思えれば、それでいつでも嬉しくなるんだよ。だから笑える」

「今この時を生きていの……」

「おめえもやつてみる？ そのままで無理なら『俺は生きるー。』……とこんな具合に腹に力込めて声出してみれば良い」

挑戦する事にした。

「……私は生きている」

「もつと腹から！」

「私は、生きている」

「もつと大きな声で！」

「生きている！」

私にとつて久しぶりに上げた大きめの声だった。

「出るじゃねえか。で、どうだあ、顔は全く変わつてねえが、何か気分変わつたか」

「……少しだけ、何かがこみ上げてくるような感じがしました」

「それだそれ。嬉しい、楽しい、面白い、そう感じた時には自然に笑うもんだ。そういう風に感じたことは無いのか？」

「嬉しいと感じた事はあります」

「おう、どんな時だ？」

「空腹だった人が食事をした時の表情や子供に物を渡した時にありがとうと言つて笑つた時の表情です」

「そつかあ。なら、丁度頃合いだし飯でも作つて食べてみつか？」

「……はい」

私の話を聞いてくれた彼の「ゲン」という老人は、私にとつて、悲しさと虚無感以外の感情を呼び起こし、抱き、自覚し、それを言葉で、表情で、表現できるようにしてくれた。

紛れもなく私の先生だった。

食事を作るに当たり、畑で作物を収穫する作業から始まつた。

「おめえ、野菜育てた事はあるか？」

「直接育てた事はありません」

「彼はため息をついて説明を始めた。

「何だ、無えのか。いいかあ、これはな、畑耕して、石どけてえ、肥やし撒いて、種撒いてえ、水やつて、雑草抜いて、寄つてくる虫共追い払つてえ、そうやつて育てて実つたもんだ」

「はい」

「そうすつとなあ、俺が育てたあ！ と達成感がある。しかもどうだ、美味そつじやねえか。で、次に実際食べてうめえ！ と実感する訳だ。それで腹を満たして、満足してえ、俺は生きてる！ とまあ苦労と達成感の後には嬉しい事だらけだ。やってみなけりや分からんだろうが、おめえもやる気があつたらやつてみる と良い」 そうして必要な分の作物を収穫する彼の姿は、私が技術を復元した国々に住んでいた老人達と比べると、比べる必要も無く活き活きしていた。

生きていた。

実際に料理する時も、食べる時も、そうだった。

「どうだ、うまいか？」

「美味しいです」

「なら、もつとうまそつに食え。おめえの場合はうめえ！ つて声に出せ。これがうめえんだ！ つてなあ。おめえも手伝つて作つたんだ。これは俺が作つた料理だ！ つて実感しろ」

私は彼に言われた通りに「美味しい」と声に出して食べた。

これは「私が作つた料理だ」とも声に出して言った。

声に出すと、少し心が温かくなつたような気がした。

当時の私はこの経験がレムリア真国に大きな意味を持つ事になるとは思つてもみなかつた。

食事の後、彼は陶器造りをしているのだとつりて、どうするか聞

かれ、私は見学させて欲しいと頼んだ。

部屋には輶轆があつたがそれは使わず「手捻り」という方法で彼は土を素手で触つて器を作り始めた。

「見てねえでおめえもやってみるか？」

そう言われて、私は挑戦する事にした。

知識にもあつたが、説明された通りにやつてみると彼が声を上げた。

「うめえじゃねえか

「そうでしょうか」

「おめえの場合はそこ」でなあ、そんな事聞き返すんじゃなくて褒められて嬉しい顔をしろ。する練習をしろ

「はい」

「次俺が褒めたら、ありがとうでも嬉しいでも何でも良いから言ってみる」

その後実際に彼はまた私を褒めてくれて、私は「ありがとひいぞ」

「います」と返した。

声に出すと、また少し心が温かくなつたような気がした。

次に彼は陶器用の土をすぐ近くの山に取りに行くと言つたので、私は彼が準備するのをそのまま待つっていた。

「何だあ、ついてくるのか？」

「はい、ついて行かせて下さい」

「別に構わねえが、その格好で良いのか。汚れるぞ？」

「問題ありません」

「まあそういうならそれで良いが

山道をのぼつていくとやがて、目的の土が取れる場所に到着した。彼に言われて私はスコップと一緒に土を採取していった。

彼が少し疲れた汗を搔いてるのに対し、私は全く疲れていなかつた。

「おめえ、見かけによらず力あるなあ

「ありがとうござます」

「今のは感心しただけなんだが……まあ、良い」

土を積んで重くなつた帰りの台車を行きと同じく彼が引こうとしたので、私は昼食を食べさせて貰つて、台車を引いた。

力を使えば全て一瞬で済んでしまう事だが、私は彼の目の前でありますからさまに力を使う訳にはいかなかつた。

戻つてからは持ち帰つた土を陶器用の土にする為に空氣を抜く作業を手伝い、夕食もまた一緒に食べた。

「ところで、おめえ旅をしてるつていうが、今晚どうすんだ?」

「その事ですが、近くに私の畑を作つても良いですか?」

「はあ? 話が見えねえ。今晚どうすんのかつて聞いてんだよ」

「畑を作ります」

「夜にか?」

「はい。駄目ですか?」

「寝ないのか?」

「はい」

技術の復元をした国々では寝ないで作業するというのは一定の頻度に押されていましたが、私は肯定した。

「……おめ、ホントに不思議な奴だなあ。俺には夜寝ねえで畑を作つてるのが信じられねえが、駄目とは言わねえよ。普通はそんな事いう奴いねえけどな。一応聞くが、おめえ、おめえ自身の事は大丈夫なんだな?」

「はい。大丈夫です」

「おう、なら俺は寝る用意すっから。鍬なら使つても構わねえが風邪引くなよ?」

そして彼は宣言通り寝る用意を始めた。

夜も煌々とつけられる照明が無い環境では夜になつたら人は寝る。

一方私は彼の家を後にし、一気に浮遊島に戻つて適当な作物の種から始まって必要な道具を持っていた素材で用意し、地上に再び戻つて作業に入った。

一晩の作業で彼の畑と同じ面積を耕し、畝を作り、種を撒いた。作業を終えた私は畑の側で朝になるまで必要はないが寝て時間を潰した。

朝になつてから、水を畑に撒き始めると、朝早く起きて来た彼がやつてきて驚いた。

「おお、何だあ！？ ホントに畑できてんじやねえか」

「おはようござります」

「おはようさん。にしても、おめえ、すげえなあ」

「ありがとうございます。……でも、良いことばかりではありません」

「ん？」

「私が力を発揮すると、人々はやる気を無くしてしまい、私に依存してしまいます」

彼は難しい顔をした。

「そういう経験があんのか？」

「はい……」

「……まあ確かにそうだなあ。一晩でこんだけ畑作れちまつと、家の畑も作ってくれないかなんて言う奴は出るだろ？」「彼は納得するように言つて、思い出すように続けた。

「何、だつたか、昨日の。人類を導くつつ一人の面倒見まくるのとは違うだろ？」「だが、やっぱおめえ次第なんじやねえか？」

「私次第……ですか？」

「人がおめえに依存するのが良くないと考えるのは分かるが、どうやらおめえにはそんだけできる力があるらしいこと」

「はい」

事実だった。

「だがおめえには、開き直つて人がおめえに依存すんのを気にせず力使うつて選択肢はあんだろ？」

「開き直つて……？」

「ああ」

「しかしそれでは」

彼は私の言葉の上から言葉を重ねた。

「つて事あ、おめえはそれはやりたくないってこつた」

「それは、はい……」

肯定すると彼は道ばたを指した。

「どんだけおめえに力があるのか知らねえが、例えば、その辺に死にかけの子供がいたとする。……で、おめえは助けたら依存しちまうからつて見過ごすのか？」

「……見過ごしたことは何度も、あります。恐らく彼らは……」

私には泣いている子供達の姿がすぐに思い出され、彼は頭を搔きながら口を開いた。

「……ホントにそんな経験あんのかあ。また暗え顔だが後悔してんのか？」

「どうでしょ、うか……正直、良く分からんんです。本当に」

更に彼は頭をかきむしり始めた。

「ぬあー。そもそもおめえにとつて導くらしい対象の人類つてのは何だ？」

「それははどういう……？」

「おめえにとつて、必要なのか、大切なのか、要らねえのか、それともどうでも良いのか、そういう事だよ」

「私にとつて……必要です。人類無くして私に存在意義はありません」

言つまでも無い事だつたが、言つた瞬間違和感を覚えた。

「次だ。おめえにとつて、一人一人の人間は何だ？」

「私にとつて……」

「おめえにとつてはどつかの人間一人が生きようが死のうが構わねえんだろ？」

「それは」

「俺もそうだ」

「え？」

彼は真剣な顔で話を始めた。

「俺の知らねえ遠くのどつかで誰か一人が死のうが生きようが正直、知らねえ。そのどつかの誰か一人は俺には会った事も見た事も無い知らねえ奴で、そもそも生きてるのか死んでるのかも、いるのかも認識できねえからな」

彼は首を振る。

「だがなあ、この村の人間が死んだら俺は悲しい。だが、この村の人間が死んだ事を遠くのどつかの誰かは悲しむのか？ 悲しめねえだろ。死んだ事に気付けねえんだから、そいつ個人を知らねえんだから。……おめえが見過ごした死にかけの子供ってのは偶然おめえが見た子供だ。見てない子供で死にかけのもいだろう。んできつと今もどつかに一人はいるだろうよ。今この瞬間死んだかもしれねえし、誰かが助けたかもしれねえ」

彼は私に指を突きつけた。

「おめえはなあ、おめえの存在意義とやらを人類という集合体と結びつける割には、人類が必要だと言う割には、人間個人を全く見てねえんだ。おめえにとつて個人は常にそのどつかの誰か一人でしかない」

言葉が、出なかつた。

「だが人間一人一人がわんさか集まつたのが人類だ。導くんだけ何か知らねえが、人類に関わるんなら、おめえが一個人として、存在意義だとかは置いといて、誰か一個人にきつちり関わらない事には何も始まらねえよ。おめえに人が依存しちまうのが嫌だつてんなら、力は使わないか隠すしかねえな」

「はい……」

彼は一呼吸おいて確認するように言った。

「……おめえ、実は恐がりで寂しいだけなんじやねえのか？」

「私が……？」

恐がりで寂しい。

「寂しく無いなら、わざわざ俺の畑の隣に畑作るか？ 見過ごした子供も、助けて自分に依存した後に逆恨みされるのが怖かつたんじ

やねえのか？」

「私は、私は……私はつ……私、はつ……」

どうしてか、その瞬間から涙が溢れだして止まらなかつた。

私は地面に膝をついて泣き続けた。

私はこの時、悲しみと虚無感の裏に、無意識に人に恐怖される事に怯えて、寂しかつた事によつやく気づいたのだった。

「おいおい別嬪さんがそんなピーピー泣いたら台無しだぞお。まあ何だあ、俺みてえなじじいで良けりや話し相手になつてやるよ」

「……はいっ……ありがとう、ござりますつ……」

彼が差し伸べてくれた「じつ」した手は、触れるとしても、とてもも温かかった。

ゲンさんとの日々の会話により私は時と共に感情豊かになつた。私が素直に感情を言葉に乗せられるようになると、ゲンさんは照れる事が多くなつたが私は気にしなかつた。

ゲンさんの家の近くに私は家も建て、作物をじっくり育て、ゲンさんの陶器作りを手伝つて過ごし、その際、人が作った物には心が籠つているのだと何度も何度も教わつた。

そしてゲンさんは私に度々「私自身がどうしたいのか」を見つけると言つた。

作物の収穫を何度も経験し、そして気がつくと一年が経ち、二年が経つた頃、ゲンさんは私にまた旅に出るようになつた。

「何故です。私はゲンさんと、もつと、ずっと話をしたい」

「……雛鳥はなあ、親鳥の元をいつかは離れるもんなんだよ。初めて会つた時のおめえは雛鳥だつた。だが、もう今なら大丈夫だ」

私は頑として首を振つた。

「嫌です。寂しいです。離れたくないません」

「つたあく、おめえは色々知つてる癖にこれだからなあ。そう言わ

れると旅に出ると言つてへへなるだらうが

「言わなくて良いです」

「おめ、子供じゃねえんだからよ。」のままだとおめえは精神的に俺にどんどん依存しちまつ。だから、そういう前に、おめえは旅に出来るべきだ

私は泣いた。

悲しくて、寂しくて、別れるのが嫌で泣いた。

「……仕方ねえなあ。たまに戻つてきて構わねえから旅には出ろ。」  
戻つてきた時、外の話を聞かせてくれりやあ良い

観念したゲンさんがそう言い、私もそこで妥協をした。

「……分かりました。でも、必ず戻つてきます

「よおし。だが毎日は駄目だぞ？」

「では一日置きに」

「お、お、せめて七日ぐらいは頑張れよ

「善処します」

「……ああ、そうかい。まあ旅に出るだけマシかあ  
そして出発の際、私はゲンさんに言つた。

「あの、ゲンさん」

「ん、何だ？」

「見送る際に、私を『レムリア』と呼んでくれませんか？」

「おめえの大層な名前か。ああ、構わねえよ」

「ありがとうござります。では、行つてきます、ゲンさん」

「おう、行つてこ、レムリア」

私の名を呼んで、軽く手を振つて見送つてくれて私は嬉しかつた。

「はい。すぐ戻つてきますね！」

「だあつ、いらあー、少しさは頑張れよー！」

そうして、私は村から十分離れた所で一気に飛び上がり、再び各地の放浪に出た。

最初は頻繁に村に戻つてはゲンさんに「戻つてくんのが早すぎるだろうが」と悪態を突かれながらも旅の報告をしていたが、少しず

つ、少しづつ、出かけている日数は増えていった。

一年程度では各地の状況は大して変わつていなかつたが、各地を巡つていると、いつの日にもかにも見た、泣いている、そのまま放つておけば死んでしまうかもしれない子供を、子供達を見つめた。

昔と違い、私の存在意義とは関係なく、私個人の感情で、助ける事で彼らが私に依存してしまいかもしれないとしても、はつきりと「助けたい」と答えが出ていた。

私は空を舞い、彼らが移住するに耐えうる新たな辺境の地を独力で開拓し、畑を作り、家を建て、生活環境を整え、各地で彼らを保護して運んだ。

突然飛んで現れた得体の知れない私の存在に子供達は怖がつたが、中には怖がらない子供もいた。

その子供が言った言葉が、

「……かみさま？」

だつた。

そう言われた瞬間、私は何か嫌な感じがしたが、その本当に神を見るような子供の透き通つた目を見てしまつと、わざわざ否定できず「君を助けに来た者だ」と言つて、その子供の頭を撫でた。

ただ、純粋な目で見上げてくるか弱い子供達を助けようと、そう思つた。

私は子供達が私に依存してしまわないようにできるだけ気をつけたが、空をどんな飛空艇よりも速く飛べる事だけは隠さず、たつぱりあつた時間で子供達に様々な教育を施し、空を飛ばして欲しいと頼まれば抱えて飛び、子供達は無邪気に喜んだ。

ゲンさん直伝の、生への実感を与えてくれる作物の育成とそれの収穫は子供達と共に一緒にその事を教えながら行つた。

しかし、私はゲンさんの住んでいた村で子供に会つた事が無かつた訳ではなかつたが、子供というものを知らなさ過ぎた。

それと同時に、彼らから多くを学んだ。

衣食住が整い、普通に生きていくにも関わらず、彼らは些細な

事で喧嘩するし、人の数だけ個性的だった。

食事の具の量が違うだけで、互いのものを見比べて少ない多いと騒ぎ、一人がお代わりすれば、それを見て、俺も俺もとお代わりしたと思えば結局食べ切れないなどなど……。

残した分は私が全て食べたが。

だが、喧嘩による言葉や行動の裏には本音が常にあった。

私はそれが知りたくて、どういう感情を抱いているのか、本当は何が言いたいのか、それらを喧嘩する彼らに尋ね続けた。  
それを知れば、人が争い合う原因が分かるかもしれないと思つて。喧嘩していた子供達は、私が「何を考えているのか」「どう思つているのか」「本当は何が言いたいのか」と尋ねると、パッと停止して私に「何でもない」「アイツが悪い」「いじめられた」などと「そもそも言おうとしない」「他人を非難する」「自分が被害を受けた事を主張する」と言つた方法で答えて来たが、そういう事を知りたい訳ではなかつたので、何度も尋ねた。

答えるのを拒否し、逃げ出そうとする子供もいたがそれはパッと捕まえて、最終的に彼らは大体、「俺は、取られて、怒つてるの！」  
「僕は……アレが欲しくてえ、羨ましかつたんだあ」と喧嘩よりも私の問いによつて泣き出しながら答え、「あー！ 泣かせたー！」と別の子供に非難された。

この時私は子供を集め私の意思で面倒を見ていたとはいえ、私が私の思う教育を施し、逆に子供から私が学んでいくその行為が、ある意味人体実験のようなものである事をその時は気がついていなかつた。

彼らが成長し、大きくなると、私は彼らと離れたくは無かつたが、ゲンさんと同じく、巣立たせる事の必要性を感じ、嫌だと言つても一定の年齢に達すると彼らを人が自然と形成した社会へと送り、旅立たせた。

だが、幾ら辺境の地と言えど、飛空艇を駆り人がやつてきた。

新天地を探していた彼らにしてみれば、小規模とは言え、都合良く充分生活環境の整つた地があるように見えたのだろう。

「ここを開拓の拠点にさせて欲しい」

そう言い始めた。

しかし、私は泣いている子供を助け、いはずは旅立たせたかつたのであって、放つておいても各地を開発する人々と、私が子供達の為に作った地を共有する程彼らに個人的感情を抱けず、寧ろ見なかつた事にして立ち去つて欲しかった。

それでも彼らにしてみれば都合の良い土地があるのを見つけてしまつた以上、それを利用しないという選択肢がどうしても取れないのだ。

それは、戦争が起きた国々の人々が難民となつて豊かな他国に押し寄せたのと全く同じ心理なのだと思った。

彼らが見過ごしてくれない以上、私が取つた方法は彼らからの逃亡だった。

いつの日いか、人々があちこちに逃げ出して行つたように。

私は表面上彼らの申し出に、構わないと言い、自國に戻つていつた彼らを見送つた。

その後、私は私達が住んでいた一帯の土地を地盤ごとくり抜いて浮かび上がらせ、また更なる新天地へと、私達の方が海を越えて移動したのだ。

その現象に子供達は動搖したが、もつと驚いたのは再び飛空艇でやつてきた所、大穴が空き、何も無い地を目にした彼らの方だっただろう。

逃げるという選択肢が本当に正しいのか、間違つているのか、それは分からなかつた。

だが、幸運にも充実した表情で静かに亡くなるのを、涙を流して見届けられたゲンさんは「おめえがそれで良いと思ったんならやってみる。やらずに後悔するよかやつて後悔した方がまだマシだ。そ

んでもまた一つ学べば良いじゃねえか」と私にそう教えてくれたから、私はやつて後悔する方を選んだ。

私がした事は間違いだったのか、私は悩んだ。

私が保護し、育て、再び人間社会に送り出した成長した子供達の様子は定期的に確認したが、上手く社会に馴染める者達がいた一方で、上手く社会に馴染めなかつた者達がいたのだ。

上手く社会に馴染めた者達は、ゲンさんから私が教わり、私が彼らに教えた事を社会に揉まれる事によつて徐々に忘れて行つてしまつようだつた。

逆に上手く馴染めなかつた者達がいたのは、私が刷り込んでしまつた形になつた価値観と社会との差に適応ができなかつたよつだつた。

特にその影響が顕著に出たのは、高度な文明が進んだ社会においてだつた。

それ以来、私は子供達を自国に戻すよりも、ゲンさんの村のよつな所に送り出すようにした。

私は自分がしている事が間違つてゐるとは認めきれない割に、子供達が苦しむのを見て、何が何だか分からなくなつてしまい、いつしか私自身による子供達の保護は打ち切り、保護した場合、各国の孤児院に任せてしまつた。

保護していた子供達を全員送り出した後、またもやどうしたら良いのか見失つてしまつた私には亡くなつたゲンさんは記憶と心の中にしか居ず、目の前で相談する事ができず、寂しくて、辛くて、泣いた。

私はゲンさんの教えが間違つてゐるとは絶対に思わなかつた。

あの活き活きと生きていた姿と高度な文明社会の中で暮らす人々の姿とは何かを比べるまでも無かつた。

私は再び考えた。

人が成長すると、本音を曖昧にするようになり、純粋さを失つて  
いくよう見えるのは本当にやむを得ないのか。

しかし、ゲンさんとあの村を見れば、やむを得ない訳がないのは  
明白だつた。

人が純粋さを失うのは、機械のせいなのか社会のせいなのか。

私はまた社会に紛れ込み、その原因を探る事に決め、各國の国々  
を転々とし始めた。

存在意義とは関係なく、自分の意思で。

変装によつて姿を偽つては技術者として働き、時には農業をして  
働き、時には企業で働き、時には教師として働き、時には社会学者  
の元で生の意見を聞き意見を言い、時には政治活動をと様々に事に  
取り組んだ。

経験して分かつたのは、私が価値を感じる事は、高度な社会にお  
いては建前として形骸化し、個人が何を言おうと現実との間にはど  
うしても乖離が開いてしまうという事だつた。

農業において、便利な耕作機械を一度導入し、そのあまりに高い  
効率性を目にすると、その後人々は手作業というわざわざ効率性の  
低い方法を続けようとはまず思わない。

そしてその瞬間から、天候不順によつて作物が不作になると慌て  
るにも関わらず、人々は無意識に食べて生きていける事を当然のよ  
うに認識するようになる。

もちろん、それが豊かになつたという事の証明だ。

だが、その瞬間、人々は大地の恵みの尊さをどうしても、不可避  
的に忘れてしまい、意識しなくなる。

貨幣経済が浸透、安定し、高度化した社会において、多くの人は  
無意識に職業を報酬額と結びつけて価値判断をしやすい傾向がある。

ただ、報酬額が異常に高く、人々が一般的に認識するその職業と  
釣り合つていないと多くの人が認めるような例外も存在するが。

本来国々を丸ごと吹き飛ばしてしまつた私が言えた事ではないが、

私にしてみれば、何度も崩壊してしまった社会における貨幣には大した価値を感じられず、その貨幣価値を裏付ける珍しい金属などこの無限に広がる世界において適当に掘れば幾らでも持つて来られる物でしかない。

一方で、貨幣経済が浸透、安定しておらず高度化していない社会においても、職業を報酬額でないとすれば、地位や権力によつて差別する傾向が強い。

自然に発展する社会において、人々は金、地位、権力に個人の意思とは関係なく自然に揉まれてしまうように見えた。

「あなたはどんな職業につきたいのか」

社会において、こう問われると人々は答えに対し、やはり運動している以上報酬額を完全に、完璧に切り離す事ができないように思う。

また、高度な技術により生活が豊かになつた社会においては、個人は消費者としては充実していくが、労働者としては不安定になつていくという現象が起きる。

収入や雇用には格差が生まれ始め、その収入と雇用を維持する為に、人々は終わりなくどこまでも努力し続けなければならない。

こうした社会の中で人々は表立つて殺し合いなどはしないが、常に自然に、自然競争に晒され続けているのだ。

もちろん当然だ。

それが自然な姿だから。

努力した者が基本的に勝ち、努力しなかつた者は基本的に負け、努力した者でも例外的に負け、努力しなかつた者でも例外的に勝つ。自然だからこそ基本が存在し、例外も存在する。

自然淘汰という考え方からすればそれで正しいのだろう。

動物であれば強い者が生き残り、弱い者は死ぬ。

だが、高度かつ複雑な社会を構築する事ができる人間の間では、人殺しは犯罪で、弱者だからといって完全に切り捨てるという事はまず行われない。

その点は本来的にあるべき自然の姿とは異なり、不自然だ。まるで私のように。

何の努力もしていないが、私は生まれた時からこれ程の異端な能力を持つている、余りにも不自然で、人工的な存在。

そして紛れもなく私は人によつて作られた存在だ。

競争の行われる社会一つを国と見れば、更に国と国同士も競争をする。

そして国同士になると最悪の場合、人が死ぬにも関わらず、悲しいことに戦争が起きてしまう。

一人一人の人間、個人個人の意思とは関係なく。

そして私が経験したこれらの社会には、私がゲンさんの村で経験した人の心の幸せ、嬉しさ、喜びが明らかに少ないようと思えた。どうにも人間は「自然」を相手に生きるより、人間同士で「自然に」争い合ってしまう生き物なのではないだろうか。

この人と人との争いを解消するとすれば、その方法は「自然」と「不自然」が入り交じった社会ではなく、完全に「不自然」な社会を作るしかないのではないかだろうか。

そして同時に、それは「不自然」な存在である私にならできるのではないかと思えた。

思えてしまった。

それが酷く傲慢な考え方だというのに。

……それからが私の、本当の、失敗の、連續の、始まりだった。

失敗した。

失敗して、失敗した。

失敗して、失敗して、失敗した。

失敗して、失敗して、失敗して、失敗した。

人は狂つた。

人は狂つて、狂つた。

人は狂つて、狂つて、狂つた。

人は狂つて、狂つて、狂つた。

私の時間を度外視した壮大な社会実験と壮大な人体実験の数々は人々の自然状態に影響を及ぼした。

人間は脆い。

肉体を喪失すれば死んでしまつ。

それまで私のような異端な存在がこれ以上生み出される事がないよう、私と同胞達が造り出された失われた文明の生命に関する復元させて来なかつた技術を敢えて放出すると彼らは狂つた。

基本的に文明が進み、科学技術が普及している国々で絶海の、他からの干渉を受けない唯一国は存在しない。

まず発展の過程で国が増えてしまうからだ。

それでも私がある国で老化抑制ナノマシンを世に発表すると、社会は議論を醸し、肯定的意見と否定的意見が出た。

まず他の国々にも、老化を抑制するナノマシン技術が開発されたという情報は瞬く間に伝わり、その国々も技術を欲した。

だが、彼らの社会構造からして、老化抑制という技術は劇物だった。

数十年働いた後老後の期間が存在するのが当然であつた所、寿命が飛躍的に長くなるとすると、彼らが一生に必要とする金が増える。漠然と老後を考えていた人達にしてみれば、現状ではまだ生きている筈にも関わらず彼らは、寿命が延びるという一見善い事の一方で未来の事を考えると急に困り出し、慌てる。

生きて行くのに金が必要なために、働くのを辞め、リタイアする訳にはいかなくなるのだ。

当然、高度な機械化の進んだ社会においては、例に漏れず必要分の労働力しか基本的に必要とされない為、元々リタイアする筈だった人達は今の職にしがみつき、企業は若者達を雇いにくくなるが、老化抑制によつて辞める者達の仕事に老化による支障が出る事もそ

れ程無くなるので、そのままなるようになつてしまつ。

若者達にしてみればまたしても職がなくなり、収入を得る事ができなくなる割に、長寿を生きる事になり、彼らは止むを得ずまた別の新天地を目指さなければならなくなり、人口バランスがズタズタになる。

結果として社会が否応なしに歪み、狂い出していくのだ。

老化抑制自体ならまだしも、高度な技術社会において、その技術革新の速度はより急激に、急激になる為、あつという間に次の段階にシフトする。

不老化ナノマシンの実現。

だが、この段階に到達した瞬間、人々の希望と恐怖の入り混じつた感情は自然にうねりとなつて現れる。

資源問題からして、一つの土地に永遠に住み続けるというのは不可能な事で、そうであるが故に失われた文明の地は古い国と新しい国が争つたのだ。

資源を食いつぶしながら、物理的に致命的損傷を受けない限り死ななくなつた人間達は生活水準を維持する為にはいざれまた国を捨て、旅立たなければならぬ。

しかし、未開の地の開発は常に危険が伴い、物理的に死ぬ可能性がある。

不老化した人々は誰も好き好んで未開の地の開発に進んで行こうとはしなくなるのだ。

誰が行くのかと揉める一方で、ならばと彼らは作業用ロボットの開発を始め、無人の飛空艇での開発を行おうとするようになるが、当然のよう同じように新天地を開発しようとする者達と競合する事になり、争いに発展する。

この段階で争いになるパターンはまだ良い方で、不老が実現した瞬間「それは生命の禁忌」だとしてその時点で内戦や他国との戦争になる事もあつた。

私も何度も命を狙われた。

いざれにせよ、彼らは長生きしたい筈にも関わらず滅ぶという矛盾した結果に至つてしまつ。

戦争が起きた時は私は昔決めた通り、介入して一時的に止めさせた事もあつたが、一度そつなつてしまつと人のうねりというものは止められず、人の漠然とした信用によつて成り立つ社会秩序は乱れに乱れ、程なくして私も止めるのを諦めてしまい、再び文明は滅びてしまつた。

また時には、不老化の技術は一部にのみ秘匿するよう国の上層部が抑えつけ、一部の人間達だけが恩恵を受けるようになつたり、それがバレれば内戦になつたりと、碌な事が起きなかつた。

更に、脳神経情報転写技術という勉強しなくとも脳に直接情報を注入する事ができる技術の放出も問題ばかりが起きた。

学校の大部分の存在意義が崩壊し、教師達はこの技術を「外道な技術」として非難するものの、結果として高度な知識を持つた子供はもちろん人々が大量に生まれる社会になつた。

しかし、まず子供に関して言えばまともな情緒を育む事はできなかつたし、知識的に全く同じ人々であるにも関わらず、それぞれの職業につける限界人数が存在する以上、やはり争いになつてしまつた。

人間社会はどうあつても自然に高度化していく以上、高度化した先に大崩壊してしまうその前に既存の社会形態を大きく転換させる極端に自然とは相反する不自然な技術を私は敢えて投下し、崩壊とは違うその先にある変化が起きないかと期待したが、かくして失敗に終わつたのだつた。

そして、その後散発的問題として自然に起きた事に、不老を獲得した人類で死を免れた人々が再び新たに社会を築き上げようという時、不老ではない人々に対し支配者として君臨しようとするという事などがあつた。

しかし、不死身ではないので、大抵従えようとした人々に殺されてしまつた彼らは死に、飢えや病気や自然災害によつても自然に彼らの生き

残りはその数を減らしていった。

だが、老化抑制ナノマシンによる寿命延長の効果はその後の人類には知らずして脈々と受け継がれていく事になった。

老化抑制ナノマシンは人が満19歳になると自動的に稼動し始める。件であり、満19歳になると自動的に稼動し始める。

そして、老化抑制ナノマシンは、起動タイミングを任意に設定した上で投与しなければならない不老化ナノマシンと異なり、人々が子を成せば自動的に胎内で子にも受け継がれる性質を持っていたのだ。

再びの文明衰退を経験した後の人類はこうして長寿化し、病気など経験する事による要素を排除すれば理論的平均寿命が130年になつたのだった。

当然私に手の届く地域全ての人類が長寿化した訳ではなかつたので、その後の人類は純粋種とナノマシンを体内に有する非純粋種との間で遭遇すると争いが起きやすくなり、純粋種の人々の中には長寿と若さを求める非純粋種の人々を無理矢理捕まえて無駄に血液を抜き取つて殺してしまふなどという事象が後を絶たなかつた。

私は後悔はしたし、私が育てた者達が子を残したであろう社会で戦争を間接的に起こした事に悲しくて泣いたが、実際に人間の寿命が延びるという明らかな変化が起き、再び文明が新たに始まり直す事を思うと、これからが本当に変化が起きるのではないかとまた淡い期待を抱いてしまつた。

私は再び発展途上の社会に紛れ込み、それまでに積んだ経験から、指導者として人々を纏めるというとうとう具体的に人類を導くという存在意義とも被る行動に出た。

私は極力文明の発展がゆっくり進むように努めたが、どうあっても便利さ、金への欲求を持つ人々にとつては私の指導方法には不満や反発を見せ、仕方なく正確な技術を小出しにすれば、まだ隠し持つてているのではないかと追求され、疑いの目を向けられ、でなければ私の周りに寄つてくる者達は皆、私の指導者としての近くにいる

ことでただ恩恵を受けようという魂胆がありありと分かり、私にはそれが辛くて悲しくて嫌だつた。

死にかけ、泣いていた子供達を集めて育てた時の方が余程ある意味一つの社会として上手くいっていたと思い至つた私は、寂しさもあつて、再び各地を巡り、孤児の境遇となつていて子供達を保護しては遙か遠くの辺境の地で育て始めた。

今度は子供達をどこかに送り出す事はしまいと心に決め、時と共に彼らは成長し、大人になつていつた。

それぞれが必要とされる仕事をして働き、工夫をし、大人になつた子供達同士が子を成し、徐々に人口が増えていつた。

村が出て、街が出て、徐々に社会としての大きさが広がつていつた。

そして自然に彼らは便利な機械を考えつき、私は無用な反発を招く事を回避する為に好きにさせた事で、ゆっくりではあつたが徐々に技術は進歩していつた。

私が空を飛べるという事は皆に明らかにしていたが、不老である事を知られ、迫害される事を恐れた私は老化する偽装をしていた為、150年が経過する時には彼らから去らざるを得なかつた。

その後も似たような事を各地で150年ずつ繰り返し、心の寂しさを埋めた。

しかし時には遙か遠くの辺境の地であつたにも関わらず、文明の進んだ所から新たな人々がやってきてしまう事があり、彼らは私が飛べるのだと知るとあり得ないものを見たように迫害し始めた為、私の勝手で地盤ごと逃げ出す訳にもいかず、そこでは数十年という期間にして泣いて逃げ出さざるを得ない時があつた。

しかし、逃げ出した後にこつそり確認しに戻つてみると、私は後悔した。

私は完全に間違つていたと思い知つて、酷く後悔してもし足りず、勝手に涙が溢れた。

私が共に過ごした皆は、私を追い出した新天地から現れた者と争

つた後だつたのだ。

だが、飛空艇に強力な武器を搭載していた彼らに適うはずも無く、街の建物はあちこちが壊れ、男達は多くが殺され、一部生き残つた者達は重い錘を付けられ、女達と子供達は虐げられていた。

私は本氣で怒つた。

これ程までの怒りを感じたのは初めてだつた。

私は姿を偽るのを止め、白銀の髪と青い目の姿で彼らの前に降り立つた。

「……よくも」

「おい、貴様何者だ！」

「コイツ空飛んで現れたぞ！」

紛れも無く私にとつて敵でしかない者共が何か喚いていた。

「構わん！ 殺せ！」

言つて男が銃を発砲すると、銃弾は男の胸に跳ね返つて直撃し、死んだ。

「なつ！」

「……絶対に許さない。絶対にッ……」

私は人類史上最凶の生物兵器としての姿を本当に本当に久々に解放した。

撃つてきた者達は全員自分の放つた弾丸で死に、私に恐怖した奴らは飛空艇に逃げ込み、その瞬間飛空艇を無動作で跡形もなく潰し、消した。

逃げ送れた奴らは蒼白な顔で街の者達に銃を向けて何かを喚いたが、再び無動作で地面に叩きつけ、そのまま全員死んだ。

本当に脆い奴らだつた。

街の者達は僅かの間に奴らが全員死んだ事に呆然としていた。

私は奴らを殺し終わった後、自分の行動の愚かさを呪つて、悲しさと後悔で泣いた。

「……レムリア……先生なの？」

一人の女の子が恐る恐る近づいて来て尋ねた。

「済まない、済まないっ……済まなかつたッ……」

「やつぱり先生っ！ 先生どうして、何も言わずに行つちやつたの？ みんな先生と一緒にいたかつたんだよっ！」

そう言つて、泣いて私に声を掛けるその子の言葉に私は何度も「済まない」と謝り続けた。

その後、またいざれ飛空艇がやつてくる以上、私は結局また地盤「」と更に遙か遠くの地へと移動した。

そのまま私は去ろうとしたが、彼らはあらうことか私を引き止めた。

彼らは私に恐怖を全く抱いていないという訳ではなかつたが、それでも引き止めてくれたのだ。

私は嬉しかつたと同時に、本当に申し訳なかつた。  
減つてしまつた人口に私はその地に時間を掛けて各地から少しづつ孤児を保護して育てて行つた。

そしてある時、それまで何度も言つてゐたが、再び子供から「僕も飛べたらいいのに」と言われた。

その瞬間、彼らが虐げられている光景と共に、モスピールした浮遊島の研究所とクアントリアについて研究した事を思い出した。  
そして確かに、人間用に共生させる通常のクアントリア自体は完成の域に達していて、後は投与するだけだつたのだ。

皆さんもクアンが使えれば、私との差異が減るのではないかと思えた。

それが私のまた愚かな行為にして、後に完全に開き直つて傲慢とエゴをどこまでも突き通す事になる切欠だつた。

私は皆にクアントリアを投与し、共生させた。

結果として、彼らは病気にかかる事は無くなり、クアンを使う事ができるようになつた。

力の制御はクアントリアが全て無意識のうちに教えてくれるので、暴走する事は無い。

それでも空を飛べるようになり、物を動かせるようになった皆の中には少しばかり走る者達もいたが、クアントリアは人の感覚を鋭敏にし、宿主に対し害となる物理的事象が向けられると自己防衛する為、不慮の事故はまず起こらないので大して問題は無く、平和だった。

何度か地盤ごと引越しを行いながら、時と共に再び徐々に人口が増え、技術が進歩していくと、皆の中にもまだ見ぬ所へと行ってみたいと思う者が現れ始めた。

やはり人間の性質なのだと、抑圧しても反発を引き起こすだけだと思い、私は禁止しなかった。

この時、もし他国と出会った場合どうなるか、薄々恐ろしい未来が見えていたが、私は幸せに生活できている事にばかり目を向けて、敢えてその事を考えずにいたが、その未来が訪れるのはそう遠く無かつた。

速度は遅いながら飛空艇もできると、本格的に外へと皆は飛び出し始め、特にその進出は外気圏の浮遊島において目覚ましかった。本来通常の人間は無重力の外気圏では高推進力を持つ飛空艇無しにはまともに移動できず、浮遊島も居住適正にはそれ程優れていな環境だったが、クアンを行使できる皆には浮遊島での生活は何の障害も無かつたのだ。

繁栄は見事で、皆が各地に広がり始めるに、いつの日にか地盤ごと引っ越し訳にもいかなくなり、とうとう通常の人類と出会ってしまった。

そして、皆は狂ってしまった。

通常の人間は皆を「化物」と呼び、皆は通常の人間を「力も持たない下等な原始人類」と称し、瞬く間に争いに発展した。

発端は皆を「化物」と呼んだ人間達が、捕まえてその力を探ろうとした事が全ての始まりだった。

そして共生しているのが通常種のクアントリアと言えど、皆の本気の戦闘能力の高さというと、脆弱な通常の人間の比では無かつた。相手が武器を手に持てば、それを力で吹き飛ばして武装解除し、皆は何も持たずして遠くから相手の首を捻れば簡単に死んでしまう。私は普通の人間を滅ぼしたい訳など無く、ただ皆と過いJせればそれで良かった。

恐れ慄いて逃げ帰った人間が自国に戻った時点で、どうなるか想像はついていた。

彼らは私達が彼らを滅ぼそうとするのではないかと恐怖し、先手を打つて攻撃をしかけて来た。

私は皆に戦争をさせる訳には行かず、最前線に出て、攻めてきた飛空艇団は全て彼らの国へと強制的に追い払った。

彼らの国についた途端、私は集中砲火を受けたが、反撃はせずに皆の元へ帰った。

皆は私が彼らに攻撃しない事に意義を唱えたが、私はそこだけは頑として認めなかつた。

それからというもの、昼夜問わない私の防衛と無反撃の日々が続いた。

私が反撃しない一方で、彼らの攻撃は時間と共にエスカレートして行つた。

延々と私が防ぎ続けるのを見て、皆は私が休みも取らず防衛だけを続けてその場に縛り付けてしまつていてに憤つた。

そしてある時、私が反撃しないなら、と若者達が独断で飛び出してしまつた。

クアン反応で皆一人一人の位置が感知できる私にしてみれば、い迷惑だつた。

若者達の進行ルートは私に見つからないようにしたつもりなのか酷く迂回していて、私は最大速度で彼らを連れ帰り、再び防衛に戻つた。

一体いつまで続くのか、次第に私の心は無感情な物になつていつ

た。

人間というのは共通の敵を作ると互いに争っていた筈が一転、団結することができる。

恐らくその対象が私だったのだろう。

彼ら普通の人間の国々にしてみれば、それこそ使えば国ごと終わるような大量破壊兵器の保有をするにも維持費が掛かり、分解するにも金が掛かるという状況下、都合よく幾らそれらを撃つても問題のない都合の良い的でしかなかつたのだ。

ようやく止まつた時には、私は精神的にすり減つていた。

しかし、彼らがいつの日にもか来ない訳がなく、私はまた地盤」と移動する事に決め、順番に遠くへ、遠くへと移動していった。

ただ、中には移動を拒否し、残りたいと主張する者達もいたため、止む無くその者達は私は置いていくしかなかつた。

かくしてクアンを使える新人類の間においても、幾つもの国ができて行つた。

距離的遠隔性というのは、須らく人々のコミュニティを明確に分ける。

こうなつてしまつと、後は人類同士の争いが新人類同士の争いに発展するだけの事で、私がその争いに介入すると、皆はとうとう私を邪魔に思い始め、完全に私の手から皆が溢れてしまつた瞬間だつた。

その割にどこの国も「レムリア様、是非我々の国にお越しください」などと言う始末で、辺境の国では結局私が昔防ぎ続けた普通の人類との戦争が始まり、国が吹き飛んだ。

私は一切自業自得だなどと言つ氣は起きず、これが人間の定めなのだとしたら何と悲しい事なのかと、ただただそれだけが悲しくて堪らなく、泣いた。

人類を導くなど、土台無理な話なのだ。

だからこそ私が思い出したのは、

「『おめえが何したいか』……そんだけだろうに」

というゲンさんの言葉だつた。

結局私がそれで始めたのは、やはり泣いている子供達を保護する事で、何も変わっていなかつた。

そして子供を保護していく中で、助けが間に合わず、願いを私に託して腕の中で逝つた子がいた。

「レム……リアさま？」

子供は青白い顔で、私の名を呼んだ。

「……何だ？」

「あのねつ……わたし今度生まれてくる時はね……」

「うん？」

「みんなが笑つて暮らせる……世界がいいなあ……」

そう言つて、その子は息を引き取つた。

「ああ、そうだな……。つく……うつ……」

私はまた、泣いた。

そして、遂に決心した。

子供が言つた通り、世界は無理でも、せめて皆が笑つて暮らせる国を作つと。

私の感情で、私の意思で、私の傲慢で、私のエゴで。

そこからがレムリア真国建国の始まりだつた。

国造りに当たつて守るべき条件を考えた。

他国との接触を防ぐために、遙か遠くの絶海の大陸を唯一の国土とする。

人々が常に「自然」と向き合つてゐる事。

故に農業において、例外を除き大規模な機械化は絶対に認めず、手作業で生への実感を人々に想起し続けさせる。

人々がより高い報酬を求めて自然に競争する心理を逆手に取り、「自然」に向き合つ農林水産業から離れないよう農林水産業に最も高い価値がある事を常識とし、高い報酬を与える事によつてそれを裏付ける。

気象という自然現象は私の力で完璧にねじ伏せる。

しかしながら、抑圧にならないように意志さえあれば、報酬は少なくする代わりに、国の発展と共に商人やそれ以外の職業に就くことを選択できるようにする。

商人が金を民から吸い上げるのではなく、民の方が常に余裕を持つて商人に金を供給する経済形態を取る。

原則的に民にとつて必要以上に金の価値を持たせないようにする為、金は労働と共に常に蓄積し続けるようにし、当人が死亡した場合、物理的財産を除けば残つた金は一切相続させずに消滅させ一代限りのものとする。

人と人との繋がりを重視し、職業の別無く人の居住区はできるだけ連続性と一定の完結性を持つようにし、無作為に孤立点在させ社会の中に更に小規模な社会を必要に増やさない計画的街造りを徹底する。

人の未知への興味を抑圧する事は不満を引き起こす為に、いずれ飛空艇が生まれた時には國土の外へ飛び出す事は認めるしかない。

但し、他國の人間と接触しないよう、飛空艇の性能は速度面と航続距離面から上手く抑えて行き、当然、建国の地の位置が最も重要な事は言うまでもない。

権力が徹底的に腐敗する以上、絶対的に私がそれを阻止し、同じく権力を持つ者達には努力と報酬の切り離しを行い、農林水産業よりも圧倒的に低い報酬を設定し、権力が強まるにつれてそれを反比例させる事を徹底する。

それを実現させる為に私自身が見返りを求めぬ國の絶対の存在となる事によりあらゆる不平と不満を跳ね除ける。

そして國の運営に携わる者が少なくても民の状況を把握できるようなシステムを構築する。

私が國の絶対的存在として力を存分行使できるようにする為に、民は全て新人類に限定する。

必然的にクアントリアを体内に共生させるが故に病気はまず無くなり、老化によつて身体が動かなくなつたとしてもクアンで移動す

る事ができ、ナノマシンの効果と合わせて介護を必要とせず、不慮の事故での死亡確率を減らす。

更に、民の総体そのものが家族として機能するよう、人と人との繋がりを増やす為に、常に四、五世代が存在するように民が子を成すように促し、人口の増加にも注意を払つて調整をする。

平均寿命が130年である以上、一生の内、複数の職業を経験したい者達の為に、転職がいつでも可能なように、常に別の職業になる為の教育を受けられる機会を儲け、専門教育では子供大人問わず入り交じつて勉強ができる環境を整える。

自己の中にある幸せを、他者の中にある幸せを、互いが共有し、その輪が広がつていくようにする。

その為には言葉に感情を素直に乗せ、不和や誤解を招きにくくなるよう民に国の思想と理念と価値観を幼年時に徹底的に洗脳教育し刷り込み、皆が笑つて暮らせる社会にする。

私は何としても民の心の幸福を、笑顔を守る。

……それが引いては私の心の寂しさを埋められる唯一の方法だから。

私は今度こそ、今度こそ失敗しないようにと、動いた。

まず、研究所を秘匿していた浮遊島の施設を、高速移動の際風よけとなる外周を山に完全に囲まれた盆地のあるより大きな浮遊島へと完全に移し替え、他に必要な物を予めできる限り揃え、そこで移動しながら民が充分に生活を送る事のできる環境を整えた。

始まりの民は各地を巡り、技術の進歩が進んでも自然を愛し、私の意見に賛同してくれる者達を集めた。

そして、果てしなく遠く、遠くの地に移動しようと、浮遊島に移り住んだ私達は、私の力によつて昼夜問わず浮遊島ごと超高速で移動し続け、文明の滅びの速度を計算に入れ経験則上向こう千年以上は外部の人類が到達し得ない理想の地を目指した。

移動の間に、始まりの民達とは常に互いが笑顔でいられるように会話を絶やさなかった。

遥か年単位で飛び続け、ようやく見つけた。

巨大すぎず小さすぎず、気象条件、気候、地形、資源、景観それらを勘案し、周囲にあつた不必要な陸地を幾つも消し飛ばして人工的に環境を整えたのが、今のレムリア真國の大陸だった。

そして陸地に降り立つた私達は、畑を作った。

ここが縁豊かな、心豊かな、笑顔豊かな国となるよう願つて。

……それもよつやく千年を優に超えてまた終わりを迎えるといふのか。

私はそれを考えると思わず悲しくなつて、涙が出てしまつた。  
「済まぬな……気にするなコイスよ。さて、そろそろ眠いだらつ。戻るとしようか」

「……はい、レムリア様」

腕の中で素直に頷くコイスの自然な笑顔とその温もりは本当に暖かく、心の芯にまで優しく染み入るようだつた。

原版をこのままでお読み頂いた皆様、ありがとうございます。意図的に造られた「ティーストピア」の国、そうでありながらも、確かにコートピアとも呼べなくもない国といつ、コンセプトそのものは変わらないのですが、良く考えなおすとの原版は社会設定に不足があり、新しく書き直しを致しました。

## 探索士課程試験（前書き）

「」があたりすじ通りの新しく書きなおしたもので。

絶海のレムリア。

海上の陸地を俯瞰すると雲を突き抜けて高く聳える塔を基点に縁  
豊かな自然の風景と人々の住む家々が見える。

その陸地の上空、大気の性質の変わる空域には一つの浮遊島が悠  
然と存在し、その周囲の空には飛空艇が飛び交う。

人々は完全に平等では決してないが、生きることに不自由する者  
は一人たりとして存在しない。

しかし極端なまでにある者のエゴが貫き通された国、レムリア真  
国。

それを理解した者は果たしてそれをコートピア呼ぶべきなのか、  
ディストピアと呼ぶべきなのか。

空は遠くまで晴れ渡り、そこかしこに小さな花の咲くなだらかな  
丘には心地よい風が吹く。

草原に座る女性が目の前の四人の子供に色鉛筆を渡し、続けて紙  
を出し並べて浮かせて見せると子供の一人が声を上げる。

「さんまいー？」

「はい、紙は三枚です」

女性がにこやかに答えると、子供が次々に声を上げる。

「えー！」

「たりないーー！」

「たりないよー？」

「その通りですね、一枚足りません」

続けて僅かに間を置いた女性は優しく尋ねる。

「……こんな時、どうしましょーか？」

四人は一瞬停止すると、ぽけーっと口を開けて考え始め、一人が  
閃いて手を上げる。

「もういちまい持つてくる！」

子供の言葉をゆっくり繰り返して女性が答える。

「足りない分を持つてくる、良い考えです。ですが、今、紙がこの三枚しかないとしたら……どうしますか？」

その質問に子供達は答えに詰まつて静まり、少しして一人が控えめに言つ。

「……ひとりお休みで、三人がかく」

「それで四人は良いですか？」

「お休みの人がかわいそう……」

その丘の近くを四十人が荷物を背負い飛行していた。眼下の様子がふとミヤネの目に入る。

（あ、懐かしい）

心なしか自然に顔が少し綻び、そつと視線を戻した。

そのまま上をすぐに通り過ぎ、向かい風が両サイドの栗色の髪を揺らし飛び続けながら、一瞬緩んだ気持ちが周囲と共に飛ぶ者達を見るとまた緊張していく。

（合格率は毎回異なるけど、この中で受かるのは多くても数人……）

飛び続けること長身の女性試験官の先導に従い見えたのは山々に完全に囲まれた盆地に広がる樹林。

一行は盆地の中心、湖畔傍の草地に降り立つた。

「皆、ここで少し待機しているように」

女性試験官はよく通る声で言つと、現地で待機していた制服姿の四人の元に近づいていった。

三時間に渡る飛行に受験生達の多くは疲れで息を切らし、一旦背中の荷物を下ろして適宜水分補給をするなど休息を取り始める。

ミヤネも水筒の水を口に軽く含み、周囲を軽く見渡す。

（レーゲ樹林、ここが試験場……）

視線を元に戻すとふと、到着直前まで女性試験官のすぐ後ろを飛んでいた二人の横姿が目に留まる。

二人は荷物も降ろさず立つたままで、疲労した様子が見えない。

(あの一人……)

少し驚いて離れた所から見ていると試験官達が受験生達に近づき、女性試験官が口を開く。

「これより、探索士課程後期選抜試験、初回受験Bを始めます。改めて、私が主任試験官のエストです。これから四日、我々五名が受験生諸君の試験を担当します。それでは、受験生は各自試験官へ受験票の提出と引き替えに荷物を受け取つて下さい」

受験生達は流れでそれぞれの試験官の元に集まり出す。試験官に受験票を提出した受験生は腕時計と地図を受け取つて元の場所に戻つて行く。

エストの前に並んだミヤネは両手に受験票を持つて出す。

「ミヤネ・コリントです。よろしくお願ひします」

「こちらこそ宜しく。ではこれを」

「はい」

他の受験生と同じく受験票と引き換えに腕時計と地図を受け取り元の位置に戻つた。

（方角が書かれてない……。それにこのチップは……？）

地図を開いて見たミヤネは試験官の方に顔を上げると、その五人は丁度時計と地図を全員に配り終えて荷物を背負つていた。

エストが一枚の小さな白いチップを掲げて説明をする。

「続いて試験上の課題を説明します。配布した地図上の青ラインで囲まれた領域、つまりこのレーゲ樹林周辺にこのような印の入ったチップがあります。見本は地図にも記載しているので適宜参照して下さい。これらを探して回収し、三日後の午後三時にこの場所に集合して下さい。注意事項は配布した時計を紛失しないようにすること及び地図上の赤ラインより内側で行動するようにすること以外は共通試験要項通りです。それでは、各自行動を開始して下さい」

それだけか、という程簡潔な説明が終わるとほぼ同時に試験官達は飛び上がり、五方向に勢い良く散開していった。

殆どが呆気に取られる中、ミヤネが先程目を留めた一人が最初に

浮き上がり、それぞれ正反対の方角に別れて飛んでいった。

それを見て、疲れてはいても動ける受験生達は遅れを取るま  
いと荷物を背負い、浮き上がって適当な方向へと散っていく。

（私も、行こう）

地図をもう一度じっくり見ていたミヤネも荷物を背負い、ふわり  
と真っ直ぐ上昇する。

近くの木々よりも少し高い位置で止まり周囲を見渡すと、既に小  
さくなつた人影が幾つも見える。どの方向へ行こうかと少し逡巡す  
ると、とりあえずこっちと決めた方向へと移動を開始した。

（検索範囲を端から端までただ飛ぶだけなら全速力で十分強……だ  
けど……）

レーゲ樹林の規模は縦約11km、横約9km。

単純に飛ぶだけならともかく、課題はその広さの樹林の中から親  
指と人指し指の間で軽く摘めるぐらいの小さなチップを探しだすこ  
と。

どれだけの数があるか知られなかつたが、探すためには地道に  
目を凝らして時間を掛けるしか無い。

「ちょっと気が遠くなりそう……」

思わず独り言が口から出ながら適當な樹上で止まると少し旋回し、  
山々に囲まれていても遠くに聳え建つて見える塔が視界に入る。

地図を出しピンと紙を張つて浮かせ、スタート地点の湖を印に  
地図の向きも回転させピタリと固定させる。

（真央柱があつちだから北は、と……）

懐からペンを取り出し、地図にまず方角を書き加えて行き、

「うん」

現在位置も大体の検討をつけて印を入れた。

ペンと地図を一回しまい、垂直に降下するとゆっくり地面を両足  
で踏みしめる。

さつきまで上から俯瞰して眼下に見えていた緑色の海のような風  
景から一転、周囲は鬱蒼と生い茂る木々で薄暗い。

「よし……探そう」  
深呼吸すると自分に言い聞かせるように呟いて、探索を開始した。

「見つからなー……」

木々のざわめきに小さな咳き声が混じって搔き消えた。  
(というかこれ、見つかるのかな……)

焦りと悩みが入り混じり、困った様子で額に左手を当てた。  
午後三時にレーゲ樹林に到着してから早数時間が過ぎていた。  
空が赤く染まつた後、間もなく夜が訪れ星明りのみがほんのりと地上を淡く照らす。

雲一つ無く、木々の隙間からその光が差し込むお陰で最低限の視界は確保できていた。

とはいえ物の識別には、しっかりと光源で照らすことが必要であり、

「持つて来てなかつたら終わつてた……」

棒状の携帯ライトを左手に、屈んだ姿勢で地面を探りながら安堵の声を漏らした。

落ち葉や石を浮かせ、照らして確認しては、と地道な作業。

「見つからなー……」

しかし昼間との作業効率は比べるまでもなく、立ち上がって空を見上げながら呟くのだった。

そこに追い打ちをかけるように、小動物の鳴き声のような音が自分から聞こえる。

「ん。…………はあ。仕方ない」

とりあえず探索は中断し、気分を切り替えようと徐に木々の上へ。  
ざわざわと木々の音が響き、星明りが直に降り注ぐ。

「…………きれい」

夜の樹林上の景色に吸い込まれるような気がして、高地で冷えて澄んだ空気が肺に染みる。

空に浮きながら食べる固形食料の味はお世辞にも良くは無い筈だけれど、不思議と美味しい。

ぼーっと遠くを見ながら食べていると、ふと携帯ライトと思しき光が突然見え、妙な点滅を繰り返しているのが分かった。

「なに……？」

不思議に思い何となく周囲を確認してみると丁度似たような光の明滅が見えた。

少しするとその点滅は消え、最初に見えた方の光が点灯したままでになり、ゆらゆらと左右に揺れ始める。

（……通信？ でも試験官だつたら通信機を持つている筈だし……だとすると受験生同士が？）

そこまで考えて、不意に一人の受験生の姿が脳裏に蘇り、その瞬間、胸にざわつくような感覚が走った。

左右に揺れる光が呼んでいるのは自分では無いと心の底で分かっていた。

それでも自然と身体は動き出し、気がつけば準備を整えて光が揺れる方向に向けて飛んでいた。

しかし、もう少しとこいつ所で目指していた光が唐突に消える。

「あ……」

思わず声が出た。

（私、何やつてるんだろ……）

ミヤネの頭は急速に冷静さを取り戻し胸には虚しさがこみ上げた。戻るにも既にさつきまでいた場所はどこか分からず、戻れない。一方で左右に揺れていた光の幻が目に焼き付いて離れず、

（とりあえず……）

行つてみるだけ行くことにした。

真新しい記憶に残る光の位置を元にもう少し始めた距離を大体の勘で詰め、木々の下に降りて辺りを見回すと離れた所が木の陰でぼ

んやり光っているよう。

「で、探索士課程の試験と考えた時……」

そつと近づくにつれ何やら話し声が聞こえてくる。

（何話してるんだろう……）

耳に注意を傾けると、

「ところで、もし良ければあなたの意見も参考にさせて貰えませんか？」

僅かな間にミヤネの真横に距離を詰めた人物が声を掛けた。

反射的に驚いて振り向いたが声が出ない。

暗がりで目の前的人物の姿も良く見えない。

どう言葉を返していいか分からず固まるが、その人物は背中を向

け、

「僕は戻ります。」<sup>1</sup>自由にどうぞ

そう言つて元の場所に歩いて戻り出した。

「え……」

拍子抜けた声が出て、

（「ご自由について……）

いつの間にか伸ばしていた右手が脱力して降りる。

どうしようか迷い、何となく勢いで一人のいる所へと足を出した。  
(ま……なるようになるかあ)

人間早々思うよつには上手く行かないことはあるようで、意外にうまくいくこともあるというも。

ミヤネが思つた通り、なるようになつていた。

三人は困るよつにして座り、闇に溶け込むような濃い黒髪に深い黒い瞳が寡黙そうな印象を与えるクロアが片手で顎に触れて低め声で言つ。

「チップの搜索は『試験上の課題』と試験官は言い、レーゲ樹林に

あるというチップの総数は不明。人数分あるのか、多くて数人の合格者しか出ないことから単純に数個しかないのか、それとも大量にあり回収した数を競うものなのか……」

うん、と小さく相槌をしてユイスが地図を両手に、そのぱっちりした目で二人を見て言う。

「まだ半日も搜索していながら決め付けるには早いけど、三人ともまだ見つけていないし、大量にある可能性は低いと僕は思う。仮に人数分以上あるとして、でも一人せいぜい例えば一、三個なんて中途半端な数も課題を出すものかと考えると高くは無さそうだね。ただ保険として人数分より少し多いぐらいはあるかもしねない」

「ああ。合格者分のみとしても運要素が強すぎる。試験官が五人いる事も含めると人数分はあると考えるのが現状可能性としては高い」「そうだね」

「ミヤネはどう考える？」

真顔のクロアに質問を振られ、黙つて聞いていたミヤネは名前を呼ばれた事に若干驚きながら、サイドの髪に無意識に触れて冷静に口を開く。

「う、うん……考えてみればそうかもね。人数分ある可能性に賛成。その前提で考えるとチップの搜索には糸口がある、気がする」「それが分かれば、だね。既に得ているはつきりとした情報はこの地図に載っているチップの絵だけで……やっぱりこの小さな穴だろう」

「う」

ユイスは地図を見て言った。

白色の円形のチップの上部には小さな穴が空いている。

地図のチップの絵について同じ事を思っていたミヤネが言う。

「あれ、紐を通すためかもつて木の枝も探したけど見つかってない」「穴が空いていること 자체がフェイクという可能性も捨て切れない……が、手がかりが他に無い以上素直に考えるのが妥当、か」

「そう考えると、地面を闇雲に探すのは余り意味が無いってことになるんだよね。搜索範囲を絞れるから一步進んだ気もするけど」

少し困った表情でユイスが言った。

「ああ……」

今日の搜索でかなりの時間地面を探していたミヤネは頬を引き攣らせ、ユイスが苦笑する。

「僕もさつきまで地面探してたし、あくまで今の仮定で考えた場合の話だよ」

「つ、うん……」

「仮定の上で妥当だとしても、そもそも地面の中、湖の中、小川の中、どこも絶対に無いという保証も無い、どの場所に無いと判断するのは早計だ」

クロアの言葉で三人は沈黙し、クロアとユイスはそれぞれ考えを巡らせ始め、ミヤネはふと我に返る。

（あれ、結構馴染んでるかも……）

話しこみ始める前に遡れば、座っていた一人に暗がりからミヤネはまず姿を見せた。

一人は携帯ライトを片手に無言で顔を上げて視線を移し、ミヤネはその空氣と盗み聞きのよくなごみをしていたことに気まずさを覚え、思わず謝った。

「あ、あのさつきは何といふかごめんなさい……」

「ああ、気にしなくて良いよ。こんばんは、僕はユイス・エサリア。よろしく」

ユイスは特に何の含みもない表情で手をひらひらさせて言つて、

「俺はクロア・クローラ。よろしく頼む」

クロアも気にする様子も無く簡潔に名を述べた。

まさかごく普通に自己紹介するとは考へてなかつたミヤネは固まり、数秒の間をおいてとにかく返答をした。

「私はミヤネ・クリント……です」

すると次に、座つたら？ と勧めるようにユイスが手で示し、それに無言で従つたミヤネは静かに座つた。

「今この探索士課程試験について思つた事を話してた所なんだ。じ

や、わつきの続き」

何となく落ち着いたような所でコイスが切り出し、クロアの話に繋がる。

ライトの光はぼんやりと場を照らし、木々の音が辺りに穏やかに響く。

（向かい合つておいて何も話さないのつて……）

会話は停止したまま、ゆっくり流れる沈黙にミヤネは少し落ち着かない気分になる。

そこへクロアの手が動き、そつと顎から手を離し、

「コイス、ここに生息するモモについて詳しく教えてくれないか?」

「ん。動物についている可能性か、分かつた」

コイスが納得した様子で一度瞬きし説明を始める。

「モモは齧歯目リス科モモ属に分類され、体長は5cm前後、尾まで含めると14から20cmの小動物。飛膜を広げて木から木へ滑空して移動することができる。主に樹洞を巣にし、夜行性。2ha程度の行動範囲を持ち、一生の殆どを樹上で生活、主に木の葉、芽、種子、樹皮などを食べる草食。その餌になる植生を考えるとこのレーベ樹林だと端の山傾斜部に主に生息している傾向が高い。ついでに夜行性だから光に弱く、警戒心は強い」

言つてコイスはわざと携帯ライトを左右に振つて、

「大体こんな所だけど、もし野生のモモにチップが付けられているのだとすればエスト試験官が見せたあの実物の小ささも納得できるね。体色も腹側は白で一致している」

地面に置いた。

「なるほど。説明ありがと」

「うん」

そのやりとりにミヤネは驚きコイスを見る。

（偶然知つてたんじゃない……。もしかして）

コイスはその視線に気づき、ああ、と口を開く。

「じつと見たもの、それと視界に入ったもの、一度で全て記憶する。

そういう体质なんだ

「なんだ」

やつぱり、ミヤネは少し感嘆混じりに言った。

そこでユイスとクロアはほぼ同時に立ち上がり、

「……さて」

「行くか」

置いてあつた荷物に手を掛けた。

「え」

その流れにミヤネもつらるように立ち上がつた。

荷物を背負い、出発できる体勢になつたクロアがミヤネを一度真っ直ぐ見て言つ。

「俺達はチップがモモに付けられないと当たりをつけ生息域に移動して搜索を続けるが、ミヤネはどうする？」

急な問いかけにミヤネは言葉に詰まつた。

（どうする。私は……）

迷つているうちにクロアは地面から足を離し、ユイスも浮き上がり、ミヤネに向かって声を掛ける。

「例えば、僕らと一緒に来るか、そうでないか。それを決めるのは君だ」

そしてみるみるうちに一人は高度を上げて行く。

「……私も一緒に行きます！」

咄嗟に声を発し、荷物を片手で持つて一人の後を追つて飛び上がつた。

何か惹かれるものを感じたからなのか。

夜空の下、三つの人影がレーゲ樹林の端へと移動していく。

先頭にクロアとユイスが並び、ミヤネは一人の後ろについて飛んでいた。

一人についていけば探索士課程選抜試験をクリアできるかもしれない」と感じたからなのか。

正直な所何故一人についていこうと思つたのか、ミヤネはわからなかつた。

レムリア真国外には、果てしない海が広がり、果てなき空が広がる。

「そこに何があるのか」

人は国の穏やかな日常の外にあるであらう「未知」に興味を、希望を、憧れを、探求心を抱く。

全ての国民は国外へ出るかどうか、選択の自由を持つ。

但し、国を出る選択をする場合、再び国に絶対帰還してはならないという条件が課され、事実上の真国からの永久国外追放処置を受容しなければならない。

それが真国における決まり。

そして、ただ一つ、国と國の外との間を行き来する事を許される職業を探索士と呼ぶ。

人口約120万のレムリア真国の労働人口の約1%を占める彼らは「未知」を求めて飛空艇に乗り、空と海を超えて真國の外へ飛び出して行く。

ミヤネも國の外を、果てしない海の向こうを、果てなき空の向こうを、自身の目で見たいと願う一人だった。

探索士には、数多くの分野について学び、専門課程の進学試験を突破し、専門課程を修了してようやくなることができる。

15歳のミヤネ達はまさにその進学試験の最中だった。  
(この一人も私と同じ……探索士になりたいんだ……)

考えごとをしていると盆地を囲む山の傾斜部の中腹に差し掛かり、前を飛ぶ二人が速度を落とし、それ合わせて停止した。

クロアが上着のポケットから太めの赤色の紐を取り出して言つ。

「この辺りで良いか」

「そうだね」

頷くユイスとほぼ同時にクロアが紐の端を真下の木に垂らす。

重力に従つて木の上部に端が到達するとそのまま指向性を持つて枝葉に巻きつき始める。

紐を持つていた方の手も離されると巻きついた紐の先端と流れるように結び目ができあがつた。

上から俯瞰すると田印として木の上部にまつまつと赤色の紐が見える。

ユイスが星明りで時計を見ながら言つ。

「んー。とりあえず0時までモモ探し、とはいえ他の動物もいれば念のために調べつつ、またここに集合しよう」

「分かった」

「ミヤネも良い?」

「あ、うん」

一瞬詰まつて答えると、

「それじゃ

ユイスは軽く、

「0時に

クロアは簡潔に言つて一人は木々の下に携帯ライトを灯さず降下して行つた。

(探すのは分かつてたけど……。0時までついて……)

ミヤネは一人が迅速に行動に移つたのに驚く。

0時までおよそ四時間。

現実問題として夜暗い中、常時光源を使用してはモモを探しは渉らず、探さなければ始まらない。

(ううん、まだ日はあると言つても、時間は限られてる。良く見えないからなんて、諦めてられない)

そして二人の後に続き木々の下に垂直に降り、

(それに、モモにチップが付けられているのはあくまで可能性のレ

ベル)

捜索を開始した。

樹上で生活するモモを探すべく木の枝が良く茂る高さに満空し、視覚のみに頼らず耳にも集中を向けて木々の間を進む。  
(他の動物にだつて付けられている可能性もあるし、そうでもないかもしれない)

そこへ離れた所から、

(物音!)

耳にしてぶつからないよう急にだ。

(テン……?)

しかし、目にぼんやり入つたのは四足歩行動物と思しき影。  
(でも、それならそれで!)

神経を研ぎ澄ませ、目を一瞬大きく見開く。  
地を走つていたテンは急に宙に浮き上がり、身体の自由を奪われる。

そのままテンを手元まで近づけて、

(無い……か)

その黄色い毛皮の身体を回転させて確認した。

「驚かせてごめん」

小声で言い、ゆっくりテンを地面に降ろして解放した。

(たかが一匹目、次)

再び周囲の探索を始める。

単純に計算して40枚分のチップが40匹の動物に取り付けられている、ないしは植物など制限された範囲内にあるとしたら、一枚当たり約2.5km四方であり、木の本数に換算すれば100万単位で存在する。

ただでさえ目の効かない暗い中では、不意に気が遠くなりかけるとしても不思議ではない。

「はつ、はつ」

木の幹に背負つた荷物ごと背中を預け息切れを起こす。

一時間、一時間と探索を続けたが長時間に渡り力を使用し続ける

のはこの日は、ほぼ限界に達していた。

（〇時までもまだ時間が……）

時計を見ていると疲れから眠気が襲い始め、ゆっくりと瞼を閉じた。

（少しだけ……）

朦朧とした意識の中、話し声が聞こえてくる。

「夜が明けたら周囲一帯見てくるよ」

「分かった。こっちは測量を済ませて探索をする。後は

台詞を引き継ぐよ」コイスが言つ。

「臨機応変について事で」

それに無言で頷いてクロアは立ち上がり、コイスが右手を振る。

「それじゃ頼むよ。荷物は任せて」

「ああ」

クロアは小さめの鞄を抱いで垂直に飛び上がって行つた。

「……さてと」

それを見送ったコイスは手早く荷物に手を掛け、寝支度を始める。ハンモックを取り出すと携帯ライトと共に浮かせる。

「ん……」

そこでミヤネの瞼が反応する。

特に気にせずコイスは手際よく紐の両端を一本の枝に結びつけて設置し終えた。

「……あれ、私寝て……？」

「そうだね。寝ていたよ」

「うわ！」

平然と声を掛けられてミヤネは驚いて完全に意識を取り戻した。

「えつ、あつ、ここは？」

コイスはまた荷物に手をかけて囁つた。

「集合場所。0時近くなつてここに戻つてくる途中クロアが偶然君の寝ている所に通りかかつてここまで運んできたんだ。そのまま放つて置くのもどうかつてね」

「……そ……そ」

「そうです。あ、荷物はすぐそこね」

携帯ライトを宙に浮かせて明りにしたまま、ユイスは水筒を右手に、左手でミヤネの荷物を示した。

「あ、うん」

ミヤネは生返事をして、ユイスは水筒の水を口に含み濯ぎ始めた。話しかけようにも掛け辛くなつてしまい、ミヤネはどうしたものかと、とりあえず荷物に手を掛けた。

が、特に何を出すというのでもなく少し困った。

ユイスはミヤネに背を向けて跳ねないよう地面寸前で一瞬浮かせて吐き出すと、振り向いて思い出したように口を開く。

「と、寝る前に報告をしておくと、モモは合計六十二匹見つけたけど外れで、他

「そんなんに！？」

驚いてミヤネは声を上げた。

「うん？ クロアと僕合わせてね」

「ふ、二人合わせてかあ……。ん。それでも私六匹だけ……」

「他の動物は？」

続け様な質問に、答えにくそうに答える。

「テンとかの動物を十ちょっと……チップは見つからなかつた」

「そつか。僕らもモモに他の動物も探したけど見つからなかつた。いずれにせよ、見つけるまで探せば良い」

言いながら、ユイスは水筒をしまった。

恐る恐る尋ねる。

「あの、私のこと、怒らないの……？」

「ん、と田を瞬かせてユイスがミヤネを見る。

「怒らないよ。クロアも怒らない。例えば、君が疲れて寝ていた、

とかそういうことはね

気にしていたことをバッサリ言われて少し面食らった。

「う……ならどうして……？」

コイスは地面に腰を下ろし、上方に浮かせていた携帯ライトをスーツと地面近くに下ろし、

「どうしてか。うん、そう聞かれると……何て答えたらいいかな？」  
あらうことか聞き返した。

「いいかな？ って私が聞いてるんだけビー！」

思わず語氣を強めて突っ込んだ。

「あ、今の間違えた。もう一回」

しまった、といつ表情をして勝手に言つたが、ミヤネには訳が分からぬ。

「は？」

間を置いてコイスがもう一度、今度は顎に手を当てる、

「……どうしてか。うん、そう聞かれると……何て答えたらいかな……」

考えこむ様子で言つた。

ミヤネはどう反応したら良いか困り、黙つた。  
するとコイスは真顔になり、

「と、こいつだったよ」

「めんね、とでもいいたげに顎を下げて言つた。

「う、うん……」

とりあえずミヤネは頷いたが、

「ん。えつと……で？ どうして？」

よくよく考えて聞き直した。

真顔のままコイスは答える。

「怒りたくないから。怒らないのか？ と聞かれても、僕は怒りたくない。ただまあ、君が激怒して欲しい！ と心の底から願つてゐるならまた別かもしれないけど。納得した？」

「……うん

ミヤネは妙な腑に落ちなさを感じながら頷いた。

（そこまで思つて無いし、そう言わると……）

何かこれ以上聞く気も起きなかつた。

「それじゃ、僕は夜明けに備えて寝るけど、その前に他に聞きたいことある?」

「えつ、その、クロアは?」

コイスは指を上に向け、

「クロアなら上。用があるならどうぞ。流石に辛いから、じゃ、お先にお休みなさい」

言いながらハンモックにぴったり収まり、携帯ライトを消し、一枚掛けて横になつた。

「……お休みなさい」

さながら出発を見送るよつてミヤネは呟いた。

（変わつてゐる……）

ピタリと動かなくなつたのを見て、そう思つた。

次にどうしようかと思い、何となく上に行くことにした。

木の上に登るとそこにはクロアと携帯ライト、ペン、地図に小型測量器が幾つか浮き、黙々と作業している姿があつた。

そつと横から声を掛ける。

「あの、運んでもらつたみたいで、『めんなさい』

クロアはミヤネを一瞥してゆっくり口を開く。

「……俺は運ぶと決めて、運んだ。気にしなくて良い」

その言い回しには言葉に困つた。

続けてクロアが言つ。

「それより、疲れているならまだ寝ていた方が良い」

「う、うん」

クロアはまたすぐに作業に戻りつつ、不意に尋ねる。

「ミヤネは明日、いや、今日ははどうする?」

「それは……寝てた私が言つても微妙だけど、できれば一緒に探索を……」

尻すぼみなはつきりしない答えに、クロアがはつきり言つ。

「なら今日もよろしく頼む。今日は夜が明けて、ユイスが記憶して記録するポイントを探すことになる」

「良いの？ つていうか、どういうこと？」

クロアが淡々と説明し始める。

「ユイスは視界に入ったものは全て覚えられるが、それに速度は関係無く、意識しているかどうかも関係無い。ただ、視界に捉えたものを一つ一つ確認するのには相応の時間を必要とする。まずユイスが一定範囲を飛んでモモを始めとする動物が巣にしていそうな樹洞などを視界に入れ、紙に樹洞などのあるポイントを確認しながら書きこんで貰う。後はそれをミヤネと俺で総当たりで田中探す。今のところそういう予定をしているが、良いか？」

予想していなかつた話に少し戸惑いながらも頷いて答える。

「い、良いよ。分かつた」

「ああ。頼む。……あとさつきの良いのかという質問だが、改めて言えば答えは良い、だ」

完全に流れたと思っていた質問に答えられてミヤネは少し恥ずかしくなつた。

「ん。その……ありがとう。えと、私そろそろ寝るから」

「お休みなさい」

「お、お休みなさい」

同じ挨拶を返すと、ミヤネはゆっくり下に降りて行く。

地面に着地すると、荷物に手を掛け、

（聞きたいことはもつと色々あるけど……）

水筒の水で口を濯ぎながら、何だかもやもやした気分がした。（あれ、そもそも何で聞きたいことがあるんだろ）

そう思つて水を吐き出し、

（……なんか気になるから、なのかなあ……）

一人ハンモックで既に眠りに落ちている人の姿を見上げながら思つた。

ミヤネにとつて二人との会話は何だか慣れず、だからこそ少し興味が湧いてくるのだった。

身支度を整え、ハンモックも取り付けて寝る準備を終え、ふとコイスのハンモックと上を順に見上げる。

（……まあ、まず無さそつだし……そもそも私無いし……）

胸に手を当て、ため息をつくと携帯ライトを消して眠りについた。夜空の下、木々の上で黙々と作業するクロアは下から漏れていた光が消えたのに気が付き、地図に走らせていたペンを止めた。

そして、またすぐに手を動かし始める。

夜の樹林の上、木々の音に混じって忙しくペンは地図の上を走り、しばらくしてピタリと止まった。

周囲に神経を尖らせ、素早く鞄に物をしまって身につける。次の瞬間、単身やや右斜め前方へと勢い良く飛ぶ。

何かを追うように進路を右側の山頂の方に急速に曲げ、木々の上を弧を描き走るように移動する。

しかしすぐに急停止した。

「これは……余計な行動だつた

そう呟いて、クロアは木々の下に姿を消した。

「んん……」

身体を動かし、開く。

既に夜が明け、辺りは明るくなっていた。

「朝つ！」

勢い良く上体を起こして腕時計を確認する。

時刻は7時少し過ぎを示していた。

「し、7時か……」

長く寝すぎていた訳ではないと思うと少し安堵し、浮き上がつてハンモックを離れと寝る前にあつたコイスのハンモックが無い。

「いない？」

見渡すと、赤い紐のついた木の根元に荷物が置かれ、その近くに座り何かを書いているコイスを見つけた。

声を掛けるよりも先にコイスが顔を上げる。

「います。お早いります」

「お、おはよ。……何してるので？」

手を動かしながらコイスが言つ。

「地図に動物の巣になる樹洞やらがあるポイントを書き込んでる所。クロアが君に話した通りだよ」

そう言われて今日の予定の話を思い出した。

(そうだった)

コイスが側に置いてある別の紙を持って言つ。

「準備ができたら言つてよ。できるのあるから」

「うん、分かった。クロアは？」

「探しに出てるよ」

え、と意外に思いながら声を上げる。

「じゃあ、私が一番最後……っていうかクロアは寝たの？」

「寝たよ。そこは流石にね」

コイスは少し苦笑した。

「そつか……すぐ、準備するね」

何時間寝てたのか、とか聞きたい事はあつたがそれはやめて身支度を整えることを優先した。

朝食に固形食料を取り、コイスに声を掛けると、

「それじゃ三枚、これをよろしく」

浮かせて差し出された三枚の白い紙にはそれぞれ方角、ランダムな点やちょっとした走り書きが幾つも書かれていた。

「えつと……」

「ああ、見方はこっちを読んで貰えれば良いよ。多分実際にやった方が早いから」

更にもう一枚出された紙には説明が書かれていた。

「その一枚目の紙の赤い点はこの木で、他の色のついた四隅のポイントに当たる木には既にそれに対応した紐をつけてあるから見れば分かると思う。大きい荷物は置いておいて良いよ、見とくから」

「分かった」

言つて、スッと真剣な表情になると地面から足を離して浮き上がる。

説明の書かれた紙を読みながら赤い紐のついた木の上に出た。遠くを見渡すと暖色系の色が一定距離を開けて見え、それらは木の上部に取り付けられた紐。

（二二）と二つの木に囲まれた区画）

地図の点の一つをまず見て、樹林を見て、

（多分あの辺り）

検討をつけた場所に向かつて飛んだ。

下に降りてその辺りの木の幹を確認していく。

（んつと……あつた）

木の幹に樹洞があるのが目に入った。

近づいて樹洞に携帯ライトを翳して、内部を確認しようとするが、

余り上手く見えない。

（見えない……でも、いる）

生き物がいるのを察知し、目が一瞬だけ見開くと、樹洞の中から寝ていたモモを浮いて引っ張り出した。

光に驚いて身動きも取れないモモはピタッと身体を丸くして固まつていた。

小さな体の大きなその目とミヤヤネは目が合つ。

「やつぱりかわいい……」

思わず言葉が漏れ、表情も崩れた。

何か欲しい！ とか思いながらも、確認すればチップを付けられてはいない。

「ごめんね」

言つて樹洞の中にモモを戻すとまた垂直に飛び上がる。

(次は……)

そして、紙を頼りにモモを始めとする生物の巣になりそうなポイントを順に回って行つた。

一方、座つて書き続けるユイスの元にはクロアが戻つてきていた。上から降りてくるのに気がついてユイスが声を掛けた。

「おかえり」

「ただいま。チップが見つかった」

平然とクロアが言つて、懐からチップを出して見せた。ユイスは少し驚く程度の反応をする。

「おー、どう見ても本物だね」

「実際モモに付けられていた。巣を探している以上余り関係は無いが」

「まあ、妥当性を考えてつて所で何はともあれ運良く当たりだつたと。この分だと既に他の受験生も偶然見つけててもおかしくはないね」

「そうだらうな。これを。ユイスが持つているか、ミヤネに渡すか、好きにしてくれ」

クロアからユイスはチップを受け取つた。

「言つと思つたよ。じゃ、ミヤネに渡す方向でいくから」

するとクロアは無言で頷き、ユイスから新しい紙を受け取るとまた飛び上がつていった。

それを見送つて、チップを懐にしまつとポツリと呟き、

「『試験上の課題』要するに必須条件じやないんだらううナビね」

紙にまた書き込みを始めた。

その後しばらくして今度は三枚分の紙を確認し終えたミヤネが戻つてくる。

両サイドの髪がふわりと揺れて、着地した。

表情には少し影が見えた。

「おかえりなさい」

「えっと、ただいま。チップは見つからなかつた……」

「分かつた。じゃこれ、君に渡しておくよ」

コイスは懐からチップを取り出して見せた。

ミヤネは信じがたい物を見た様子で驚く。

「え？ ええ！？ 見つかったの！？」

淡々とコイスが言つ。

「クロアが見つけた。まあ、試験官があるつていうんだからそれ自体が大嘘でもない限りは、絶対に見つからぬこともないだろうし、例えば期限ギリギリの切羽詰まつた時にしか見つからないつてものでもないでしょ」

言われてみればその通りだと思いながら言葉に少し詰まる。

「そ、それはそうだけど。で、でも何で私に……？」

「その方が良いからね」

コイスはさつぱりとした表情で言つた。

「何で、良いの？」

「説明が聞きたい？」

ミヤネは困惑して答える。

「理由も聞かずに受け取れないし……」

「僕らがやる気を維持できるから。それが理由」

「やる気を維持、できる？」

「チップを探し続けるやる気をね」

「……私がチップを持つてるとやる気が維持できるの？」

「何故、思いながら尋ねた。」

「そう。ただ、一枚目のチップだからっていつのもあるナビ。今度はどうして？ かな」

更に質問されることを見越したコイスに、微妙に頷く。

「う……うん」

すると、コイスはゆっくり立ち上がりミヤネに向いて口を開く。

「分かつた。……正直に言つと、試験で合格を競う受験生同士として僕らはミヤネ・「リンク」、君を完全には信頼していない」

「な

唐突に言わされて絶句するが、コイスは気にせず続ける。

「そして僕らは同時にこう推測している。『君も僕らを完全には信頼していないだろ』とね。そしてそれは妥当なことだと考えている」

ミヤネは黙つたまま、更にコイスは右の手にチップ乗せて見せて続ける。

「そう考えて、まず一枚目のチップが見つかったのが今の状態だ。一枚見つかったということは当然後一枚必要。でも、期限までに後一枚も見つかるかどうかは分からぬ。不確定な未来の状況下、中々一枚目が見つからず期限が近づいたらきっと焦るだろうね。『大変大変、見つからない！一枚しか無いのにどうしよう！』って。そうするとどうなるか。ここではまず君の行動を、しかもできるだけ悪いパターンで予測してみるんだ。仮に僕が持っていたとして、例えば君が僕から力ずくで奪おうとする、だとか、あるいは寝ている時にこつそり取つて、そして僕らの前から姿を消すかもしれない」

「そんな事は」

コイスが片手で制する。

「あくまで、仮定と想像の話だよ。そして次は僕らの行動を、やっぱりできるだけ悪いパターンを想像してみるんだ。僕がこうして紙に座標を書くのと、探すのとを分担して、つまり協力してチップを見つけたとはい、実際に見つけたのはクロアだ。ミヤネが見つけた訳ではない。そうすると、悪い考えをする僕らは少なくとも君にチップを譲ろうとは思わないだろ」

それが当然か、と思いざこちなく頷く。

「う……ん……」

するとさつきよりもコイスの声が軽くなる。

「『四人全員色鉛筆は持っている。けど、紙は三枚しかない』こんな時どうしましょうか？ という聖の質問に君はどう答えた？ こきなり尋ねられて、思い出しながら答える。

「え？ つと……四人で紙一枚ずつと一緒に使つて三枚の絵を書くつて答えたかな」

ユイスは驚いたような、嬉しそうな表情をする。

「へえ。僕は三枚の紙を更に四つにして一人三枚ずつに分けるつて答えた」

「頭良いね」

「それはどうも。因みにクロアの答えはまた違う」

「何て？」

ミヤネは首を傾げた。

「クロアは聖にこう言つたんだそうだ。『俺は書かなくとも大丈夫だから三人が書けば良い』つて

「へえー、優しいんだね」

クロアに話しくさを感じていたミヤネは意外そうに眉を上げた。『うん。一つ突つ込むと、でも大丈夫つて何がどう大丈夫なのつて感じでしょ？』

「そうだね。絵が嫌いなの？」

「クロアの場合好き嫌いの問題じゃなくて、とにかく幸せの沸点が凄く低いんだ」

ユイスが苦笑した。

「幸せの……沸点？」

何それ、と尋ねると、ユイスは少し考えて尋ねる。

「例えば、昼ごはん何食べる？ と誰かに聞かれた時君はどう答える？」

「食べたいものを言つ、かな……？」

「そうそつ、大体そういう答えが出る。けどクロアの最初に出る答えは『俺は昼食を食べなくても大丈夫』だ。理由は『昼食を食べなくても死ぬ訳ではないから』。それを冗談じゃなくて真顔で言つ。何かにつけて死ぬかどうかが判断基準つてこと。それでいて、自分を甘やかす方には働かない。それが幸せの沸点が低いって意味。控えめに見ても、少し変わつてるでしょ？」

聞いてくるうちに微妙な表情をして突っ込む。

「少し、どこかじやないような……」

「今の一いつの例を考え直してみると、三枚の紙にじつにのクロアの答えは、人に譲る優しさがある、と思えるけど、昼食の話になると優しさの問題とは本質的に違うと分かる」

ミヤネは怪訝そうに首を傾げる。

「うん……でも、優しいのには変わらない気がするけど?」「うん、とユイスが頷く。

「そういうことだね。少なくとも僕はクロアは優しい人間だと思っている。ここで話を戻そつ。……悪い考えをする僕らは少なくとも君にチップを譲ろうとは思わないだろう。けど、そもそも僕らはそういう行動はしたくないし、したくないからそのための行動をする。それが君にチップを渡すということ。チップを渡せば姿を消すかもしれない君に渡してしまえば、僕らは心置きなく何かしら起きそうな未来を気にしなくて済む。君にチップを渡したからには、まだチップは一枚も見つかっていないという前提で、一枚ならチップがあるんだという妙な気の緩みも抱かず、全力でチップ探しをし続けることができるし、探さざるを得ない。そういうわけで、やる気が維持できる。これがある意味君を考慮しない条件での僕らの勝手な考えだ」

「……うん、何か納得はできたけど……」

心の中で考えながら、ミヤネはまだ悲しい気分になり、少し目が潤む。

「でも……それって私は要らないってこと……? やっぱり、じゃあ……?」

そこへ一度クロアが戻ってきて、尋ねる。

「ミヤネ・「リントはどうしたいんだ?」

コイスはそれにほつと肩の力を抜き、ミヤネは気まずやうな声を上げる。

「あつ……」

質問の答え待ちの体勢に入つて無言の一人に、一度息を吐く。

「……私、二人に迷惑を掛けてるし、一人で探した方が良いかな、つて……『めんなさい』

うーん、とユイスは頭を左手で触れる。

「あー、さつき言つたのは、もう一度いうけど君を考慮しない条件での僕らの勝手な考えであつて、クロアが聞いてるのはそういう事関係なしに純粹に君はどうしたいのか？ つてことだよ」

その言葉にミヤネは沈黙を貫き、伏目がちに田元を手で拭つた。気まずそうにユイスが頭を搔きながら続ける。

「……また誘導するみたいになるから正直好きじゃないんだけど、例えば、僕らがどう思つてるか関係なく君は僕らと一緒に行動したいのかい？」

「……私は……できれば、一緒に探させて貰えるなら、探したい」ミヤネの声は僅かに震えていた。

「なら、一緒に探そう」

クロアの提案にミヤネは語氣を強める。

「でもっ！ そのチップが後一枚見つからなかつたら…」

「三人のうち一人は、課題をクリアできない。そうなるね」

途中でユイスが台詞を重ねて言い、ミヤネは間の抜けた顔をする。

「は？」

「俺達は課題をクリアできなくても問題ない。だが、だからといって課題に手を抜く気もない」

クロアは真顔で言い切つた。

「何……？」

ユイスが両手を開げて困った様子になる。

「つまりさ、自分で言つのも何だけど、結果として僕らはお人好しなんだよ」

「そもそも期限までに後一枚探せば良いだけだ。それでチップが後一枚見つからなかつた場合はミヤネがそのチップを受け取れば良い」

二人に言われて、ミヤネは手を強く握りしめて首を振る。

「何か、そんなの、全然納得いかないよ」

コイスが片手でミヤネを示す。

「だったら納得行く方法を考えれば良い。君はその方法を知ってる

よ

「え……？」

「三枚の紙の話、君は何て答えた？」

ミヤネはさつき言ったことをもう一度小さめの声で言つ。

「四人で紙一枚ずつを一緒に使って三枚の絵を書く……」

「それだよ」

「けど紙と違つてチップは一緒に」

コイスの肯定にミヤネは反論しようとしたが、

「使えば良いんだ」

クロアがそう言つてミヤネは黙つた。

クロアが続ける。

「試験官に三人で協力して探した結果見つけられたチップは一枚だ

つたと事実をそのまま伝えれば良い」

「それでどうなるかは試験官次第だけってね。……どうかな？」

ミヤネは一瞬停止して、

「はあ……君達、優しいようで冷たかったり、冷たいようで優しい

ような……何か腹立つ」

ため息をついて、手を握りしめた。

「良く似たような事を言われる」

「何度もかの経験の僕らだけど、正直、直す気は今のところ無くて

ね。悪いけど、満足するまで腹を立てると良いよ」

ドンと来い、とコイスは身構えた。

「しないよ！」

思わず突つ込んだ。

「ここも外れ……」

ミヤネは木の根元の洞を覗き込んで呟いた。

話し合った所、三人でとにかくチップを受けられているモモを探そうという意見に結局落ち着いた。

しかし何だかんだでチップを受け取られたミヤネは本来喜ぶべき所のようで、クロアとコイスとの関係上、全然喜べなかつた。やや吹っ切れて、こうなつたら、と絶対チップを見つける！ と意気込み、そう宣言も一人にして再び探し始めた。

が……しかし、クロアとコイスは中々疲れた様子を見せない上に、特にクロアはミヤネの倍を超す速度でコイスの座標を書いた紙を消化していくため、ミヤネは自分なりには頑張っているつもりだつたが悔しさを感じずにはいられなかつた。

しかも、その二人はもしチップが見つからなかつた場合、一緒に協力して探したと試験官に伝えてもそれが認められなかつた後は、ミヤネの課題合格を優先するような気がして、というか絶対そうしそうで、尚更だつた。

ふざけているのか、といえば一人の探索に取り組む姿勢は信じられないぐらいストイックで真剣そのもの。

そもそもユイスが書く紙の四隅のポイントになつてゐる紐は全てクロアがこの日の未明に取り付けたもので、完全に探索環境を用意されている形の上で、ミヤネは探していた。

（何かやつぱり腹立つ！）

無性に腹が立つて仕方ない。

自分の探す量がクロアに比べて明らかに少ないことに文句の一つも一人は言わないのと、また怒らないのか、というような質問をすれば、また、

「そんなに怒つて欲しいなら……怒ろうか……？」

と微妙に心配するような様子で言うものだから、そういうやり取りも含めて、自分が凄く幼いような気がして、だけど一人は同じ年で、とにかく余計に腹が立つて仕方なかつた。

最初に拠点にしていたポイントは午後、夜になるのに備え、一度別の場所に移動を済ませた。

コイスが相変わらず紙に書き込みを続ける一方、一番最初に疲れを見せたミヤネは近くの木にもたれかかって休んでいた。

声を掛ける事 자체が作業妨害になるような気がしてならず、とても話しかけにくかったが、話しかけないのも居心地が悪く、

「もし今日一枚もチップが見つからなかつたらどうするつもりだつた？」

と尋ねた。

手を動かしながらコイスが答える。

「んー、どうするも、探すのを続けたと愚つよ。考えると色々あるけど、やっぱり木の枝みたいな簡単に見えるような所にはないだろうから、樹洞とか動物、でなければ地面に埋めてるか、湖の中とかが確率が高いと考えざるをえないし、見つからないと焦つても探す方針は大して変わらないだろ?」

「……そっか」

相槌を打つた。

（今日午前中に見つからなくて、午後も見つからなかつたら私はどうだつたかな……）

実物を見せられて、持たされて、話し合つたからこそそれなりに落ち着いているが、もし見つからないまま三日目を迎えたらい、と思うと複雑だった。

コイスが不意に話し始める。

「それにチップ探しが試験上の課題ということを考えると、チップが見つかる、見つかった、といつその事実はその過程ほどには重要じゃないと思うよ」

「どういひこと?」

コイスは説明を続ける。

「『試験上の課題』といつ表現がチップを見つけるのは課題であつ

て、試験の評価は課題を含みはするけど、また別だと考えられると、そういうこと

「そつか、そういうことね」

「極端な話例えれば、試験期間中に一生懸命探し続けてようやくチップを見つけたA受験生がいて、大して探しもせず、探す気もなかつたB受験生がA受験のチップを奪い取つたとして、そのことを試験官が知つてたら……。B受験生は、確かに課題はクリアしてもまづ確実に不合格になりそうでしょ。他人の物を取つて物事を済ませる人は明らかに数人で協力して行動する探索士に不適格だ」

その仮定の話が、さつき聞いた悪い想像のケースと似ていて、若干微妙な顔をする。

「ろ、露骨ね……。でも、試験官の姿全然見ないし、本当に見てるのかな？」

「試験が終わつたら試験官に確認してみれば分かるんじゃないかな」「それは……そうだけど」

コイスは飄々と纏めに入る。

「チップを見つけるのは大事、それに取り組む姿勢も大事、そして何よりきちんと探さなければまず見つからない」

「……そうだね。そもそも、また探しに行くよ」

ミヤネが立ち上がると、コイスが紙を浮かして渡す。

「じゃあ、これ。いつてらっしゃい」

「行つてきます」

そう言つて受け取つたミヤネは飛び上がつた。

その後、程なくして夜になり、そしてまた夜が明け、三日目の午後。

変わらずモモ探しを続けていたミヤネは、思わず声を上げた。

「あつたあつ！」

樹洞から引っ張り出したモモの首に確かに紐を通されたチップが付けられていた。

見つけられた喜びに胸が熱くなる。

「ありがとう、ありがとう！ 寝てていいよ！」

チップを取り外して、思わずモモにそう話しかけて巣に戻した。そのまま急いで荷物を置いてある拠点に戻るとそこにはクロアとユイスの他に一人の受験生がいた。

そつと降りていくと、

「分かった。教えてくれてありがとう。頑張って探してみるよ」

「ああ。健闘を祈る」

「頑張れー」

丁度その受験生は去っていった。

「ただいま。……今のは？」

戻ってきたミヤネに一人が振り向いて返事をする。

「おかえりなさい」

「おかえりなさい。今のは俺が探している途中会つた受験生だ。情報教えて、ユイスに渡していた実物も見せていた所だつた」

クロアは極普通にそう説明し、ミヤネはそつか、と思いながらポケットに手を入れる。

「そなんだ。えつと、私三つ目のチップ見つけたから。これ渡すね」

少し気恥ずかしさを感じながら手に取つて渡すと、迷いなくクロアはそれを手に取る。

「ああ。確かに受け取つた。ありがとう。これで三人分揃つたな」

「そうだね」

ユイスはあつさり言い、

「うん。えつと……」

ミヤネは正直物足りない気分だった。

(それだけ……？)

するとユイスは荷物を整理し始め、クロアは元から整つていた荷物を背負つて飛び上がつて行った。

ミヤネは我に返ると、ユイスの後ろから声を掛ける。

「……片付けて、どうするの？」

「先に行つたクロアの紐の回収を手伝つて、集合場所の湖に移動、かな」

言いながらもう荷物の準備が整つ。

「わ、分かつた。じゃあ私も」

どこか所在無さげにミヤネもとりあえず整つていた荷物を背負つと、コイスも荷物を背負つて、ほぼ同時に木々の上に出た。

「じゃ、あつちの方の紐片付けに行くから」

「なら私はあつちを」

そして、二人はそれぞれの方向に飛んで目印として木に取り付けた紐の片付けに行く。

一つ一つ回り紐を回収し終えるとミヤネは辺り見渡す。

すると湖の方向へと飛んで行く二つの姿が見え、同じ方向に向かつた。

途中で飛びながらクロアとコイスに合流し、

「これ」

「ああ。ありがとう」

紐をクロアに渡した。

そのまま湖に到着し、ゆっくり湖畔に降り立つた。

湖の周囲には他に人はいなかつた。着いて早々コイスとクロアは荷物を下ろし、水筒の水を口に含んで口を濯ぎ始める。

（え、もしかして……）

二人のその行動にミヤネは次の動きが何となく予想できた。二人は吐き出して水筒を片付け、

「寝よう。お休みなさい」

コイスはそう独り言のように言つて、草の上に横になつて速攻目を閉じて動かなくなつた。

（早つ！）

唚然とすると、クロアは急速に壯絶に眠そつたになりながらミ

ヤネを向いて言つ。

「俺も寝る。お休みなさい」

「お、お休みなさい」

慌てて返事をするとクロアは荷物の近くに横になり、やはり動かなくなつた。

「そつか、疲れてるんだよね……」

少し心に引っかかる感覚がしていたミヤネは、ほつとして呟いた。  
(当たり前か……。そういえば、私も……)

どつと疲れを感じ、口を濯いでからその場に横になつた。チップを見つけ出した三人はそのことを喜ぶというより、ようやく安心して寝れるとでも言つ風で、夜になる少し前にあつと/or間に眠りに落ちた。

レーベ樹林の上には雲が覆い、星明りも届かず暗くなつた中、クロアは突如として目を開けた。

ゆつくり上体を起こし、音を立てずに荷物の側面から携帯ライトを取り出して迷わず点灯する。

ぼんやりとした明りが近くを照らし、じつとしたまま身体は動かさない。

数秒経つと、林の方に明りが灯り、それが近づいてくる。

携帯ライトを持つて歩いて間近にやつてきたのは長身の人物。

「やれやれ、それで寝れでいるのですか?」

クロアは立ち上がる。

「先程までは寝ていました」

「つまり私が近づいたから起きたと」

「はい。エスト試験官、試験中に受験生と話してもよろしこのですか?」

尋ねられて、エストが答える。

「話してはならないといつ規定はありませんので問題ありません」

「そうですか。何か用でしようか？」

エストは目を細める。

「あなたが起きた時点で特に用はありませんが……。強いて尋ねるなら、他の受験生が近づいてきたらあなたはどうするつもりですか」「同じ課題に取り組む受験生として話をするつもりです。話しへ次第では、この試験ですから、チップ探しに協力します。話にならない場合は少し困りますが」

その答えに納得し、

「なるほど。……では仮に私がその話にならない受験生で、実力行使に動く場合はどうしますか」

エストはサッと構えを取つた。

クロアは直立したまま言う。

「一人であれば単独で移動します。しかし二人がいるのです二人を起こします。しかし、一人が何故か起きない場合は、こうです」そして最後に構えを取つた。

すると今度は、エストは構えを解いた。

「良く分かりました。結構です。寝ている女性に、こうのもどりやらあなた……あなた達には無用の話のようですね。では、お休みなさい」

「お休みなさい」

クロアが挨拶を返すとエストは携帯ライトを消して空に飛び上がり去つて行つた。

「担当があるとしたら、主任試験官だったのかな」「隣からの小さな声に、クロアが答える。

「そうかもしけれない」

「ところで、凄い眠かったからすぐ寝たけど、何か気の利いた言葉でも言つたらどう? いつも不干涉とはいえさ。一緒に探す目標は達成した! とか言つたら多分内心涙目になるよ」

「少なくともそれは言わないでおこう」

「ははっ。じゃ、悪いけどお休み」

「ユイスは空笑いして、寝た。

「ああ。お休みなさい」

言つて、ユイスはライトの明りを消して、荷物を背もたれに浅い眠りについた。

刻々と時間が過ぎて深夜を回つた頃、ミヤネの側からクロアとユイスの姿は荷物を残して消えていた。

湖畔付近の林の木の枝の上に乗り、息を潜める人物に突然声が掛かる。

「どうも、こんばんは」

よつと、と横からユイスが現れると、

「なつ」

その少年は声の方に驚いて振り向き、

「こんばんは」

スッとその反対側から現れたクロアが声を掛けた。

少年は反射的に枝から交代するように宙に滞空した。

真つ暗で目が殆ど効かない中、クロアとユイスは迷わずライトを点け、その場を明るくする。

少年は動搖する。

「い、一体何だ」

「一体何だ、その問い合わせはね」

そう言つてユイスは飄々と早口に語り始める。

「例えば、チップを見付け出した受験生がいるらしいという情報をどこかで得て、更にどうやらモモにチップが付けられているらしいということも分かつた受験生がいるとする。彼は自分でも探してはみたものの残念ながら見つかることなく夜になつてしましました。

そして彼は夜が明けてから午後三時までの試験期間最後の日中に見つかるかどうか不安で、今晚が試験期間中最後の夜だとふと思いました。とまあそんな受験生がいるかもしない、と思つてちょっと来てみた所かな」

続けてクロアが言つ。

「俺達はチップを持していくて期限まで時間が空いている」じつと聞いていた少年の目には困惑の色が浮かぶ。

「何が言いたい……？」

左右に携帯ライトを振りながら、

「時間に余裕のある人手がここにあって、もしチップが見つからなくて君が困っているのなら、寧ろ君は何を言いたい？ と質問を質問で返すよ。悪いけどこれ、誘導してるからね」

最後にユイスは真剣な表情になつて言つた。

一瞬それに怯み、少年は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「……探すのを手伝つて欲しい、とでも言えばいいのか……？」

平然とユイスは切り返す。

「手伝いが必要ない、言いたくない。なら言つ必要無いね」

「君はどうしたいんだ？」

迷つた少年は、重い息を吐く。

最早頭の片隅で考えていた行動を起こす気は失せていた。

「う……はあ。……チップを探すのに、手を貸して欲しい

「ああ。協力しよう」

「良いよ。じゃ、早速始めようか」

余りの軽さに少年が唖然としていると、ほらじゅぢだよ、とライトを持つたまま一人は少年を招くように湖畔に向かって行つた。

「宣言通り、ですか」

湖畔からかなり離れた樹林の木の上で、暗視スコープを通して様子を監視していたエストの呟きは木々の音に紛れて消えた。

『報告します。新たに受験生一名が湖畔に向かっている模様です』通信が入り、簡潔に答える。

「了解しました」

暗視スコープから目を外すと、暗闇に紛れたままその場を後にした。

それからしばらくして、空の様子が変わり始めた。

風の流れの変化によって樹林を覆っていた雲は流され、星明りが辺りを照らす。

耳に入つてくる話し声と光に、湖畔で爆睡していたミヤネの瞼が動く。

「ん……」

ゆっくり身体を起こして光がついている方を見る。

クロアとコイスの他に、二人の受験生と合わせて四人がやや離れた所で、地図を光で照らして囲みながら話をしていた。

そつと立ち上がり近づいていくと、

「お早づけでいます」

「おはようございます」

一人はそう言った。

「お、おはよう……？」

その言葉はまだ早いよつた、とミヤネは微妙な表情で言つたが、残る一人も似たような表情だった。

徐にクロアが立ち上がりミヤネに近づいて言つ。

「この二人のチップ探しを協力することになった」

後ろでまた話しが始まつたのを見ながら、まだ頭はぼんやりしていた。

「そ、そ、う、なんだ。私も、手伝おうか？」

「手伝いたいなら手伝うと良い。俺達は手伝うと決めた」

そう言ってクロアは元の場所に戻つていった。

ミヤネは一気に意識がはつきりしていく。

（……まだ。この感じ……）

そつと胸に手を当てる。

靄がかかつたよつた、何だか少しだけ嫌な感触。はつきり手伝つて欲しいと言われたのではない。

手伝うかどうかは自分の意思の問題。

突き放されたよつた、そんな気がした。

「手伝いたいなら手伝うと良い」

その言葉は裏を返せば、

「手伝いたくなれば手伝わなくて良い」

という意味にも同時に感じられる。

自分は手伝いたいのかと心に聞くと、底の方には戸惑いと躊躇があつた。良く知らない人に協力するのは、と。

（私だけ一人に殆ど手伝って貰つたようなもの……それなのに）心にそういう気持ちがあつたことが嫌だった。

その嫌な感じを振り払つたために、だから手伝おう、それも何かひとつかかる気がして。

最初から、はつきり手伝つて欲しいと言つてくれた方が楽だったのに。

それなのに彼らの問いは、どうしたいのか、とそればかり。

それでもミヤネは喉に詰まるような感触をぐつと堪えて、

「私も、手伝うよ」

そう言った。

「……あの、わざわざありがとう

「お願い、します」

二人は少しきこちない様子でミヤネを見て言つた。

「う、うん……！」

一瞬目を見張り、頷いたミヤネの表情は晴れていた。少し、嬉しくて。

気がつけば何とやら、四日目、試験期間最後の日中となつたレーゲ樹林はそれまでとは違つた。

ラストスパートといえばそうかもしれないが、十数人の受験生が複数のグループに別れ、それぞれ地図を持ち、樹林外側の山傾斜部の木々に取り付けた目印を元に、手分けして捜索をしていた。

湖畔の上空で、スコープを持った一人の試験官が言つ。

「現在の回収数は十一、中々優秀ですね。受験初回組での状況を実際に見るのは初めてです」

スコープを覗き込みながらエストが言つ。

「過去に事例はあります。これもその事例のうちの一つ。今日の行動だけではなく、全体的な行動に評価の重点を置きます。ただ協力すれば良いというものでもありません」

試験官は顔をひきつらせ、

「……ええ。そうでないと自分は受かってないと思います」「私もです」

エストは表情一つ変え無かつた。  
試験官は気まずくなつて黙つた。

昼も過ぎ、集合場所である湖畔には搜索を諦めた受験生や、数少ないチップを見つけ出していた受験生が集まり始める。

そして、タイムリミットの午後三時。

四十人から一人少ない三十八人の受験生が集合した。

エストが時計の針が午後三時を示したのを確認して通る声で言つ。「只今を以て試験時間を終了とします。それではまず時計を前の箱に返却して下さい」

まず時計、と言われて荷物を背負つた受験生達はそれぞれ所定の箱に返却した。

「次に、所持している場合は回収したチップを私に提出して下さい」とすると、一瞬場が静まり返つた。

前の方にいたクロアがコイスとミヤネに声を掛ける。

「行こう」

一番最初に迷わず足を踏み出し、コイスもそれに続きエストの元へ歩き始める。

慌ててミヤネも続き、それに他のチップを回収した受験生も動き始めた。

「田の前につくと、クロアが言つ。

「提出する前に「コリント、エサリア、クローツの三人は試験官に伝えたい事があります」

「聞きましたよ。どうぞ」

エストは首肯した。

「ありがとうございます」

するとほぼ同時にクロアとコイスはミヤネの方を見た。

（え？ え？）

ミヤネがキヨトンとして、二人を交互に見ると、コイスがあれだよあれ、と口パクして、クロアは黙つて頷いた。

一步前に出て、恐る恐る小さめの声で言つ。

「えつと、あの……私達三人は、協力し、三枚のチップを、回収しました」

すかさず一人ははつきりと口を揃える。

「右に同じです」「右に同じです」

ミヤネは目を見張つて驚き、エストは僅かに眉を上げる。

「そうですか。分かりました。では提出して下さい」

「ユイス・エサリアです」

「クロア・クローツです」

「ミヤネ・コリントです」

そして三人は順にエストにチップを提出した。

他の受験生もチップを提出し終えた所で、エストが呼びかける。

「試験結果は郵送で通達します。それでは飛空艇の到着次第、ホーム上空に帰還します」

その瞬間、受験生達の小さな歓声が上がり、かくしてレーゲ樹林での試験は終了した。

帰りの道程は湖畔上空に到着した人員輸送用の飛空艇に乗ることとなり、座席についた受験生達の多くは緊張も解け、疲れきった表情であつという間に寝入った。

それをよそに、飛空艇後部にある硝子張りの展望室の一角でユイスが尋ねる。

「さて、何かな」

「ヤバはもうおと口を開く。

「えっと……ちゃんとお礼を言ってなかつたから、言っておきたく

10

なるほど、と二人に納得したよ、な表情をした。

ニヤネた風を下げる

「一人共、本業にありがとが」もいました。

アーティストとしての色彩表現を、より広く世界へ広めたい

どういたしまして、こちらを一緒に探し

「どういたしまして。一緒に探しとくねてありがとうございました」と、おおむねした

「...」

満足したように小さく頷いた。

微妙な沙黙が流れる

通して見える風景に目をやつた。

しかし、ミヤネは耐え切れず、

「あのさ、えっと……また会えるかな？」

とつねんかんじて、

（ちよつと、何語ってんの私！）

内心突き込みながら恥ずかしさで顔が赤くなる

開き、

「生きていればまたいつか会う」とはあるよ、なんて、そういうの

大正二年五月

ミヤ木にはぐくはぐく口を動かすが声  
ははと這う間にぐらがした  
が出ない。

「次は、上で会える」

「へ？」

クロアの言葉に虚をつかれた。

へえ、とユイスは面白そつて尋ねる。

「それは確信？」

クロアは頷く。

「そう考えて良い。不合格になる気がしない」

「結果が不合格でなければ、合格、か。なるほど。とりあえず僕は眠くてさ、戻るよ」

言つてユイスは手を上げて通路に向かつて行つた。

ミヤネはますます微妙な空気になつたような気がした。

「う、あー……私も、席に戻るね

分かった、とクロアは頷きミヤネもユイスの後に続いた。

（何だろつ……話しくい……。眠い）

試験中、休息時以外は殆ど探してばかりだったミヤネは実際それ程二人と話していない。

「のまま話さず終わるのは何か物足り無いような気がして、それでいて何を話したら良いのかもよく分からなかつた。

飛空艇の移動は一時間も掛からずに終了した。  
ホーム上空に到着するとエストが自由解散の号令を掛け、受験生達は飛空艇を降りた。

眼下には一万戸を超える木造の建物が間隔を空けて建ち並び、受験生達はそれぞれの寮に戻り始める。

一緒に降りた三人は互いに挨拶をする。

「クロア、ミヤネ、それじゃまたね」

「ああ、また。ミヤネも」

一人はきちんとミヤネにも手を上げて別々の方向に飛んで行き、「またね！」

ミヤネは大きめの声を掛けた。

言葉通りにまた会えれば、そう思いながら。

遙か空高く、半球状の外観をした硝子張りの間。すらりと背の高い人物は悠然と浮きながら田の前の少年に問いかける。

「クロア・クローツよ、探索士を志望する動機は何か」

煌めく白銀の髪は長く、目は澄み渡る空よりも澄んだ蒼。柔らかな余裕を持つた袖と裾のある服は統一された白。殆ど飾りの気とは無縁の服装でりながら、厳かな存在感がその場を覆っていた。

その人物に向かい合うクロアは答える。

「レムリア様が探索士という職業に課した制約が多いからです」レムリアは瞬きをして、一つ間を開けて促す。

「説明を続けて貰えるか」

「はい」

クロアは首肯した。

「レムリア真国にとつて、探索士といつ職業は根源的に必須ではあります」

日々、緩やかに移りゆく中、期の節目は自然と人々の移動が多くなり慌ただしい。

大きな荷物の移動を済ませ、一年を過ぎした寮で皆とお別れ会をし、ミヤネは互いを励まし合つた。

そして出立が最後になつたミヤネは鞄を手に寮の前で女性と向かい合つていた。

「リーズ聖、一年間ありがとうございました」

リーズと呼ばれた女性は優しくミヤネを抱きしめる。

「はい、どういたしまして。探索士は大変だけど頑張つてね。ミヤネならきっと大丈夫」

「はいっ、頑張ります。聖、私必ず手紙出すからね」ミヤネは抱きつき返して言った。リーズはミヤネの頭を撫でながらそっと離れる。

「ええ、楽しみに待つてます。……また会いに来てね」

「はい！ では、行つてきます！」

元気よく答えると手を振りながら浮き上がり、リーズも手を振つて見送る。

「行つてらっしゃい」

「行つてきますー！」

リーズを向いたまましばらく手を振り続けながら後ろに進み、リーズの姿が小さくなつてようやくミヤネは聳え建つ超高層巨大建造物を向いた。

行き先は真央柱。

その最上層で、コイスは普段通りに話していた。

「志望動機、ということ。そうですね、当初の自分の意思は余り関係なくクロア・クローツが探索士を目指すことにしたから、そして合格した以上、例えば、来るべき日に向けて再び真国が行く先とするまだ見ぬ地を探す力になりたいと思つから、とか、挙げれば他にもあります、特にこの二つです」

はは、とはぐらかすようにしてわざわざした笑みを浮かべた。それを聞いたレムリアは数瞬置いて、口元にそつと手を当て、くつくつと笑い始める。

「なるほどなるほど、真にお主達は聖達から聞いていた通り、興味深い。……敢えて多くは語るまい。と、それだけでは寂しいものがあるだろ？」このような志望動機を先程聞いた。『コイス・エサリアが探索士課程試験を受験すると言つたので、私はそれにとにかくついていくために受験してこうして受かりました。理由はそれだけで、特に探索士を志望してはいませんが探索士課程には絶対進学します』とな

面白そうにレムリアはそう言い、コイスは頭に手を当てて軽く言

う。

「はは、そうですか。その答えは本当に正直ですね。因みに僕はそれ、正直に嬉しいですから」

「ほひ。お主の正直さも引け劣らす何とやら、であるな」

その頃、真央柱の地上エントランスにミヤネはよつやく到着していた。

硝子張りの天井、全体的に広々とした広間を奥に進み、真央柱本体に通じるゲートの前に辿りつくると、すぐに職員が近づいて来る。

「パスポートを提示して下さい」

「はっ、はい」

真央柱の通行許可証、パスポートを緊張気味に出して見せた。

「結構です。ゲートを通り、右手に進んで下さい」

確認が取れると職員は手で促した。

先に進んでも特段先ほどまでと見た目に大きな変化はない。

右手に進んでいくと間もなく地上と空を行き来するための幾つものエレベーターがあつた。

職員の案内に従いミヤネは直通のエレベーターに乗り込む。

扉が閉まると動き始め、急激に加速していき、思わず目を輝かせる。

「わああ」

エレベーターからは真央柱の外が見え、高速で地上から離れていくつた。

「三十秒後、無重力圏に突入します。注意して下さい」

少しして今度は減速し始め機械音声が流れた。

三十秒後、警告通り無重力状態になり、エレベーターにつけていた両足が力も使わずにふわりと浮きあがり、

「もう外気圏なんだ……すごい」

咄嗟に手すりに掴まりながら声を上げた。

そして間もなくエレベーターは停止し扉が開いた。鞄を持って飛

んで出るとそこには制服を着た人々が飛び交っていた。

「探索士課程後期試験合格者のミヤネ・コントですね」

「あ、はい」

「では、こちらに付いてきて下さい」

不意に近づいてきた職員にそう言われてミヤネは従つた。一本のポールのある円形にくり抜かれた穴を通り更に上層に上がり、途中何隻も飛空艇が停泊している様子が見えた。

「飛空艇がいつぱい……」

ミヤネはキヨロキヨロ見回しながら職員の後についていく。そして最上層の廊下と思われる場所に辿り着き、大きな両開きの扉の前に案内された。

「中へどうぞ」

「は、はい」

促されて扉を開けて中に入ると、

「うええつー？」

叫び声を上げた。

がらんとした広間の中心に浮くレムリアはぱくぱく口を開いているミヤネに、

「近くに来なさい」

特に気にせず声を掛け、手招きした。

「はつ、はいつ！ 申し訳ありません！」

我に返つたミヤネは急いで飛んでレムリアに近づいた。

「慌てずとも良い。これは試験ではないから安心して良い。……さて。ミヤネ・コントよ、探索士を志望する動機は何か？」

レムリアは落ち着かせるように尋ねた。

「……はい。私が探索士を志望する動機は……。國の外がどうなっているのか、どうしても見てみたい、そう思つて。探索士が撮った写真や描いた絵を見て、感動しました。私が感動したように、私も同じように探索士になつて誰かを感動させられたらつて……上手く言えないですが、それが志望動機です」

「ふむ。……国外を見るために、この国を出よつとは思わないのだな？」

レムリアは冷静に尋ねた。ミヤネは気まずそうに言つ。

「それは……はい。一度と戻れないのは……嫌です。私は真国が、真国の人々が好きなので……」

それを聞いてレムリアは優しい表情になる。

「そうか、分かった。……これからに付いてきなさい」

「は、はいっ」

硝子張りの突き当たりに移動すると、そこには円盤型の乗り物が停まっていた。扉を開けてそれにレムリアが乗り移り、ミヤネにも乗るよう勧めた。

「失礼、します」

荷物を手に控えめに乗り移ると、

「では、行こう」

一瞬にして眼前には浮遊島が迫つていた。

「ええええっ！？」

叫び声を上げて後ろを振り返ると、遠くに真央柱の上層付近が小さく見えた。

「探索士試験合格者は私が少し質問をするついでに、こうして送ることにしている。飛空艇の方が良かつたか？」

「い、いえ、そんな事ありません」

一瞬にして超高速で移動していた事に混乱しながら勢い良くミヤネは首を振つた。

少し速度は落ちたものの尚高速で浮遊島の透明な海の上を進み、あつという間に海岸に着いた。

「あの日の前に見える建物がミヤネの新たな学舎であり、生活の場所。寄り道せずに行けるな？」

レムリアは首を僅かに傾げて確認した。

「は、はい！」

「良い返事だ。それでは行きなさい」

ミヤネは鞆<sup>ミ</sup>と強制的に円盤から浮いて海岸に降ろされた。レムリアがそっと手を上げるのを見ると、次の瞬間レムリアはそこから忽然と姿を消していた。

「び、びっくりした……」

ミヤネは肩の力を抜いてそう声を漏らした。

気がつけば地に足が付いていて、重力が働いているのを感じながら、ゆっくり自分の向かうべき建物に向き直る。

「よし、行こう!」

こよいよ探索士を田指すミヤネの新たな生活が、始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1263w/>

---

絶海のレムリア

2011年11月27日15時34分発行